

---

# **I S 卑怯は正義だ！**

祿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 卑怯は正義だ！

### 【Nコード】

N7572V

### 【作者名】

祿

### 【あらすじ】

男なのに何故か女っぽい！ 《卑怯》をモットーに生きていく男の娘、卯月<sup>うづき</sup>天音<sup>あまね</sup>がある日、高校入試の会場で迷い中学からの親友である織斑一夏とISを起動してしまう……。

原作やキャラが崩壊することが多いと思われます。

駄文で短かったり長かったりします。

文才はカケラも持ち合わせてありませんが冷たい目でも見守ってくださいれば嬉しいです。

## プロローグ

### とある研究所

暗い部屋に一人で熱心に研究をしている白衣を着た男性がいた。ある細胞に赤い水滴をたらし、顕微鏡で観察する。

「やったぞ！ 成功だ！」

男は勢いよく立ち上がり、喜びの声をあげる。そして後ろのドアが開き、眼鏡をかけた男が入って来た。

「やりましたね！ 博士」

「ああ、これで少しはこの世界が変わるといいんだが……」

2年前、篠ノ之束が《IS インフィニットストラトス》を発表し、ISが女性にしか動かせないとわかってから女性優遇政策がとられ女尊男卑が当たり前になってしまった。

博士と呼ばれた男はそんな世界は嫌だった。

男尊女卑も嫌だった。

博士の理想の世界は……男女平等な世界だった。

「きっと変わりますよ」

「そうか、なら仕上げをするか」

「はい！」

そういうと男達はその部屋から出ていく。

扉がしまったあと、顕微鏡のプレパラートについてる赤い水滴を垂らされた細胞がエメラルドグリーンの輝きを放った。

# 1話「早くもいがみ合い」

「……………」

「「……………」」

「……………（ニヤニヤ）」

入学初日、俺は隣にいる親友の一夏がクラス全員の熱い視線を背中に受けて辛そうにしているのを横目で見ていた。

ちなみに一夏の席は真ん中の列の1番前という残念な席だ。

一夏は俺に気づいていない。

「皆さん入学式お疲れ様でした。私はこのクラスの副担任の山田真耶です、1年間よろしくお願いします」

「「……………」」

反応なし……仕方ないっていえば仕方ないけど、先生涙目だよ？

「そ、それじゃあ自己紹介してください」

持ち直したか、というかこの先生は胸さえなければ中学に入学できる気がするんだけど

「では次の人」

「卯月天音です。好きなスポーツはテニス、趣味はゴロゴロする事です。よろしくお願いします」

さて、次は一夏なのだけれども……気づいていないな、こいつ。

「おい、一夏。次お前だろ？」

「えっ？ あ、天音」

「さっさとしなよ」

こいつが恥かくのはいいんだけど、さすがに初日はキツイだろうから気づかせてあげた自分って偉い。

「ええっと、織斑一夏です。よろしくお願いします……」

「「「……………」」」

この状況でどうする？どうするんだ？

「以上です！」

クラスのほぼ全員がずっとける。  
そして一夏の頭をだれかが叩いた。

「まともに自己紹介もできんのか、馬鹿者」

「千冬姉…」

ガン

「織斑先生だ」

「はい…織斑先生」

あれが一夏の姉か、すごいパワフルな人だな。  
ていうか今ので姉弟だって知られたよ？  
めんどうになったよ？

「あの、織斑先生。もう一人の男子は今日は欠席ですか？」

「いるだろう、この馬鹿者の隣に」

「「「えっ？」」」

全員の視線が集まる。一夏を持ち上げ盾にする。

「こら！ 天音、俺を盾にするな！」

「私を守ってくれるって言ったじゃない！」

「口調まで変わってるし、そんなこと言った覚えはない！」

ゴン

「もう一度自己紹介しろ」

「はい……」

痛すぎる……、この人きつと鬼だよ。  
怒らせないようにしなきゃ

「卯月天音です。趣味はゴロゴロ、卑怯をもつとくに生きる日本人です。勉強できませんが、運動は程よくできます。感覚的なところが多いので突然変な行動や言動をすることが多々ありますが1年間よろしく願います」

「よろしい、織斑は卯月を見習え」

「ハイ……」

織斑先生は教壇に上がり自己紹介と大まかな1年間全体の予定を話した。

## 休み時間

「ちょっといいか」

「んあ？ 箒」

「君が一夏が熱心に絶賛してたファースト幼なじみの篠ノ之箒か、よろしくね」

「な、いいいー夏！ 熱心に絶賛って！」

「ん？ ただ天音に話ただけだぞ？」

「一夏ーはよいつといでよ。篠ノ之さんが話あるって言ってるじゃん」

「あ、ああ」

一夏と箒が教室から出ていくのを遠い目で見る。

（大人の階段昇ってしまうのか……）

女みたいな外見のおかげで視線が集中することはないのだけれども、何処からか視線を感じる。

こう今までの視線とは違う、興味深々で見てるというより観察されてるような感じた。正直、こういうのは嫌いだ。男らしく堂々とこいや！ あっ俺と一夏以外女子でしたね。

「さて、俺も冒険しに行きますかな」

教室を出て校舎の出口まで行く。

まだ視線を感じ、小さい鏡を手を持ち後ろを確認するが誰もいない。ただ扇子が見えただけ……そう扇子。

「（扇子？ 学園の先生かな？ 男だって信じきれないのか……まあ好都合だけだね）」

やりたいことはやったので教室に戻った。

「はあ……………」

授業中、暇なので隣を見たら一夏が切羽詰まっていた。

さすが必読と書かれた厚い本を古い電話帳と間違えて捨てただけのことはある。

その授業で一夏は織斑先生のげんこつを貰っていた。

「はぁ…災難だった」

「一夏がドジだからだよ。ちゃんとせい！」

「すみません……」

放課後、教室に残って雑談していると山田先生が来た。

「織斑君、卯月さん、寮の部屋のカギとこれが部屋の番号です」

「ありがとうございます」

「……………」

渡された部屋番号は1444号室と書かれていた。

出席番号も4番……4が四つ並んだよ、今年死ぬんじゃないのか？

「天音、いこうぜ」

「ほいよー」

気にしても仕方がないので部屋に行ってみることにした。

「ここか……」

寮の1番端っこだった。

食堂に1番近い部屋だからよかったけど。

カギを開けて部屋に入ると思った以上に広い部屋に驚いた。

「えっと……ダブルベッド、机、椅子、キッチン、冷蔵庫、トイレ、シャワー、クローゼットに冷暖房完備」

おかしい……、日本は確か不況だの何だの言っていたはず。  
こんなものを作ってたのか、少しは他の人の給料上げてやれ。

一度部屋を出て表札を確認する。

卯月天音

うん、一人部屋だ。

間違いなく一人部屋だ。

「うーん……まあいいか、今日はもう寝よう」

考えるだけ無駄だと思い、シャワーを浴びて眠りについた。  
次の日、てきとうにグラウンド5週した後、シャワーを浴びて制服

を着る。

上着はノースリーブみたいにしていてその下は上着に合わせた特注品のYシャツを着ていて、腕にはアームウォーマーをつけている。後はショートパンツにニーソだ。

いやあ、制服の上着に襟がなかったら大変だったよ、いろいろと。

「髪の毛濡れたままだ、……まあいいか」

リボンをポケットに入れて食堂に向かう。

そこでふと思い出す、昨日織斑先生に扇子を持って尾行が上手い人のことを聞いたたら、ここの生徒会長をやってる人だった。名前は何て言ったっけ？

「ええーつと《さらまわし できない》だっけ？」

「豪快な間違え方ね……そんなことできないわけでもないけどしないわよ」

後ろを振り向くと、扇子を広げて口元を隠してる青っていうか水色の髪をした綺麗な人が立っていた。

「あつ、ストーカー発見」

「生徒会長よ。私は更織楯無、ロシア代表」

「こんにちは、代表さん」

「おはようでしょ？ あと楯無でいいわよ、天音ちゃん」

すごく不愉快だ。他の人に言われるのはいいのに、この人に言われるのはすごく嫌だ。

「どうして後をつけていたんですか？」

「気になってね、織斑君は気づかれなかったのになあ」

ああ、ダメだ。

この人とは俺は相容れない存在かもしれない。

「まあいいか、それでは教室に行くんで失礼します」

「ええ、頑張つてね」

俺はその場から離れ教室に向かう。

朝ごはん食べてないけどいつものことだからいいか

「納得できませんわ！」

「はわう！」

大声が聞こえガバツと起きると、金髪の子が眉間にシワを寄せて熱弁していた。

「ねえ、一夏。どういう状況なの？」

「ん？ ああ、起きたのか。今クラス代表を決めてるんだが俺が推薦されてな……それがあいつは嫌らしいんだ」

「なるほど、なるほど」

「だいたい、こんな後進的な極東の島国にすること自体私にとって屈辱的ですねに下等生物イエローモンキーがクラス代表だなんて自殺ものですわ！」

なるほど、あくまでも自分は偉いと思いがった結果があの子か。不愉快極まりない。

「ここで問題」

「いきなりなんですの？卯月さん」

「IS開発者は誰でしょう？」

「篠ノ之博士ですわ」

「その博士は日本人である、丸かバツか」

「!?!?」

おおつと？ 表情が固くなったよ、その表情もいいね。

「さあ、下等生物はどっちだろうね？ 天才を生み出した日本か、たいしたお国自慢がないイギリスか」

どどん頭血が上っていつてるみたいだ。  
肩が震えてる。

「く！ 決闘ですわ！」

「いいね、やろうよ」

「わざと負けたら奴隷にしますわ！」

「なに？ 性奴隷？」

「そんなこといつてませんわ！」

あはは、楽しいねえ人を弄るのって。  
一夏は呆れた顔をしているからまた癖が出たか。

「で、天音ハンデはどれくらいつけるんだ？」

「訓練機でやる、お前は？」

「セシリア、俺はどれくらいつけばいい？」

そついうとクラスに笑いが起こった。

「男が女より強かったのは昔の話だよ？」

「今からでもつけてもらいなよ」

「その冗談いけるよ！」

ああ……なんてウザいんだろう。殺してしまいたい。  
力を見せ付けたいのか？ それでいいんだよね？  
戦闘体勢に入った俺は頭を撫でられる。

「天音、気にするな」

「私は平気だ、決闘でセシリア・オルコットを再起不能にすればいいんだろ？」

ヤッチャウヨー、本気でヤッチャウヨー。

「話は纏まつたな。オルコツト、卯月、織斑は来週の月曜に試合をする。各自準備しておくように」

来週の月曜…… 3日後か、倒す倒す倒す倒す倒す倒す倒す  
倒す倒す倒す倒す倒す倒すセシリア倒す

くくくくく！

その日、早くも一夏は幕にコーチを頼んで土日稽古をつけてもらったりしい。

俺は部屋でゴロゴロしてた。

1話「早くもいがみ合い」(後書き)

生徒会長の出番が早過ぎたと思った。  
もうなるようになる

## 2話「クラス代表決定戦」(前書き)

天音は意外に頭よかったみたいです

## 2話「クラス代表決定戦」

### 第3アリーナ

俺……いや、話すときは「私」にしてるから私で統一しよう。  
私と一夏と篤はピットで一夏の専用機がくるのを待っていた。  
私には専用機を用意してくれないみたいだ。ケチだよな。

『織斑君！ 織斑君！ 来ました、織斑君の専用IS』

そしたら大きい扉が開く、そこには灰色の質素なISがあった。

『フォーマットとフィッティングは実戦でやれ、ぶっつけ本番でものにする』

結構無茶苦茶だな、まあいいか。私は訓練機をとってくるかな。  
また楯無さんつけてきてるみたいだし  
私は訓練機を取りに格納庫に歩いていく。  
誰の目にもつかないところで立ち止まる。

「何こそこそしてるんですか？」

「あらら、バレちゃってたか」

上からフワッと下りてきた水色の髪の人を  
更識楯無……生徒最強が何こんなISド素人を尾行してんだか。  
でも今日は少し雰囲気が違うな。

「何してるんですか」

「あなた、訓練機に細工したでしょ」

スツと目を細めて真剣な表情で聞いてきたのに少し驚く。  
これは逃げられそうにもないな、逃げようもんなら意識をもって  
かれそうだな。

「はい、細工しましたよ。今日はそのISで戦います」

「あなた本気？ シールドエネルギー500あるのを100にし、  
絶対防御もオフにして他は機動性と攻撃に回してあった」

そう、訓練機では勝てないのはわかってる。普通の訓練機ならね、  
細工すれば何とかなるような気がしたから細工した。  
クラスの奴らを見返すためだ。

「ええ、それで勝率上がりましたよ」

「シールドエネルギーが反応する範囲は胸だけだった。一回でも当

たれば下手したら死ぬわよ」

そこまで見たのか、確かにそう細工した。

設定やら何やら変えたが武装もね。

元に戻すのが面倒にならないように基本設定のコピーをとってから細工したけどね。

「当たらなければいいですよ」

「そう、まあいいわ。行きなさい。私は観客席で見てるから」

「はい」

楯無さんの横を通り格納庫に入って訓練機を準備し、ピットに戻る。

ピットに戻ると一夏のISの色が質素な灰色ではなく、綺麗な白になっていた。

『見える！』

一夏はミサイルビットを切り裂き、セシリアに接近する。

うーん、何か一夏の持つてる近接ブレードかつこよくなってない？

『うおおおお！』

ビーーーーー！

『勝者 セシリア・オルコット』

……………なぜに？

セシリアの特殊能力ですか？

やばいやばい、もつと細工をしなきゃ

「卯月、はやくいけ！」

細工を施そうとした瞬間に織斑先生に急かされる。  
逆らうわけにはいかないし……仕方ない。

「天音、いきまーす」

ピットから出ると違和感がしたので打鉄のスペックを開く。

「……!? 細工したはずなのに元に帰ってる！……………あい

っ！」

観客席にいる楯無を睨む。楯無が開いた扇子には『笑』と書いてあった。

アリーナのシールドエネルギーを壊して襲い掛かりたい気分だ。

「あんのさらまわしできないのやつ！」

「何を叫んでいますの？」

振り向くと補給を終えたセシリアがいた。

タイミングが悪い。設定をいじる暇もないのか・・・負けたら私がここに來た意味がない。

『試合開始』

「消えなさい！」

「ちっ！」

放たれたレーザーを近接ブレードで切り裂き、セシリアのブルーテイアーズと距離をとる。

ぱつと見、自殺行為だが天音には書き換える時間が少しでも多くなるからよかったのだ。

移動しながら左手に近接ブレードを握り、直撃コースのレーザーだ

け切り裂く。

「（くそ！ あの女が余計なことさえしなければ）」

そういつつもシールドエネルギーの範囲を胸のどこまで縮め、絶対防御をきって攻撃力に回し、シールドエネルギーの上限を100まで下げ他は機動性に回した。

「いくよ！」

「ふっ鬼ごっこは終わりですよ？ それならさようならですわ！」

セシリアのビットから放たれるレーザーをいとも簡単にかわす。スラスターと右手にアサルトライフルを展開、急上昇する。

「な！？ その武装はどこから！？」

「昨日を弄ったんだよ」

アサルトライフルを撃ちながら接近していくがビットを展開される。ライフルを収納し、もう一本近接ブレードを展開しレーザーを切り裂く。

「だるいなぁ・・・ほれ」

私は巨大荷電粒子砲を展開、引き金をひいた。セシリアにはかわされたがビットは全部落とした。

ちなみに巨大荷電粒子砲は予めエネルギーをチャージしていたのでこっちは少しも減っていない。

収納し、ライフルと近接ブレードを展開し接近する。

「なんて汚い戦い方なんですの!？」

「弱音吐くなよ、代表候補生」

苦し紛れにミサイルビットも乱射してきたがそれかわす。後ろから追尾してくるがそんなのどうでもいい……やられるまえにやる!

「くっ!」

「そおらあ!」

セシリアに近接ブレードを振り下ろすと見せかけて瞬間加速の準備をする。  
イグニッションブースト

セシリアは振り下ろされると思い、後ろに飛びのいた。

「ばあか!」

イグニッションブースト

瞬時加速をして一気にセシリアの横を通り抜ける。  
かなりのGをうけ、体が悲鳴を上げている。

「  
……ばっさいりゅうさん  
抜砕竜斬」

そういうと空中に近接ブレード11本現れ、セシリアを切り刻む。  
うまくいった、不可視モードにして近接ブレードにワイヤーをつか  
て引っ張ればこうなるんじゃないかなって思ったんだよね。

ビーーーーー！

『勝者 卯月天音』

「な!？」

「見たか……ハアハア……これが……私の実力………だ」

どうやら無茶しすぎたみたいでもうもたない。

私は力を振り絞り、それだけ言う意識を失った。

「天音!？」

「一夏! もたもたするな早く行け!」

千冬姉の言葉に体が勝手に動いた。  
ピットの出口まで行き飛び降りると同時に白式を展開する。

「天音! くそ間に合え!」

もう天音は地面と激突しそうなくらい落下していた。

一夏は無意識に瞬間加速をし、地面と天音の間に体を滑り込ませギリギリでキャッチした。

一夏はそのまま保健室に駆け込んだ。

シャア

「織斑、卯月の様子はどうか?」

カーテンをあけ千冬が入ってくる。

「まだ目が覚めない。それに近接ブレードを振るってた左腕に負担が掛かり過ぎてて筋肉断裂を起こしてたみたいなんだ、ライフルをもってた右腕も」

そっつい天音の両腕のシーツを少しめくって包帯が巻かれているのを見せた。

「それに全身に負荷がかかりすぎてるって、ISを……訓練機を動かしてこんなことにはならないって先生が」

「うつ……ん？」

一夏が言い終わると同時に天音が目を覚ました。

目を開けると一夏と織斑先生がいた。

「なんでここに？……っ！」

なぜか体中痛いのが気になることはないだろうと、左腕を支えにして体を起こそうとしたら激痛が走った。

「天音、今は寝てろ」

「じゃあお言葉に甘えて」

織斑先生の前だから何かいつてくるんじゃないかと思ったが何もなかった。

「卯月、お前は絶対防御をオフにして攻撃力に回し、シールドエネルギーも大半を機動性に回していたな。おまけにシールドエネルギーの判定を胸だけにしていただろ」

「な！？ 本当なのか天音！」

「うん。そうだよ……でもどうしてそれを？」

「ある人に聞いたんだ。ちなみにそいつらとお前は同室にする」

あー、楯無さんと同室か……まあいいか。

自業自得だし、自分の尻は自分で拭けるようにしなきゃね。

シャア

「天音さん！ 大丈夫ですか！？」

「卯月、大丈夫か！？」

カーテンを力いっぱい開き、セシリアと箒が入ってきた。  
もうちょっとカーテンに気を使うことを進めるよ。

「うん、ちょっと無茶したから代表は無理かな」

「よかったですわ……いきなり意識を失ったので驚きましたわ」

「心配させるな」

「めんぼくない」

心配かけさせるつもりはなかったのだが、思ったより体がもたなかったみたいだ。  
強くしなきゃな……。

「体鍛えるか」

「お前はすごぶる強いから気にするなよ。むしろ訓練機で勝てただ誇っていいと思うけどな」

私のつぶやきに一夏はツッコミを入れる。  
箸はピクツと反応したけど何だろう。

「まあいい、平気なら部屋に戻れ。ここを寢床にされてはかなわん」

「」「」「はい」「」「」

私は一夏に背負われて部屋に戻ると、楯無さん以外に2人ルームメイトがいることを知った。

「布仏本音、布仏虚、更識楯無、多くないか？」

「そうだね…のほほんさんとお姉さんがいるのか」

一夏におぶわれながら表札を見ると人数が多かった。  
これ……監視？ 怪我したから補助？

「入るぞ？ 鍵は……開いてんのかよ」

「めんどいじゃん」

部屋に入ると、幻が見えた。

だってさ、壁ぶち抜いて無理矢理広くしてるんだよ？ しかも元か

らあったダブルベッドのほかに二つベッドが追加されてるし……。  
幻だね、疲れがたまったのかな？もうねよ。

「……一夏、ダブルベッドに寝かせてくれる？ 疲れてて幻が見えた」

「……ああ、俺も疲れてんのかな。幻が見える」

「一夏も早く寝ることをすすめるよ」

「そうする」

一夏は私をダブルベッドに寝かせてから、部屋に戻って行った。

（起きたら元通りになってますよーに）

そう願いながら目をつぶり、意識を手放す。

### 3話「もはや拷問」

「ねえ、ほんとにわかってるの？ うまくいったから良いものの下  
手したら死んでたかもしれないんだよ？」

「……すみませんでした」

「あっちゃんマ オミたいにちっちゃくなっちゃった」

「本音、茶化さないの」

「わかったのだー、お姉ちゃん」

ただいま、正座して楯無さんのお説教中。  
なぜこんなことになったのかという……ていつか言つまでもない  
よね。

ただ単にISで無茶したからである。  
でもさ、普通怪我人でしかも寝てるときに腹にダイブする？ 私は  
絶対にしない。  
起きるまで待つて、起きたらお説教するね。

ぐい

「聞ってるの？」

「ぎゃああああ！ 聞いてます！ 聞いてますから腕を掴まないで！」

「もう、今日はこの辺にしておいてあげるけど今度こんなことしたら怪我したところ3時間握るからね」

「もうしません。ごめんなさいいませんでした。楯無様」

「よろしい」

そういうと楯無は私から離れていき、椅子に腰をかけるのほほんさんはベッドにねっころがっていて、虚さんは楯無さんの横の椅子に座ってお茶を飲んでいた。

「それじゃあ、自己紹介しとく？」

「めんど」「じゃあしよっか」「…」

拒否権はないみたいだ。

それなら聞かないでほしいよ。

「私は更識楯無。楯無って呼んでね、たっちゃんでも可。生徒会長やってまーす」

「私は布仏虚です。お嬢様がご迷惑おかけするかもしれませんがよろしく願います」

「お嬢様？」

「布仏家は代々更識家に使える家柄なので」

大変そうな家柄だ。

しかもこの人の従者なんですよ？ 苦勞するだろうに……。私だったらそんな家飛び出すね。

「えへへー、メイドさんだよ。珍しいでしょー？」

「のほほんさんはメイドさんの仕事とか出来なさそうだね」

「なにをー！？ お姉ちゃんがやってくれるから平気だもん」

人任せ！？ もうメイドじゃない。ただの怠け者だよ！  
まあ、のほほんさんだからいいけどね。

「じゃあ、私は卯月天音です。男ですがこの学園では女装に近い格好したほうが都合がいいと思いこんな格好してます」

「……話には聞いてましたが本当に女の子みたいです」

「でしょ虚ちゃん。着せ替え人形にしたいくらい」

なにこの人！？ 男に何しようとしてんの！  
織斑先生に言って部屋割変えてもらわないと。

「ふふふ……、無駄よ。織斑先生も貴方のしたことにござ腹だから」

「でしょうね。あと人の心読まないで下さい」

「あら、ごめんなさいね」

謝ってない……絶対に謝ってないよこの人。  
何考えてんのかわかんないなあ、誰かわかる人いたら説明してほしい。

「天音ちゃん、寝なくていいの？」

「何する気ですか？」

「何よう、何もしないわよ」

嘘だ、絶対なにか企んでる。

そんな顔してるし、微妙に目がすわってる。

寝たら何されるかわからん……寝ないように誰かにメールをするか。

パカッ

新着メール105件

「おかしいだろおお！」

「静かにしなさいよ。虚ちゃんと本音ちゃんが起きちゃうでしょ。それにメールが105件来てたくらいで驚かないの」

「なんで知ってんの！？見たの！？ 個人情報の塊である携帯電話の中を見たの！？ ていうかいつの間にねたの？」

「落ち着きなさい。私は見てないわ。ランプのとこ光ってたから爆弾かと思って確認したの」

「それを見たと言わずに何を見たと言えればいいのですか！？」

「ガン見とか確認の最中で現行犯とか？」

「なんて人だ……この人に隠し事できないのはこの人に常識が通用しないからなのでは？」

楯無さんはニヤニヤしながらこっちを見ている。

そう何かをいいたげに、とてつもない事をいいだしそんな感じで……。

「ねえ、立花茜たちばなめがねって子とはどういう関係なの？」

「中まで見られてると思うってたけど、まさかほんとに見てるとは……。ただの幼なじみですよ」

「ふーん。ただの幼なじみなんだあ」

「??? 何ですか？」

メールの返信しながら楯無さんの言った言葉が気になり、聞き返す。  
てか茜の奴はどんだけ心配性なんだ？ 『虐められたりしてない？』  
『ついていける？』 『友達できた？』 とかバツカリだよ。  
他の奴は『今度うちにきてどんななのか語れ』とかだしなあ。  
それに比べたら優しいのか…。

それから楯無さんに私の昔話をさせられた。

何で私の昔話何だろうね、絶対につまんないのに。

「ふう、天音ちゃんの昔話聞けて嬉しかったわ。もう寝ましようか」

「ええ、寝れる時間でしたら私も寝るとこなんですが……」

時計をチラ見、時刻午前6時30分

「寝たら絶対に起きれない」

「……そうね。まあ仕方ないわね。今日も頑張りましょう！」

ああ…空元氣しかでないよ。くっそー、右手は何とか使えるけど利

き手の左が使えないからノートもまともに取れないよ。  
寝む過ぎるし、昼休みに寝るか…よし昼休みまで頑張るか。

私は制服に着替えて準備する。

「着替えるのはやいわね……」

「簡単に着れますからね。アームウォーマーやニーソはあれですけど」

「写真撮れなかった……ショック！」

「とらなくていいんですからね！」

危険だ……盗撮犯がここにいる。何としても織斑先生を説得して部屋割を変えなければ！

「……土下座か…脅迫か……」

「あの人に脅迫する勇氣があるのに感心するわ」

「うるさいなあ、楯無め」

「いいのよ、それで」

イタズラ好きの子供みたいなきみを浮かべる楯無さんにため息をつ

く。

”盾”は unnecessary なものでも、人を守るのにも、自分を守るのにも邪魔なものでもない。

『攻撃は最大の防御』という言葉があるが、相手による所が大きい。でも更識家はそんなことなんて通用しない家系なんだろう。

なら部外者である私は口出しする権利はない。

ただ言えることと言えば……

「先輩…一人で抱え込まないくださいね。辛い時は甘えてください」

「どうしたの？ いきなりそんなこと言われたら、おねーさんキュンときちゃうわよ」

「ポイントゲットですね　じゃ食堂いつてますね」

そついうと私は部屋を出てドアに背中を預ける。

（たく、いつも気を張りすぎなんだよ……体壊すぞ。　あーねみ……食堂にいつてラーメン食べよ）

私はトボトボと食堂を目指して歩いていった。

「あー……ねむ」

「大丈夫か？　ちゃんと寝たのかよ」

「一睡もしてない……」

一夏が呆れたような顔をする。

おいおい、そんな顔してると織斑先生に

「織斑、オルコット。ISを展開しろ」

「わかりましたわ」

「は、はい」

セシリアはすぐにISを展開したが、一夏の方はとまどってるみたいだ。

「はやくしろ。熟練したIS操縦者は展開に1秒もかからんぞ」

「うっ！……来い！ 白式！」

と、いうわけで一夏は無事に展開することができましたとさ。めでたしめでたし

「卯月、くだらんこと考えてないでお前も打鉄に乗れ」

「はい」

考えを読まれたことに悔しがりながら打鉄に乗る。

「よし、それでは飛べ！」

合図が出るとセシリアが一目散に飛び上がるが、やっぱり一夏はモタモタしている。

「いくぞ、一夏」

「えっ!？」

一夏の手を引っ張りセシリアを追う。  
途中で手を離して自分で飛ばせる。めんどくさいからね、楯無さんにみられでもしたらからかわれるし。

「何をしている。打鉄はともかく白式はブルーティアーズよりスペックは上だぞ」

「そんなこと言われてもなあ。天音体平気なのか？」

「まあね」

一夏は体で覚えさせた方が早いのに、まああの人もわかってると思うけど。

さて自由に飛ばせてもらおうかな。

セシリアと一夏から離れ、エネルギーの9割をブーストに回した。

「いやっほー!」

セシリア戦の時と同じスピードだけど問題ない。  
今回は絶対防御があるからね! てか怪我したところ3時間も握られ  
たら死ぬし。

「気持ちいいなあ……グガア！」

いきなり……いきなり出席簿が飛んできた。

移動中에서도I Sの絶対防御を貫くほど強い威力で命中させるなんて！

『卯月、すぐに設定を戻せ』

「えー、絶対防御きつてないですから平『今すぐ戻せ』ぶーぶー」

とかいいながら設定を元に戻していく。

だって織斑先生怖いもん、生身で出席簿だけでI Sに勝てるんじゃない？

『度胸は他の奴らよりはあるみたいだな。まあいい、オルコット、織斑、卯月。急降下と完全停止をやれ、目標は地面から10センチだ』

「それでは一夏さん、天音さんお先に」

セシリアが綺麗に降下し、完全停止した。

かつこいいなあ、ガンダムみたいでさ。さて絶対防御をオフにして  
つと……

「じゃ天音、先にいくぞ」

「いつてらっしゃーい」

一夏はすごいスピードで降下していく、そして地面に激突。巨大クレーターを作った。

一夏……君は小型の隕石ですか？

「眠気が……激突したら少しは覚めるかな？」

ふと観客席に妙に見慣れた水色の髪をした悪戯っ子を見つけた。

何やら楽しそうにこちらの様子を見ている。

とくに気にせず上昇する、ある程度高度を上げたら瞬時加速で一気に降下する。

（もうだめ……少し休憩……）

目を閉じて夢の世界に飛び込んだ。

「あれ？ 卯月さん目をつぶってない？」

「あれ起きてるのかな？なんか体に力入ってるように見えないけど」

「卯月さん集中してるんだよ！」

もし地面に激突してもISの絶対防御があるから平気……それが当たり前なのだが天音は絶対防御を無しで戦闘した男なので危険なのだ。

俺は一応白式を用意しておく。

「ん？ はっ！」

目を開けた天音は急いでブーストを逆噴射し、完全停止した。地面から5センチの所で……。

「危ない危ない！激突するとこだった。居眠りは危険だね」

「居眠りしてたのかよ。てことはあれは降下じゃないくて落下だったのか」

「にやはは、絶対防御切ってたから危なかったよ」

「あはは、気をつけろよ天音」

……ん？ まてまで、今コイツなんて言った？  
絶対防御をうんたらかんたらって

「絶対防御をなんだって？」

「切ってた」

ゴッ

ドサッ

「馬鹿者が！」

千冬姉……ISの近接ブレードのみなの部分で人の頭殴ったら死ん  
じゃうよ。

てかなんで生身でそんなもん軽々と片手で振り回してんの？  
実は軽かったり？

「織斑、その命知らずを保健室に運んでおけ。そのあとこの穴を  
埋めろ」

「は、はい」

プシュ……

「約束守らなかった子にはお仕置きだね」

そっついながら楯無が眠そうに欠伸をしながら天音の左腕に抱き着く。

「お姉さんも少し休ませてもらうよ、天音ちゃん」

～～～2時間後～～～

「ぐあぎゃあああ！」

保健室に私の悲鳴が響き渡る。

その原因は横でスヤスヤと幸せそうに寝ている楯無さんがものの見事に左腕をこれでもかかってぐらいに抱きしめているからだ。

罰は確か握られるだけのはず……。

「すう…………すう…んう」

ムニユ

「いいいぎやにいや！」

男だったら嬉しい感触なのだが、怪我してる腕だと全然嬉しくない！  
仕方ない、卯月流痛み止め！とか何とか言って薬をのむ。何で持ってるのかというとそこは私だから。

30分後に効果が出た。

「よく寝てんなあ…、いつおきるんだ？」

ほっぺに手を添えながら楯無の寝顔を見つめる。

何故楯無と一緒に寝てるのか理解できない。お仕置きの中に眠ったのか？

「私じゃなかったら襲われてますよー」

ぷにぷに

「ううん…………にゃ…」

ほっぺを突つついただけでこの反応ですか…………萌えますね。

普段のこの人って悪戯ばかりだからかな？　デレ無さん最高です！  
ていうかこの人の場合おきてそうなんだよね。

「ううん・・・ん！」

ゴキン

「あぎゃああああああ！」

か、関節があああああああ！可愛らしい寝顔で残酷な仕打ちさ  
れたらせめられない！それから泣く泣く楯無さんが起きるまでの1  
時間ずっと痛みに耐えていた。

#### 4話「中華転校生」

朝、目を開けると楯無さんが悪戯な笑みを浮かべながらこっちを見ていた。

「……なんれすかあ？」

「ふふふ、舌が回ってなくて可愛いつ」

楯無さんが私のぷにぷに突つついてきて妙にくすぐりたい。

ちなみにのほほんさんと虚さんは普通のベット、私と楯無さんが普通のベットの2・5倍の大きさのベッドで寝ていた。

「お姉ちゃんって言うてみてよ」

「おねえちゃん」

「んー！ いい子っ、お姉さんが守ってあげる！」

そついいながら抱き着いてくる、当然腕が巻き込まれる。

「あぎゃああああー！」

「あつごめんごめん、めんごめん」

気をつけてほしいよ、お蔭様でおめめパツチリだよ。  
しかも懐かしい謝り方だし。

……まあ楽しそうだからいいか、美人の笑顔見て悪い気はしないし。

コンコン

「はい、どちら様ですか？」

「私だ、専用機が届いたからついて来い」

「あ、はい」

私は制服を急いで着替えて部屋から出たら、織斑先生が立っていた。  
相変わらず纏っている空気が凄い…。

「ではいくぞ」

「了解です」

織斑先生について行く。  
朝早いせいか誰もいない廊下を歩いていく、織斑先生と一緒にいるのは結構緊張する。

「織斑先生、何で私に専用機が持たされるんですか？」

「簡単に言えばデータ取りだ。というか私が無茶するお前のためにある天才に掛け合ったんだ」

「お疲れ様です（天才って誰だろ？）」

「まったくだ。ついたぞ」

ドアの横にある機会にパスワードを入れてドアを開ける。

そこには……頭がでかくてとても太ったドッチボール2個分くらいの猫らしき生物がイカをしゃぶっていた。

「……………」

「……………」

織斑先生もあまりの出来事に驚いた顔をしていた。

もちろん私も啞然としている。

そうしていると猫（？）がこっちに気づいて近寄ってきた。イカをしゃぶりながら

「ほほう、貴様がこの私の子分か」

「織斑先生、今日休んでいいですか？ 疲れてるみたいで猫が喋ってるような空耳が聞こえるんです」

「わかった。私も猫が喋っているような幻聴が聞こえた」

織斑先生も疲れてるのか……確かにいつも気を張ってる感じするもんね、疲れてても不思議じゃない。

「私は猫ではない！ ニャンコ先生と呼べ」

「結局ニャンコなのか」

「うるさい！ この高貴な私がそんな下等な生物なわけあるか！」

「織斑先生、ISどこですか？」

「無視するな！ 私の話をきけー！」

「どこだろうっな……」

「この無礼者め！」

うるさい猫だなあ、一発殴っとくか？

織斑先生も頭に手を当ててるし、誰？ こいつ連れて来たの。

「卯月天音、男だ」

「ふむ。女にしか見えんな。私は斑、ニヤンコ先生とも呼ばれている。ISの待機状態だ」

そうかそうか待機状態か……本来の姿はさぞカッコイイだろう。  
………まてまて

「なんだって？」

「ISの待機状態だ」

「ファーストシフトしないと待機状態にならないはずだが」

「そうらしいな。だが作り主は『常識は壊すためにあるんだよ  
などといったおったぞ？』」

「……束……」

おおう、心当たりあるみたいですね織斑先生。  
是非教えて頂きたい所だけど今はいいや。

「じゃあ、フォーマットとフィッティングしよ」

「気が進まんが仕方ない……。敬意を払って私にのれ」

「ほいほい」

ニヤンコ先生がISの姿になると「ああ……不思議がいっぱいだ」と呟いてしまった。

織斑先生は携帯で誰かに電話してるみたいだ。

ISに乗ると情報が流れこんでくる……酒……イカ……下足……酒……。

「おい、ブサ猫。ISの情報よこせよ！ お前の今欲しいものなんてどうでもいいの！」

『なにを！ この私に対して何たる無礼、小僧覚悟しておけ！』

やっとISの情報がくる。

一夏ほどではないけど近接重視で作られてるみたいで、運動性や機動性が高い上に何故かリミッターが掛かっていた。

「このリミッターって何なの？」

『それはだな、本来の性能や威力が高すぎるから付けているんだ』

「ふーん、危ないね」

『天音が無茶しなければ大丈夫だぞ。ほれファーストシフトできたぞ』

するとISの色が黒から変わった。  
肩と胴と足首から爪先が青、他は白だ。  
確認ボタンを押し、ISを解除した。

「割と早かったね」

「当たり前だ。この私が手伝ってやったのだ、感謝しろ！」

「一度部屋に戻る。チータラならあるよ？」

「いく！ チータラチータラ」

私はニヤンコ先生を抱き抱え、織斑先生に近寄る。  
織斑先生もちょうど電話が終わったみたいだ。

「私は一度部屋に戻りますね」

「ああ、卯月は2時間目から出ても構わない。ISスーツなど色々届いているからな」

「わかりました」

私はその部屋を後にし、出来るだけ人のいないところを通って部屋に戻った。

え、なぜかって？ だって猫抱き抱えてるんだよ？ しかも普通じゃない猫、恥ずかしいよ。

「疲れた……」

私はニヤンコ先生にチータラを渡してベッドに横になる。  
ニヤンコ先生は器用に袋を開けて嬉しそうに食べていた。

「ねえ、あのIS何て名前なの？」

「あまがみ天神だ。あの変わり者が貴様の名前の字をどうしても使いたかったらしい」

飛んだ変わり者だな、顔を見てみたいよ。　ウサミミ付けてたら突っついてやる。  
するとドアが開く。

「あれー？　どうしてここにいるのかな？　サボりはいけないんだぞ」

「楯無さん……絶対わかってて言ってるでしょ」

ふふふ、と笑い隣に腰をかける。

私はISスーツとメモリーと何故か酒、イカ、タコの足が入っていた。

酒とイカとタコは冷蔵庫にメモリーは引き出しに入れた。

「その猫ちゃんは天音ちゃんのペット？」

「猫ではない！」

「あつ喋った」

さすがIS学園生徒会長だ、扇子に『啞然』なんて書いてるけど普通にニヤけてる。  
楯無さんがニヤンコ先生に近づき抱き上げる。

「ツルふか……かわいいー」

「……！！……パク……パク」

愛でられて動揺してるのを見る限り、褒められるのに馴れてないなこの猫。

私はその好きにISスーツに着替え上から制服を着た。  
何故かスーツもノースリーブなんだよね

「よし、全員揃ったな。これより専用機持ちに模擬戦をして貰う。  
卯月、織斑、オルコット、ISを展開しろ」

「「「はい!」「」」

一夏とセシリアはすぐに展開するが私はまだ展開していない。  
ニャンコ先生が女子に愛でられて動揺してるからだ。

「……おい糞猫」

「猫ではないといっておるだろうが!」

「はやく来い」

「言われんでもいってやる!」

ニャンコ先生を抱えISを展開する。

やっとだ、戦場だったら死ぬどころか出撃すら出来ないだろう。

「卯月対織斑とオルコットだ。はじめ!」

「「えっ!?!」」

織斑先生の言葉に驚いてる二人は無防備、狙ってくださいと言わんばかりに隙だらけだ。

右手に緑色の刀身をしたソードを展開する。

「！」

「今更気づいても遅いよ！」

一夏に斬撃を叩き込み、ライフルモードにしてセシリアの方にビームを撃つ。

「くっ！」

「この威力は卑怯ですわ！」

「知ってるかい？ 卑怯汚いは敗者の戯言だよ？」

一夏もセシリアもようやくやる気になったみたいで目つきが変わった。  
嬉しいような嬉しくないような……。

「いくぞ」

「別に来てもいいけど、セシリアならともかく一夏のは死ぬかもね」

「どうしてですの！？」

「私が絶対防御をきってないって保証はどこにもないからね」

「「!?!」」

くくく、焦りはじめたな……残念ながら今回は嘘だ。  
そう毎回オフにして楯無さんのお仕置きくらってたらホントに死ぬからね。

『織斑、オルコット。そいつのISはオフに出来ないようにしてあるから平気だ』

……………台なしだ……………

「遠慮なくいくぞ!」

「いーよ」

一夏と剣を交える。その間にセシリアはビットを射出していた。

「(うーん、これ以外に武器ないの?)」

『あるぞ。そのGNソードがもう一本』

「(まさかこのISって……)」

『GNドライブ搭載型だ。後ろの12枚の羽にマウントされてるの

がGNソードビットだ』

セシリアの攻撃をかわし、一夏とやり合いながらニャンコ先生と会話していたせいか、変な目で見られた。

てかこの猫、重要なとこの情報隠してやがったよ。

『ちなみにソードビットはライフルモードに変えることが可能だ。ワンオフアビリティーはトランザムだ。覚えておけ』

「もっと前に教えてほしかったよ!」

「「?」?」

くうー! この猫といい、楯無さんといい何考えてんのかまったくわからん  
仕方がない……あれを使うか

「セシリア! そんなに撃つてるとこれに当たって燃えちゃうよ?」

そっついながら一夏の寝顔写真を見せる。

セシリアは攻撃をやめて苦虫を潰したような顔をしていた。

「ひ、卑怯ですわよ! 人質だなんて!」

「あれ？ いらなかった？」

「そういうわけでは……………」

「なら今すぐ降参するんだ！ そしたらこれを「降参しますわ！」物分かり早くて助かるよ」

「え？ セシリアどうしたんだ？」

ISを解除するセシリアを見て不思議そうな顔をしている。  
私は一夏の周りに6機ビットを展開しライフルモードにする。  
もう6機のビットはソードにくつつけバスターソードにした。

「…………え」

「どうする？」

「こ、降参です」

「よろしい」

地上に降りてISを解除する。なんて締まりのない模擬戦なんだろう…………出席簿の一発は覚悟しよう。

「まあこんな戦い方もあるがそれは学園の中だけの話だ。真似しないように…今日はここまで！」

「なるほど…… ああやれば専用機持ちに勝てるのね…」

「私も弱み握ってあんなふうにやりたい………」

「織斑君の寝顔写真欲しかったなあ」

「わかる!」

いけない方に進んでしまったような気がするが気にしたら負けだろ  
う。

セシリアに写真を渡し、ついでに昨日あった一夏の代表決定お祝い  
パーティーのときに、隙について取っておいたセシリアと一夏が手  
を繋いでいるツーショットも渡してあげる。

「あなたは天使ですわ!」

「いえいえ、それほどでも」

セシリアは上機嫌のまま更衣室に行った。

今日みたいなこととしてISの性能はあまり見せないようにしないと  
…。

「汚いやつめ、正々堂々と戦えんのか!」

「ニヤンコ先生は気楽だね。 あんな性能を人前に晒すと変に期待さ  
れるじゃん」

「嫌なのか? このチキンめ」

「今日はお酒とおつまみなしね」

「私が悪かった！ 酒！酒飲みたい！」

「わかってます」

ニャンコ先生を抱き抱え食堂に歩いていく。

「……ねえ、あの猫ぬいぐるみかな？」

「卯月さん可愛い趣味してるね、猫不細工だけど」

「卯月さん……貴女を私の物に……ハアハア」

奇っ怪な言葉が聞こえたんだけど……私はこの学園に居て平気なのかな？

「ニャンコ先生、何食べるの？ 私はラーメンにするけど」

「なに！？ 私もラーメンだ！ 夜はグラタンだ！」

「夜グラタンあるかなんてわかんないよ？」

食券を買いおばちゃんに渡すと5分出てきた。相変わらずの手際です

何故か両方共デザート付き、ありがとうございます。

「席どこか空いてないかな？」

「おい天音！ こっちこっち」

声のするほうを見ると一夏と懐かしい顔がいた。席についてマジマジと見つめる。

「一夏……この子鈴に似てない？」

「本人よ！ 1年いなかっただけでわかんなくなるな！」

「ほ、本物！？ 鳳鈴音！？」

「相変わらず変わってないわね……また綺麗になっちゃって」

呆れながらラーメンをすする、一夏の話によると中国の代表候補生で2組のクラス代表らしい。

「ていうか天音、その器用に箸を使ってラーメンを美味しそうに食べてる猫はなに？」

「私のISの待機状態だよ」

「またその口調なのね。そんなんだから中学の時にファンクラブが出来るのよ」

「一夏あの時の会長って誰だっけ？」

「鈴だぞ、率先してやってた」

「う、うるさいわね！」

鈴は顔を赤くしてラーメンの汁を飲む。  
男らしいよね、れんげ使わないんだよ？

「天音、チャーシューくれチャーシュー」

「いいけど太るよ？ ニャンコ先生」

「私は太らない体質だから無用な心配はいらん」

確かにIS出しね、むしろ太ったら驚きだよ。  
でもニャンコ先生って酒飲むと酔っ払うんだよね。

「……もう何も突っ込まない」

「まあ天音だからな」

失礼な奴だ。

もうほら、隣にいるのほんさんが笑顔でニャンコ先生とじゃれてるじゃないか

「一夏、放課後空いてる？」

「んー練習終わってからなら」

「じゃ、その時に行くから空けといてよね」

「おう」

鈴はお盆を返して教室に戻って行った。

午後の授業は確かISの基礎理論だっけ？ 眠くなるなあ。

「天音、食い終わったなら戻ろっぜ」

「うん、ニャンコ先生行くよ」

「なら助ける！ 薄情者め！」

のほほんさんから逃げれないのね、仕方ないからのほほんさんに連れてきて貰うかな。

その場にニャンコ先生を置いてお盆を返し教室に戻った。

「だいたい、貴様という奴は仲間を見殺しにするということは重罪だぞ。わかっているのか！」

「ニャンコ先生…授業中だからね、静かにしようね」

「うるさい！ 貴様には説教しなければならん！」

いや、その姿で机の上に座ってその短い手で机を叩く仕草が女子のハートをいぬいてるんだよ。

さつきから後ろの女子なんて「もう少し体を横に……」って訴えてきてるもん。

「今日のお楽しみが無くなってもいいなら説教聞くよ？」

「汚いぞ！ この卑怯者め！ 今日の模擬戦だって無駄に注目を浴びないように手を抜きおつてからに」

「後でちゃんと聞くよ」

「ならいい、私は少し寝るぞ。膝貸せ」

そういうとニヤンコ先生は私の足の上で丸くなって寝た。  
女子の目が私の足に集まり、チラッと自分の足を見て肩を落としていた。

「はあ、卯月……」

「……すみません」

「まあ仕方ない。では授業を続ける」

織斑先生……あんたええ人や！  
ていうか、この猫作ったの誰？ おしゃべりにも程があるよ。

「ああ、言い忘れてたが卯月。お前は副代表としてクラス対抗戦に出場することになってるからそのつもりでいろ」

「……はい？なぜ？」

私の疑問を無視し授業が再開される。  
ここに神はいない……。

場所変わって自室

「へー、大変だったみたいね」

「ニャンコ先生は大人しく出来ないみたいですからね」

「ふふふ、いいじゃない」

楯無さんがニャンコ先生とジャレてるのほほんさんに視線を移す。  
ニャンコ先生は諦めたみたいで抵抗しない。

「天音ちゃん……キスしていい？」

のほほんさんがピクツて動いた。ニャンコ先生が脅えてる気がする  
んだけど気のせいかな？

だって織斑先生の殺気にさえ気づかない程のニブチンだからね……  
そんなわけないよね？

「楯無さん、キスはほいほいするもんじゃないですよ？」

「大丈夫！ 初めてだから」

「そういう問題じゃない！ ていうか私もうファースト終わってますよ？」

空気が凍りついた……いや……ひびが入ったかな？

楯無さんは目を細め、のほほんさんはニヤンコ先生を解放し、近寄ってきた。

デンジャーデンジャー  
生命の危機を感じる。

ぐい

「おわっ！」

楯無さんにベッドに押し倒され、のほほんさんと一緒に詰め寄られる。

その目がすごく冷たい目をしていて怖すぎる。

「いつどこでだれとしたの？」

「正直に吐いてね？ あっちゃん」

「え、えっと……中3の時に屋上で事故で二人同時で……」

「二人？ 誰と誰なのかな？」

「そ、それはプライバシーの侵害になあああああああ！」

楯無さんに重傷の左腕を踏まれる。  
はやく言えってこと！？ それにしても過激！

「立花茜と井上美咲でしょ？」

「その声は鈴か！ なぜそれを？」

「一夏が言ってた。あー後さ対抗戦のときあたしと一夏の二対二で戦わせてくれない？」

「ん？ 一夏は鈴との約束覚えてなかったのか？」

「まあそんなところ」

「わかったよ。そちらの副代表と一緒に見ててあげるよ」

「ありがと、じゃごゆっくりー」

鈴が部屋から出ていく。

和んだなあ……空気が和んだ。うん、せつかく和んだのにまた凍りついた。

この人達は何がしたいんだ？

「天音ちゃん……こっち向きなさい」

「は、はいっ！ なんう！」

楯無さんにいきなり唇を奪われた。

唇が離れた瞬間のほんさんがキスをしてきた。

コンビネーションアタックなんだろうか？ それとも私だけファーストキスが終わってるのが気に食わなかったのかな？

その日、寝るとき楯無さんが妙に近かったのは気のせいだろう。

#### 4話「中華転校生」(後書き)

楯「ねえ、天音ちゃんはお姉さんのことどうおもってるのかな？」

天「無邪気なお姉ちゃん」

楯「お姉さんが守ってあげる」

の「あっちゃん、私は私はい？」

天「癒し系？」

の「おー！ 何だかよくわかんないや」

## 5話「対抗戦」

「チュンチュン」

「……………」

「こっけこっけ」

「…………何してるんですか二人とも」

起きたら楯無さんが鳥の真似、のほほんさんがニワトリの真似をしていた。

朝から愉快的な人達だ……ん？

「のほほんさん起きるの早くない？」

「えゝそんなことないよゝ」

今日は5分後に超巨大台風がIS学園に直撃だな……トイレ使えなくなるかな？ 水分は取らないようにしなきゃ

「しーっーれーいー」

ペシペシ

「私だつて早く起きることあるんだよ」

ペシペシ

袖で手が見えないけどベッドをペシペシと叩いているのはほんさんと楯無さんの子供みたいな姿は可愛らしかった。  
うん……それだけならよかった……。

「なんで二人妙に見覚えがあるワイシャツ着てるんですか？ それ自分のですよね？」

「「？」」

二人ともキョトンとしてお互いの顔を見合つ。  
そして天音を見ながら不思議そうに答えた。

「「これ天音ちゃん（あっちゃん）のワイシャツだよ？」」

「何堂々と人のワイシャツ着てんだよ！ おかしいでしょ！？  
いつから着てたの！？」

「「天音ちゃん（あっちゃん）が寝付いた時に襲いたい衝動を抑えるために」」

嬉しいような嬉しくないような……いや、普通男は美少女に自分のシャツを着てもらってるってのはかなり嬉しいはず……喜ぶべきか。だけど常識的に考えれば……嬉しい？……結論かわんねえ……

「まあいいですよ。寝てる間に何もされてないなら」

「えっ……ああ、うん、そうだね……」

「あ、あははは……」

「何！？　なんで気まずそうなの？　なんかしたの？　何したの！？」

「落ち着いて天音ちゃん。1割冗談だから」

「ほとんど本気だ！」

「そんなことより食堂いこーよー」

半ば無理矢理会話を終わらせられ、制服に着替えて食堂に行く。

「で、立花茜は幼なじみなのは知ってるけど井上美咲は天音ちゃん  
とどういう関係なの？ 鈴ちゃん」

「確か義妹だったわよね？ 天音」

「あーうん、そんな感じ。ていうか食堂で鈴を捕まえてまで質問する  
必要あったんですか？」

「おーありだよ、あっちゃんニブチンさんだからね」

結構鋭い方だと思っただけどなあ……何が鈍いんだろ？  
ていうか鈴より一夏の方があの事件のこと詳しいのに

「そうそう、あの二人にまた天音が無茶したっていったらおこって  
たわよ？」

「なんてことしてくれてんの？ もう家に帰れない……」

「あの二人のお仕置きは人知を超えてるもんね」

わかってるならあいつらに余計なこと言わないでほしい。ほんとに  
死ぬから「お兄ちゃんめっだよ？」っていいながら包丁を振りかざ  
すんだよ？ もう一人は「天ちゃんはいけない子ね」ってメリケン  
サクをつける人だ。

恐ろしすぎて逆らうのやめたからな

「そろそろ行きましょ、始まっちゃう」

「行くよニャンコ先生」

「もう少しゆっくり食わせてくれんのか」

文句を言うニャンコ先生を抱っこし、アリーナに向かって少し早歩きした。

「一夏、今謝るなら痛め付けるレベルを下げてあげるわよ」

「わけのわからないことで謝るか、全力でこい」

アリーナの中央で鈴と一夏が睨み合ってる横で天音は欠伸していた。

『はじめ!』

「はあああ!」

鈴が一夏に切り掛かるのをただ眺める。

副代表は警戒してなかなか近づいてこないから余裕たっぷりだった。

「くっ！ 天音、お前も戦ええ！」

「えー？」

一夏に言われ、ちらつと副代表の方を見ると臨戦体制になったので片付けをすることにした。ビットだけで

「いけー」

無気力な声を出しながらビットを出しライフルモードにし、副代表に攻撃を開始する。

「くっ！ 射撃が正確すぎる」

「セシリアよりうまいでしょ？ あとさ一夏の寝起き写真があるんだけど」「そういうの無しにしてくれない？ 天音」「ぶー」

鈴に台詞の最中に割り込まれた。一夏が何だか拗ねてるような表情をしていた。

機嫌とりでもしとくか……

「一夏怒らないでよ、今晚私を好きにしていから」

「何いってんだ!？」

「……一夏、あんたにそんな趣味が!」

「違う! 断じて違う信じてくれ鈴!」

鈴がドン引きしてるのに対して副代表さんは顔を赤くしてる。

ああそうか、私のことを男って認識してるのって一夏と鈴と千冬さんだけだったね。

そうしてると副代表さんの打鉄のエネルギーが切れたみたいで煙りを出しながらゆっくり地上におりていった。

『天音! 何かくるぞ!』

「はあ!?! こんなときに誰だよ!」

上を見るとビームがアリーナに迫っていた。しかも私の頭上に下には副代表がいるから避けられない……

ビットを円にしフィールドを張りビームを受け止める。

「ぐう!」

『ダメだ！ もたないぞ』

「くそおお！」

ドオオオオン！

ビームに耐え切れず、フィールドが消えビームの直撃を受けた。

「天音！ 天音大丈夫か！？」

痛みをこらえて煙りの中から飛び出し一夏と鈴のそばに副代表を抱えながらよった。

「何とか！ 君も大丈夫？」

「は、はい！」

「一夏、鈴、この子おいてくる」

そついい、ピットの中に入り奥のほうにいき降ろした。

ピットを出たらビームが飛んできた。なんとかかわしその方を見る  
と青い羽に左手にシールド、右手ビームライフルをもった全身装フルスキン甲  
のISがいた。

『天音、あれはフリーダムだ。バラエーナに注意しろ高出力だから  
消し飛ばすぞ』

「鈴、一夏こいつは私がやる。その真つ黒黒助たのむ」

「無茶だけはすんなよ！」

「すぐこいつ倒して加勢にいくわ！ それまで落ちんじやないわよ？」

「了解」

GNソードVを両手に持ち、羽にマウントしてあるビットをスライドさせ高機動モードにする。

まあもともと他のISに比べたら高機動なんだけどね

「君に天の音を聞かせてあげる」

「ふふふ、出来るものならどうぞ？」

天音は少し驚いていた。

あのISは反応しないし動きが機械じみてるから恐らく無人機だろうけど、こっちは返事をした。

「これはこれで厄介だな……」

フリーダムはビームサーベル抜き取り接近してきたので迎え撃つ。  
GNソードVとビームサーベルがぶつかり合い火花が散った。

「くっ！」

楯無は焦っていた。

外に出れない上にアリーナの中でどんな戦闘をしているのかさえわからない。

シャッターが下ろされてなければアリーナのバリアを突き破って加勢しにいくのだがそれも出来ない。

「（どうすれば……さっきから胸騒ぎがする）」

しかしIS学園生徒会長である以上、こういうときに不安な顔はできない。

出来るだけ自然を装い、誰もいない扉を見つけそこを吹き飛ばす。中に入り空気穴を伝って外にでるとISを起動する。

「冷静に周りを見て考えれば案外うまくいくのね」

アリーナの上まで上昇すると敵の砲撃で穴が空いて、まだ直ってないところがあった。

そこを潜り抜けると一夏と鈴が黒いISと、天音はフリーダムと戦っていた。

一夏達は何か作戦が浮かんだみたいだけど、天音の方は苦戦していた。

「（何？あのIS…まるで天使）天音ちゃん！」

ガトリングを撃ちながら近寄る。

フリーダムは軽く回避し、反撃してくる。

楯無に向かって撃たれたビームを天音がGNソードで切り裂く。

「楯無さん、なんでここに？」

「加勢に来たのよ、天音ちゃんが無茶しないようにね」

「すみませんね」

再びフリーダムの方に視線を戻すと、フリーダムはビームライフルを腰にマウントした。

「邪魔が入ったね。卯月天音、私は一対一で貴方と戦いたい。強くなつてね」

「言われなくても何が何でも強くなるよ」

「ふふふ、楽しみにしてるよ」

そういつてフリーダムはアリーナのバリアにバラエーナを放ち穴を開けてそこから逃げていった。  
一夏達の方を見るとあっちも終わったらしく、一夏と鈴、セシリアが肩の力を抜いていた。

「な！ あの馬鹿！」

「え？ 天音ちゃんどこに！？」

天音が一夏の方に猛スピードで飛んでいくのを見て、理解した。  
黒いISはまだ動いていて腕を一夏に向けてビームを撃とうとしている最中だった。

天音ちゃん……まさか！

「待って！」

楯無も瞬間加速をかけてガトリングを黒いISに向けて撃ちながら  
イグニッションブースト

天音の後を追ったが遅かった。

「一夏！」

「天音？ うわっ！」

一夏を押しつけた瞬間、天音が黒いISが放ったビームに直撃してアリーナの壁に激突し、ISが解除され横たわる。

「くっ！ はあああ！」

ガシュ！

黒いISの腕にランスを突き刺し、一夏が本体を切ると機能停止した。

「天音ちゃん！」

「天音！ 鈴、セシリア保健室にいったって治療の準備をするように言ってきたくれ！」

「わかったわ！」

「お任せください」

セシリア達がアリーナから出ていく。  
天音ちゃんの体を抱き起こすと左腕から血が出ていて、右腕は火傷をおっていた。

私は抱き抱えて駆け足で保健室に向かった。

「う……ん？」

白い天井が夕日に当てられ凄く濃いオレンジ色になっていた。薬品の臭いが鼻をくすぐる……。という定番のボケはほどほどにしてっと

「えーっと……保健室にいるってことは無事あのISは止められたのか」

腕を動かそうとすると激痛が走った。  
またか……。左は骨までいったか、右のヒリヒリって感じは火傷か。  
こんなんばっかりだな

「大丈夫？」

「楯無さん、大丈夫に見えます？」

「ぜんぜん」

どこからともなく現れた楯無さんに冗談めかしてボケてみたがいつも通りの反応が返ってきたのですこし安心した。

「まったく、他に方法とかあったでしょ？ 何で自分から当たりにいくの？」

「すみません……夢中で」

「そこ悪いところよ」

「でもあの真つ黒黒助もなかなかの威力の持ち主でしたよ、まさかあそこまでとばああああ！」

「茶化さないの」

楯無さんは笑顔で左腕を力いっぱい（おそらく加減はしている）握っているせいで激痛が走る。

「痛い……」

泣きそうになつてきたところで手を離し抱きしめられた。  
といつても起き上がれないから上に覆いかぶさる形なんだけどね。

「……………」

「あもう、楯無さん？」

「……………」

やばいかもしれない、この人に限つて泣くとかないかもしれないけど万が一のことがある。  
なんとかしないと……。

「楯無さん一緒に寝ましょう」

「……………」

反応なしだ！？　いつもなら食いついてくるのに……色んな意味を含ませて

「結婚して幸せな家庭を築きませんか？」

「喜んで！」

なんだ、大丈夫じゃんこの人。心配して損した。  
しかもこの人すごい乙女の顔してるよ？ 頬をほんのり赤くして可愛いんですが……。

「冗談ですよ」

「ケチケチー、チキンやろうっ！」

「チキンじゃない証拠みせましょうか？」

「命を大切にしない奴はだいつきらいだ！」

「そこでそれを使うんですか！？」

まさかこのタイミングでゲ 戦記ネタを引っ張りだすとは、やっぱり楯無さんは侮れない。

「まったく何で楯無さんはこうも……」

「あら、嫌なの？ 自己紹介のときに普通の人間には興味ありません。ここに宇宙「ストーリーップ」……いいとこなのに」

「何で涼 ハル の憂鬱なんて知ってるんですか！？ 第一そんなこといってません！」

「嘘だ！」

「今度はひぐらしですか！ ネタが豊富ですね」

もうダメだ…… ツツコミ切れない。この人は絶対私の知らないネタも持ってる。

もう降参です。

「ふふふ、すこし寝なさい。疲れたでしょ？」

「おかげさまでどつと疲れましたが、楯無さんはどうするんですか？」

「添い寝する」

ああ…間違いなくどつちかの腕にダメージが行くパターンだな。  
覚悟しなきゃね

「せめて頭のつけるのは右腕の二の腕にしてください」

「ん、わかった」

楯無さんはすこし遠慮気味で頭をのつけるとギュッと抱き着いてきた。

「おやすみ」

「はい、おやすみなさい楯無さん」

## 5話「対抗戦」（後書き）

楯「最後の方楽しかったわ」

天「作者はやっちゃったって顔してましたよ?」

楯「今回は『IS>インフィニットストラトス< 異常』に出てくるキャラがでます」

天「楯無さん、出る可能性は限りなく0に近いですよ?」

楯「次回もお楽しみに!」

天「無視ですか!?」

## 6話「金銀転校生」

「今日は転校生を紹介します。しかも二人です！ 入って来てください」

山田先生の合図で二人、金髪と銀髪が入ってきた。  
そこでも思った……銀髪と白髪は紙一重だと！

「シャルル・デュノアです。この国に来たばかりなので不慣れなところもありますがよろしくお願いします」

「「「きゃあああああ……！……！……」」」

「二人目の男子よ！ しかも同じクラス！」

「生きててよかった！」

「天音ちゃんとお似合いかも……」

おかしいな……俺男なんだけどな。  
まあ女だっと思われてた方が都合がいいけどね。

「ふん」

銀髪の子が不機嫌そうにしていた。  
そりゃ不快だよね、発狂されると。

「怒らないでよ」

「怒ってなどいない、呆れてるんだ」

「まあまあ判断を下すのはまだ早いよ。早過ぎると致命的なミスを犯すよ?」

「一理あるな……」

おお……割と素直な子じゃないか、根はいい子なのかもしれない。  
無愛想だけど

「そこ、おしゃべりは後だ。ラウラ自己紹介しろ」

「わかりました教官。ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………以上ですか?」

「以上だ」

短すぎる自己紹介が終わり、ラウラは通りがけに一夏をひっぱいた。

「なにすんだよ!？」

「私は認めない。お前があの人<sup>の</sup>弟であることなど認めるものか！」

「意味がわかんねえよ」

「一夏、落ち着いて。この子はホントはいい子なんだよ」

「知り合いなのか？」

「今日初めてあつた」

一夏が呆れた目で見てきたのがすごく心が傷ついた。  
だって普通、会ったばかりの人を嫌いになりたくないじゃん。普通  
だよな？

「はあ、今日はアリーナで2組と合同授業だ。遅れたものは校庭1  
0周させるぞ」

「」「はい」「」

織斑先生が出て行ったあと、ラウラのところに駆け寄る。  
クラスの皆は「やめろ」って目で訴えてくるけどガン無視した。

「ラ・ウ・ラー！」

「…………ふん」

「無視しないでよ。私は卯月天音、よろしくね」

「何のようだ」

「ISのこと教えてくれないかな？。ラウラ少佐」

「……………断る」

そういうとラウラは教室から出て行った。

ホントに無愛想だなあ、でもツンツンばかりの人ってデレさせたくなるんだよね。

ラウラ・ボー・デヴィッヒ…………必ずデレさせてやるぞ！

「で、ラウラにデレさせる作戦を考えていたら遅刻したということか…………他にはあるか？」

「もうないです。しいていえばそのバインダーで殴られるだけです」

「いい覚悟だ」

スパアアン

現状報告、授業のことを忘れて考えごととしていて遅刻し制裁をうけました。

列に入ろうとすると織斑先生に呼び止められ、正座のまま現状待機している。

のほほんさんからの生暖かい目が妙に心にしみた。

「鳳、オルコット！ 出て来い」

「なんであたしが・・・」

「私は何もしていませんのに・・・」

「アイツにいいとこ見せるチャンスだぞ？」

「「誰が相手ですか!?!」」

おお、やる気が一気にあがったぞ。やる気があるのはいいことだ・・・  
・うん、見えない私は見えないぞ、織斑先生がこつちを指さしてる  
姿なんてみえない。

「はあ、仕方ない・・・ニヤンコ先生いくよ」

ISを展開させ、鈴たちを待つ。

「えーっと、天音だけですか？」

「ああ、そうだ」

「さすがに2対1ってわけじゃ・・・」

「2対1だ」

「それだと勝負にならないんじゃないか・・・」

「勝つてからいえ」

鈴たちは戸惑っていた、いつまで待たなきゃいけないんだろう。じれったくなったので鈴の頭スレスレにビームを撃つ。

「あ、あんたねえ！」

「先手必勝、油断大敵。戦場なら貴様はもう死んでいる！」

「上等じゃない、ボコボコにしてあげる！」

「鈴さん、私もお手伝いしますわ」

鈴が衝撃砲を撃とうとした瞬間に急上昇し、GNソードVを両手にもった。

今回は前回よりすごいものを用意したからすぐに終わる。

「ちょこまかと!」

「やっぱり素直に落ちてくれませんか・・・」

「二人とも、もし降参してくれたら一夏の写真をあげる」

「その手には乗りませんわ!」

「あんたの手のうちはわかってるわ!」

「・・・上半身裸」

「「降参すゐわ(しますわ)——」

はい、終わり一夏に怒られるけどいいよね？ 合成だし。  
下に降りると織斑先生が近寄ってきた。

「卯月、お前はなぜISの性能を出したがないんだ?」

「・・・だめですか?」

「まあ、隠してもらえるとこっちも仕事が減っていいんだがな」

先生の許可ももらったし、これからは制限かけてIS起動しよう。もう写真だけでは降参してくれないだろうし。

「卯月、貴様はISをなんだと思っている」

「簡単に人を殺せる兵器かな、だから本気出さないんだ」

「他の奴よりマシみたいだな」

うーん、すこし関係が進展したのかな？

ほうけてると、私のところに影ができた。嫌な予感しかない。

織斑先生のほうを見るとため息をついていた。

「卯月はそいつをどうにかしてくれ。他は専用機持ちをリーダーに班をつくれ」

「見捨てないで！」

「天音ちゃんゲット！ 生徒会室にいこっか」

私はニヤンコ先生をつかむ前に連れ去られたのでISを展開して抵抗するという手段が取れなかった。

まあ暴れればいいんだろうけど、この人すごい笑顔だし落ちたら死ぬ高さだし・・・ね。

美少女の笑顔を見るとなんだかどうでもよくなるというかね、わか

る人はわかってくれるはず。

「楯無さん、今度はなんですか？」

「天音ちゃんに生徒会副会長をやってほしいの」

「めんどくさいのでパス」

「明日から猫耳と尻尾もつけて「やります！」・・・素直じゃないんだから」

この人はどこまで非常な人なんだ。少し懂れる。

生徒会室につくと虚さんがいた。二人そろってサボリですか、まあ虚さんは巻き込まれたんだろうけど。

「ていうか、私が副会長になる意味がわからないんですが」

「えっとねえ、天音ファンクラブが徐々に大きくなってきたのよ」

「なるほど、そのとてつもなく危険なクラブを潰すんですね、わかりました」

そんな危険なクラブはすぐに潰さないと中学3年間の似の舞になってしまう。

あれは怖かった、一夏や五反田弾と鈴がいなかったらきつと自殺してたよ。

鈴が国に帰った後が一番危険だったけど。

「いえいえ、そんなことして生徒の反感を買いたくないわ。好きにやらせましょう」

「なんですと!？」

「当たり前じゃない、貴方に危害なんて加えるわけでもないのに」

「あの・・・虚さんそのファンクラブの会長ってわかりますか？」

楯無さんがほつぺを膨らまして拗ねたような顔をした。すいませんね、虚さんは冗談いわなさそうだからこの人に聞くといいかなって・

「2年の高梨まひるさんですよ」

「あああんのあひる!」

「何？ 知り合いなの？」

なぜか楯無さんは目を細めて聞いてくる。

別に虚さんに聞いたくらいでそこまで怒んなくてもいいじゃないか。

「同じ中学で、そこでもファンクラブを作った人ですよ」

「ふーん、なかいんだあ」

なんでそうなるんだろう、乙女心はまったくわからんな。  
楯無さんの頭をなでる。

「楯無さんとのほうが仲いいと思いますよ？　　というか私あひる嫌いなんで」

「べ、別に私は天音ちゃんが誰と仲良くてもいいけど・・・」

しばらく楯無さんの顔を見ながらマツタリしていると生徒会室のドアが勢いよく開いた。

そのほうを見ると私の天敵が満面の笑みを浮かべて立っていた。  
その後ろにはのほほんさんが立っていた。

「ひっさしぶりー！　元気だった？　あとまひるだよ、あひるじゃないよ」

「二度と会いたくないと思ってたのになんでくるの、あひる」

「相変わらず私に冷たいのう、そこもいいけどね」

「相変わらずド変態ですね、その脳みそクリーニングしてもらったらどう？」

「もつと・・・もつと罵倒して！　そしてあの時みたいにたまに  
でいいから優しくして！」

だめだ、この人は楯無さん以上に何いっても無駄だけど抵抗しないと貞操が危ない。

中学のときも一回だけこの人に捕まって、ベッドに手足を拘束されてSMプレイされそうになった。

「さあさあ、今度は邪魔が入らないところで楽し　ぐっ！」

あひるが吹っ飛び窓から落ちた。普通は死ぬけどあひるは屋上から落ちても死なないことは中学のころ証明済み。  
そして鈴が入ってくる。

「天音変なことされなかった？」

「うん、昔のことを思い出しただけですんだ」

「重症ね、まさかアイツがここにいるなんて・・・とりあえず教室に戻ったほうがいいわよ」

「了解。楯無さん行ってきますね」

「ええ、また放課後ここに来てね」

教室につくとニャンコ先生が不機嫌そうにゴロゴロしてた。

可愛いなあ、お持ち帰りしたいっていても嫌でもつれて帰らなきゃいけないんだけどね。

女子の間をスルスルと通って席に座った。

「むっ！ 天音、今までどこにいた!？」

「生徒会室だよ」

「私もつれていかんか！ この馬鹿者め！ おかげで私はあの珍獣に「私がなに?」ぬわああ!」

のほほんさんに抱き上げられたニャンコ先生は奇声を上げていた。普通にうらやましい光景なんだけど・・・見せつけてんの？ くそ猫。

段々とニャンコ先生の顔が青くなっていつているのを見てやっとわかった。

強く抱きしめられてるから苦しいのか。

「のほほんさん、優しく抱きしめてあげないとくるしそうだよ?」

「おゝ、ごめんね猫ちゃん。あまりにも可愛いからつい」

のほほんさんの腕から逃げ出したニャンコ先生が毛を逆なでて威嚇し始めたのでゲソがたくさん入っている袋を渡した。

そしたら袋をすぐにかけて食べ始めた。

「しかし、まひるとか言う女は天音のどこがいいのかわからんなあ」

「ああ、それ私も思ってた」

「わーからーん、わーからーん。こいつのどこがいいのかわーからーん」

ぶち殺したくなるな、こいつ。同級生だったら血祭りにあげてやるのに……。このくそ猫め、すぐ調子にのりやがって底辺に落とすぞ。

「まあ、天音は甘ちゃんだからな。惚れた奴がいても不思議じゃない」

「たまに嬉しいこと言ってくれるよね、有り得ないけど」

「まあな、酒はないのか？」

「部屋に戻らないとないよ。コーラならあるけど」

「仕方ない……。コーラで我慢してやるか」

鞆からコーラを取り出し飲むニヤンコ先生を見てると和む。  
平和を感じる、それと同時に不安も出てきた。

いつまでこんな日々が続けられるんだろう

そう思うと胸が苦しくなった。

「……っ！」

「にゅ〜…」

その表現は比喻でもなんでもなく、のほほんさんが抱き着いていた。  
豊満な胸を押し付けられ苦しいけど、苦しいっていったらいけない  
って楯無さんに教わった。

「あーそうだ、そろそろってゅーかもう痛み止めの薬の効果切れて  
る時間だよ？」

「……え」

恐る恐る一番重傷な左腕を動かそうとしてみる。

「……い」

「い？」

「いつつたああ！」

ホントに切れてる！ あの生徒会長1日持つって言うてたじゃん！  
騙されたよ、くそ！

「のほほんさん、痛み止め持ってない？」

「部屋に戻らないとないよ、コーラならあるけど」

「仕方ない・・・コーラで我慢・・・できないからね！ それって  
さっき俺が言った台詞だよね！？」

「天音、一人称が元に戻ってるぞ」

「そんなことは今は重要じゃないんだ一夏！ あとの授業はこの痛  
みに耐えて受けなきゃいけないんだよ！？」

こんなの死ぬから、織斑先生って結構スパルタだし山田先生が来て  
くれることを祈るしかない。

「まあ何だ、怪我したのは少なからずお前にも責任があるんだ」

「一夏、さりげなく罪をなすりつけてない？」

「敗者は勝者に従うんだ」

「勝ったからね！ 今のところ負けなしだから！」

「弱肉強食って・・・辛いよな」

「お前自分のこと棚に上げてるよな？ 絶対そうだよな？」

まあいいか、一夏とはこんな風にふざけあつのはいつものことだし  
悪い気はしない。

今日の昼はラーメン食べるか、根性でなんとかなるだろ。

「早く席につけ、授業を始めるぞ」

織斑先生が教室に入ってきたのを見て絶望した。

「この世界に・・・神はいない」

「天音、何してんだ？ そんなとこにねっころがって」

「気にしないでくれ、ねっころがつてる方が楽なんだ」

午前の授業が終わり、一夏、シャルルとあといつもの3人で屋上に来ていた。

授業中ノートがとれないしニャンコ先生が机の上で昼寝するから色々大変だった。

「はあ、めんどくさい上に体痛い・・・」

「大丈夫？ 何をしたらそんな怪我するの？」

「あーそれは」

「説明中しばらくお待ちください」

「・・・一夏」

「・・・本当にすまないと思ってる」

過ぎたことはいいんだけど、もうちょっと痛みが引けばいいのになあっと思っただよね。

ピンポンパンポーン

『コホン、えー生徒会長の更識楯無です。今日生徒会副会長が決まりました。』

「ああそうそう、一夏に言っておきたいことがあるんだよね」

『生徒会副会長は・・・1年1組 卯月天音に決定です！』

楯無さんが私の名前を出した瞬間、下の方から『天音ちゃんはどこ！？ 必ず捕獲して私達のものにするのよ！』って聞こえた。他にもいろいろ聞こえるんだけどシャットアウト

「・・・今の下から聞こえたのでわかった？」

「またか・・・人気者は辛いな」

わかってくれて嬉しいよ。 あひるの本名なんていいたくないしね。 あいつはあひるで十分だ。

「でも一夏、今度も高梨なのよ」

「まひるさんも暇人だなあ。あの時から変態の道を自ら歩むようになったよな」

ああ、あの時か・・・あれは確か・・・あああああああああ！

「えっ！？　なんで天音さんは目に光りを燈さないで虚ろになってるの！？」

「一夏！　あんたのせいで天音がトラウマを思い出したじゃないの！？」

「わ、悪い。早いとこパイルドライバー決めて元に戻そう」

「ダメだよ！　それこそ死んじゃうよ！」

「天音！　待つて飛び降りなんて馬鹿な真似はよせ！」

あはは、嫌な思い出はリセットだあ・・・あはははは。  
電源（命）オフにすればいいんだ、ふふふコンテニューするときはもつと気をつけないとね。

「ダメだよ！　天音さん」

シャルルに抱っこされて一夏達のところまで連れ戻される。  
なんだかいい匂いするなあ・・・のほほんさんや楯無さんみたいな・・・落ち着く、ああねむ・・・

「あれ？　抱き着いたまま寝ちゃってる」

「どんだけ呑気なのよ」

「ねえあつちゃん起きて？」

「……ん、はっ！ 私はなにを？」

「ちよーつとこつちに来て正座しよーか？」

ニコニコしながら後ろには阿修羅が見える。

逆らったら間違いなく消される気がしたので素直に言うことを聞いて正座した。

「男の子同士でそーゆーことするのって普通なの？」

「いえ全然普通じゃないけど」

「そんなことより、今自殺しよーとしてなかった？」

「リセットしようとしまいいいいきゃあああー！」

右腕を握られ激痛が走る。

目に涙をためながらタップするが離してくれない。

「今度、そんなことしたら、たっちゃんにも報告しなきゃね」

「ホントにすいませんでした！ 二度としません」

のほほんさんは手を離し、満足そうに笑う。

やっぱり笑顔似合ってるなあ、屋上の扉からチラチラこっちの様子を見てる人達は何なんだろう？

トランシーバーで誰かに連絡とってるみたいだけど・・・

「うっちゃーん！」

「あひる！？ちっ！　こういうことかニヤンコ先生！」

「騒がしいやつめ」

ニヤンコ先生が肩に乗ったのを確認すると、屋上から飛び降りる。少したったらISを翼を部分展開し、空を飛んで教室に戻った。

「まったく、洒落にならん」

「ああ私もまさか目の前でルールを破る奴がいるとは思わなかったぞ？　卯月」

振り返ると織斑先生が右手に木刀を握ったまま腕を組んで仁王立ちしていた。

今日命日かもしれません

「えっと」

「他にいうことはあるか？」

「さ、サービスサービスう」

バキヤ！

「し、しちょうせい」

意識が薄れていくなかで北斗七星のところに赤い星が見えた。

## 6話「金銀転校生」(後書き)

天「あひる・・・奴は化け物か！ 神崎真央さんはこんなことありましたか？」

真「俺の場合鈴花達が潰してたから平気だね」

天「うらやましい・・・」

楯「ホントにゲスト来ちゃったよ・・・」

## 7話「日常」

学年別トーナメント優勝ペアは織斑一夏と交際又は卯月天音を  
一日好きにしてよし

バン！

「おい、楯無！　なんだこれは！？」

「ん？　何か変なことした？　私のクラスにくるくらいだからよほどのことね」

「ええ、よほどのことですよ？　何ですか？　これは」

廊下に貼ってあった学年別トーナメントの説明＆優勝賞品が書いてある紙を見せ付けた。

それを見た楯無は不思議そうな顔をしてこっちを見てきた。

「どこがおかしいの？」

「おかしいですよ！？　なんで優勝賞品が私と一夏なんですか？  
人権侵害も甚だしいですよ！」

「その方が盛り上がるじゃない？ 1、2年の優勝賞品は同じだから」

「盛り上がるか！ しかもちゃっかり3年省かれてるし」

「でも大丈夫、3年の方はキスにしてあるから」

抜かりはないって感じの笑みを浮かべる楯無さんに、少し見とれながら疑問を突き付ける。

「誰の？」

「天音ちゃん」

「全然大丈夫じゃない！」

この人、人を何だと思ってるんだ！？ おもちゃか？ おもちゃなのか？

そうしてると周りにいた先輩方がサツと私から距離をとったのを見て横つとびしようとしたけど何者かに襟元を掴まれた。

「私のホームルームを抜け出して何をしてるのかと思えば上級生とイチャイチャしてるとわな」

「ち、ちにゃう！ ちにゃうんれす！ これにはわけがあるんれす。」

人権侵害をつけたんねす！」

「言い訳はそれだけか？ まあ生徒指導室でゆっくり話そうではないか」

「いにやあ！ ヘルプ！ ヘルプミー！」

「ふふふ、呂律まわってない天音ちゃんも可愛い」

織斑先生に連行されてる間に写メをパシャパシャ撮られた。中には一度に何枚も撮ってる人もいたが1番怖かったのはやっぱり織斑先生に捕まったときだった。ていうか副会長が生徒指導室行きて何だよ。

「ふう、まあ座れ」

「ほい」

椅子に座れせられ、織斑先生は向かい側に座った。

「で、お前のISのこと何だが」

「へ？ お説教タイムでは？」

「そんなことどうでもいい。あのISのことを教えろ」

「ええつとGNDドライブって言う永久機関がついてます」

「エネルギー切れがないってことか？」

「ええ、でも今は稼働させてないです。万が一の時に稼働させようかと」

「対策を練られないようにか……わかった。それだけか？」

「今のところは」

「わかった。このことは誰にも言つなよ」

「ほいほい（あれ？ GNDドライブって半永久機関だったっけ……まあどっちでもいいいな）」

私は生徒指導室を出て教室に戻る。

階段を昇っている最中、突然目の前に変態が降りてきた。

「やあうつちゃん。今日もショートパンツとニーソの間の太ももが美しいわね」

「やああひる。今日も懲りずに不愉快な面を拝ませてくれてありがとう」

「太ももに蛾を垂らしてあなたが喘ぐところを見たいわ……ハアハア」

「さーばっ」

「逃がさない！」

階段を飛び降りて全速力で廊下を走る。我ながら素晴らしいスピードが出てると思う。

中学の頃は追われる、逃げる、戦うは普通だったからなあ。

「まーーてーー！」

「追ってこないでよ！ 変態！」

「何を言う！？ うっちゃんのけしからん格好に欲情してなにがわるい！」

「自重しないのが悪い！」

といつてもこの人に自重って言葉は存在しない上に常にオープンな人だ。

思い立ったら即準備、行動、がこの人のもつとうだ。

「たちがわるい！」

「さあうっちゃん！ 愛を育もうじゃないか！」

「愛なんてありません！ ていつか授業中ですよ！？」

「そんな道理…私の無理でこじ開ける！」

「あひるのせいでカッコイイ台詞が台なしになったよ？ 使う場面じゃないからね？」

「メディアの違いを理解せよ！」

「お前がしろおお！」

このままじゃ1日フルマラソンになってしまうので皆がいるアリーナに逃げ込む。  
皆驚いてるけどそんなことはどうでもいい。

「先生！ 助けてください変態が追っかけて来るんです！」

「織斑先生！ うっちゃんをこっちに渡してください！」

織斑先生は一度ため息をついて仕方なさそうに私を見てから一言

「自分で何とかしろ」

「……………」

聞いた？ 自分で何とかしろってさ、優しくて涙が出るよ。  
できないから縋ってんのにね、どうしろと言っんですかこの人。

「仕方ない……ニャンコ先生いる!？」

「こっちにいるぞ、天音」

「よし、いくよニャンコ先生!」

「なっ! まさかうっちゃん……」

ニャンコ先生を抱えて右手を上に掲げる。ニャンコ先生も短い手（前足）を上に掲げる。

「メタモルフォーゼ!」

そう叫びISを展開する。

何故か一部の女子は嬉しそうにしていた。

「くっ! ジンクス!」

あひるも慌ててISを展開し右手にビームライフル、左手にビームサーベルを持って構えた。

私は右手にGNソードVを持って接近する。

「ええいあひる! うっとうしいぞ!」

「それが私のいいところ！」

「悪いところだ！」

GNソードで切り掛かるがビームサーベルで受け止められる。  
ビームライフルを向けられたので距離をとった。

「ふふふ、ISで喘ぐ姿もなかなか……」

「叩きのめさなきゃ、急いでたたきのめさなきゃ」

「ふふふ……ふふふふふ……」

本格的に壊れてきたあひるを見て冷や汗が出る。  
いつの間にか楯無さんが観客席にいるし、何で毎回ここにいるんだ  
ろっ？

「どこみてるの？」

「おっ！」

あひるにタックルされ、地面に押さえ付けられる。  
そのままGNバルカンとビームライフルを至近距離で撃たれる。

「あつぐうう！」

「それよ！ その表情が見たかったのよ！」

ビームライフルを腹に押し付けられ、ゼロ距離で撃ってきた。  
その上、足で私の手を抑えビームサーベルをたたき付けるように振るう。

「ああ！ くう…Qoo」

「ああ、その表情…その声たまんない。もっと聞かせて！」

「やるか！」

ソードビットライフルモードであひるを狙い撃つ。  
しかしかわされて距離をとられた。

「あなたじゃ私に勝てないわ」

「それはどうかな？」

ソードビット6つをGNソードに連結させGNバスターソードにする。

他のビットはあひるを攻撃させる。

「この程度！」

「そうですか！」

あひるの懷に入り、ISスーツの胸元を引っ張る。

「おお！」

「すきあり！」

動きが止まった瞬間、バスターソードをぶち込む。

そのあとライフルモードにしてビットと一緒に一斉射撃する。

あひるはIS強制解除され、地面に着地する。

「あー、もう一回あの一斉射撃して！」

「なぜに？」

「気持ち良かった……（ゾクゾク）」

「どM！？ 織斑先生この人危険です！　すぐに病院に連れてって隔離してください！」

「わかったからお前ら持ち場に戻れ」

またまた聞きました？ 軽く流されたよ、貞操掛けで戦った人に言う言葉じゃないよね？

俺は絶対言わない自信………ないわ。

「うつちゃんいこっか」

「これあげるから帰ってください」

自分の着崩れ写真（楯無さんから没収した）を渡すと喜んで戻っていった。私は一夏を睨みつけた。

「何で助けてくれなかったんだよ！」

「いつものことだったし、専用機持ちだったし」

「この薄情者め！」

「しかし、あの人の変態に磨きが掛かってなかったか？」

「嫌なこといわないでくれ」

パアアン

「騒ぎまくったのにまだ騒ぐのか？卯月」

「すみません」

「10周してこい」

「はい」

10周走り終えた頃には授業が終わってしまい、放課後の教室掃除も言い付けられ、ただ今食堂で燃え尽きております。

「あっちゃんあっちゃん、だいじょーぶ？」

「精神的にきついよ、のほほんさん」

「私が癒してあげよーでわないかー！」

のほほんさんに手を引かれて食堂から出る。

結んである髪がぴよぴよこしてる段階で癒されてるんだけど黙っておこう。

屋上につくと風がふく、その風が妙に気持ち良かった。

「ささっ！ここに座って座って」

「ほいほい」

言われたとおり座るとのほほんさんが膝に頭を乗せてきた。

いや癒されるっていうか、可愛いっていうか、襲いたくなるっていうかね。

いろんな感情がね。

「うにゅ、いい感じなのだあ」

「そうかそうか、のほほんさんが癒されてるね」

「あつ！ まーいいや」

いいんかい！ まあ私もいいけどさ。

のほほんさんの頭を撫でながら空を見上げる。

嫌なことに積乱雲がすぐそこにあった、何が悲しくてこの幸せな時間をこんなにも早く切り上げなきゃいけないんだ！

「あっちゃんは最近、たっちゃんにベッタリだからいけないんだよー？」

「確かにあの人に連れ去られたり連れ去られたり連れ去られたり、抗議しにいたりしてたね」

「少しは構ってよー！ ブーブー！」

ニヤンコ先生を抱きながら私の膝を枕にブーブーいいながらゴロゴロするのほほんさん。

ニヤンコ先生みたいな行動とるんだなあと思いながら顎の下をくすぐった。

「ひゃう！ 何をする〜！」

「お前はもう死んでいる！」

「ふん、うぬにこの布仏本音は倒せん！ あたー」

のほほんさんのパンチがポフポフとお腹に打ち込まれるが妙にくすぐったい。

ていつかのほほんさん何でこのネタ知ってるんだろう？

「それはねえ〜、一回北斗〇拳伝承者目指して全巻読みあさったからだよ〜えらいでしょ〜！」

「まさか楯無さんが色んなネタ知ってるのって……」

「んー？ たつちゃんに『本音ちゃんならいけるわ！』って言われてやったんだよね〜」

ああよかった。のほほんさんが楯無さんに進めたわけじゃなかったのか、すごく安心した……。テストでたくさん計算間違っているのを終わってから気づいて、赤点覚悟してたら意外に点数取れてたくらい安心した。

「ていうか隣の席なんだからいつも一緒にいるのと同じじゃない？」  
「ちつつちつ。違うのだよあっちゃんくん、ベツタリと隣にいる  
じゃ全然違うのです」

「まあ教室戻ろ、雨降りそうだし（この人どこか楯無さんと同じと  
こがあるよね）」

「えー、雨にも負けず。風にもまけず。」

「宮〇さんはいいから、膝にだったら座っていいよ」

「いえーい！ いこー」

素直な無邪気な子供みたいだなあ……いや子供っていえば子供何だ  
けどね。

忘れ物がないかを確認してからのほほんさんの隣に行って一緒に教  
室に向かう。

「天音！私を忘れるでない！」

どうやら猫を忘れてたみたいだ。

## 7話「日常」(後書き)

次ものほほんさんを主に出そうかなって思っています。

## 8話「のほほん強」

休日、部屋でねっころがりながら生徒会の仕事をしていると会長さんが入ってきた。

ちなみにのほほんさんは相変わらずニヤンコ先生とゴロゴロしているのに対して、虚さんは生徒会室でちゃんと仕事しているらしい。

「ねえ天音ちゃん。学年別トーナメントは誰と組むの？ 天音ちゃんは大気だから少し心配よ」

「（うそつけ）もしもの事があつたらなのほほんさんに頼みますよ」

「おゝ！ やったゝ！」

のほほんさんは喜んでくれるからこのまま組んでしまつかな。楯無さんが少し不機嫌そうな顔してるのは気のせいだろう。

ちなみに私の視力はこの前勘でやったら右0.3 左0.2だぜ！

「天音ちゃん、お姉さんと組む気ない？」

「学年別なのに組めるわけないでしょ……」

「むう……」

今度はふて腐れたよ、この会長さんどうにかしてください。  
アイスあげたら喜ぶかな？

冷蔵庫からアイス2本取り出して1つくわえて、もう1本を楯無さんに差し出す。

「食べて機嫌直してください。膨れっ面も可愛いからいいんですけど」

「そ、そんなこといっても許してあげないんだから！」

あらら、とてつもなくご立腹な様子。

例えば幼なじみのツンデレっ子が『別にアンタのためにお弁当作っ  
たんじゃないんD A K A R A ね！』みたいな感じ。

「全然違うと思うよ？アイスいただきー」

「「あっ  
」」

「うまうま　　う　ま　」

「む　　！  
」

はわわ！　楯無さんとのほほんさんが可愛い！

楯無さんの子供っぽい膨れっ面もいいけど、のほほんさんの幸せそ

うな顔もいい！

「……………（じー）」

「えつと……………どうぞ」

楯無さんの何とも言えない圧力に押し潰されそうになって、思わず自分がかじったアイスを差し出す。  
我ながら馬鹿な行動をしたと思った。

「……………ま、まあ今回はこれで許してあげる」

顔を赤くして部屋を出る楯無さんを見送り、仕事の続きをしようとしたらのほんさんに腕を捕まれた。  
怪我は直ってるんだけどね、火傷の後がまだ消えてないから常にアイムウォーマーをつけてなきゃ楯無さん怒るんだよね……………と関係ないね

「どうしたの？」

「訓練しにいこー、もうすぐトーナメントだしさ」

少し考える。

ここで仕事をほったらかすか、のほんさんと訓練しに行くか。

まあ怒られるのは私だしいいか。

「じゃいこっか」

「しゅゝっぱゝっ！」

部屋を勢いよく駆け出す。

「ぐえっ！」

するとリアットされ部屋にアゲインした。

「あ、あっちゃーん！」

「廊下を走るな、馬鹿」

「お、織斑先生……後少して胴体と首がサヨナラするところでしたよ？」

「よかったな。胴体と首で無茶できるぞ？」

「無理ですからね！？ この世とお別れした後で動きませんからね！？」

「とにかく廊下は走るな」とつげるとその場から離れる織斑先生を

眺めてから、アリーナに向かったのほほんさんと走り出した。

「つというわけで、やって来ました!」

「いえゝい!」

「今日! これからこのアリーナを侵略するであります!」

「ゲゝロゲロゲロ!」

……のほほんさんがいてよかった。

いなかったら周りの人達から1人で奇っ怪な目で見られてるよ。

「じゃ、着替えてアリーナの中で集まろっか。打鉄は私が用意しておくよ」

「ほゝい! またあとでね」

パタパタと手を振るのほほんさんを見送ってから強引に打鉄を借りて待つ。

ブーツと辺りを見渡していると鈴とセシリアが来た。

……来たのはいいんだけど……早速挑発しあって模擬戦ってどんだけ血気盛んなお年頃なんだろう。

「模擬戦かあ……」

空を見上げてふと呟いてみた。

さっきから甲高い音が近づいて来るんだけど

「あっちゃん危ない！」

「ほえ？」

はい、レールガンが100m前に……オワタ……15年の人生……  
ああ、輝かしきリンチされた日々が鮮明に思い出せる……

そんな走馬灯を見てると弾が目の前で爆発した

「馬鹿天音！ちゃんと前みる！」

「ニヤンコ先生！？どうやって今の落としたの！？」

「猫じゃらしで鍛えた私の右フックを侮るな」

自信満々でドヤ顔で2本足でたつて胸はつて手を腰に当てて戯言を言う猫をもちあげてISを展開する。

のほほんさんも打鉄に乗り込んで近づいてくる。

「ちょーつと、お灸をすえなきゃいけないみたいだね」

「こんなんじゃ、訓練しに来てる子も危なくて訓練どころじゃないよね」

といつても鈴とセシリアはラウラに一方的にやられてるからすぐ終わると思うんだけど。

………… 止めるか

「のほほんさん、少し待ってて」

「いつてらっしやーい」

ラウラ達の元に飛び立ちGNソードVを右手に持って割り込んだ。

「なんだ？ 貴様は」

「天音！ ちょつとそこどきなさいよ！ そいつボコボコにしてやんなきゃ気が済まないの！」

「そうですわ！ 騒てあげなければいけないのですわ！」

「みんなのこと考えてくれないかな？ 訓練しに来てる人もいるんだよ？」

「うぐっ」

「もし手を引かないなら私が相手するよ？ 手を引いてくれば一夏のツーショット写真くらいは用意するけど」

「仕方ないわね、この続きはトーナメントで！」

「そうですね、鈴さんと組んで貴女をボコボコにして差し上げますわ！」

話がわかる相手でよかった……きっとシャルルだったら止まらなかったと思う。男の子だし温厚だからそんなことないと思うけど。

「ふん、逃げるのか」

「ラウラ……そんなに戦いたいなら相手になるよ？ 因みに一夏より弱いよ」

「種馬より？ ははは！ そんなんで私と？」

「やってみるかい？ モルモット」

ラウラは私の発言が気に食わなかったのか、顔をしかめる。

うーん、凜々しいなあ

「かかってこい」

「遠慮なく」

GNソードライフルモードにしてラウラの足元を撃って上昇する。

ラウラが砂煙の中から出て来なさそうだったので、その周りの地面を撃ってさらに煙を立てた。

「ふふふ、さあパーティーの始まりだ！」

「ほざけ」

煙の中からレールガンが撃たれ、私は弾を一刀両断しビームを撃ち込む。

「ふん、その程度」

ラウラが煙から出てくるとワイヤーブレードを出してきた。

「見せてやろう！ 私の奥の手を」

ソードビットを目の前に円になるように並ばせ粒子ゲートを作りそこをくぐった。

「なっ！ 消えただと!？」

「こっちだよん」

GNバスターソードでラウラを後ろから切り付け、蹴りを入れる。ラウラはアリーナの壁にぶちあたる。

「ドイツ代表候補生がゴミのようだ!」

「ちっ！ 腐れが」

プラズマ手刀をだして接近してきた。

まあ普通これは私が対処するべきもの何だけどね……のほほんさんがお怒りで……とても言いにくいのですがラウラをアリーナの壁に吹き飛ばしてしまいました。

「あっちゃんは腐ってないよ、貴女が腐ってるだけ」

「あの……のほほんさん？」

「ふん、メス風情が……」

ラウラがのほほんさんに切り掛かるが軽く受け流され、アリーナの壁にアゲイン

「のほほんさんってこんなに強かったんだあ」

オープンチャネルを開いていたのでアリーナ全体に響く。  
その時アリーナにいた生徒全員そう思ったはず。

「そこまでだ、馬鹿者」

織斑先生の登場でラウラとのほほんさんの動きが止まる。

織斑先生の手にはIS用の近接ブレードが握られていて片手でブンブン振り回してるのを見たら止まるよね。

「そろそろその壁が壊れそうだ。模擬戦をやるのは構わんがアリーナを壊さないでくれ」

「いいところなのに」

ゴキヤアアアン！

「トーナメント前の模擬戦は禁止、決着はトーナメントでつける。」

解散！」

みんなアリーナから去っていく、てか近接ブレードって普通シールドエネルギーや絶対防御とか貫いて来ないよね？

なんで絶対防御発動しなかったんだろう……？ 切った覚えもないし、ニャンコ先生が動揺してるからきっとニャンコ先生の仕業でもない。

こわっ

「あっちゃんだいじょうぶ？」

天使がいた。

涙でぞ、みんな無視して帰ってる中でのほほんさんだけ心配してくれた。

なんていい子なんだろう……

「あっちゃん？」

「僕にも帰る場所があった、こんなに嬉しいことはない……」

「アムロ！」

「かえろっか」

「そだね〜 仕事もしてないしね〜」

そうだった……スツカリ忘れてた。  
怒られるかな？ まあいいけどさ

「着替えてくるねー」

「あーうん、入口でまってるよ」

「「オツケー！」」

……おかしいな、なんで2人分の返事が聞こえるんだろう……。  
疲れてるのかな……部屋戻ったら仕事ちゃっちゃと終わらせて寝よう。

「一緒に寝てもいいかしら？」

「……ニヤンコ先生はのほほんさんが連れてったからいないはず、  
空耳かなああああA！」

「なんでそうなるのかなあ？ 教えてくれる？」

「わかりました！ すいません！ お肉摘まないで！ねじらないで  
！」

「私が仕事してる間にデートしてるなんてねえ」

「えっ！？ 楯無さん仕事してたんですか！？ 大変だ！明日は雷雨

にぎや あああああ！」

横っ腹のお肉がもげる！冗談抜きでもげるよこれえ！

ニコやかに可愛らしい笑顔を浮かべるのはいいんだけど、ただでさえないお肉をねじらないで！

「お肉がないのは天音ちゃんの食生活に問題があると思うの」

「どこも問題ないですよ？」

「朝食べない、昼たまにちよつとだけ食べる、夜少しだけ食べるって食生活に問題が無い方がおかしいわ」

「個人的にはいいと思ってるんですよ。おかげさまダイエットいらずな体の一部がとれるような痛みがああ！！！」

「女の子の前でそういうのタブーよ？」

そんなこんなしてる内にアリーナの入口についた。

のほほんさんがニヤンコ先生にチヨコ渡してるところだった。

「お？ たっちゃんだー！おつかれさま」

「ねえ聞いて本音ちゃん。ああ部屋に戻ったらでいいわ」

嫌な予感しかないけど部屋同じだし、ついてくしかないのがいた

いところ。

明日は休みか……、外出届けだして家に戻るか

「でね……天音ちゃんったら（ゴニョゴニョ）」

「許せんですな！ たっちゃん」

「まてまて、何のほほんさんに吹き込んでんの？」

「天音ちゃんの悪事」

おかしいなあ……部屋についた途端座れと言われ座った。

そこまではよかった、それからというものの楯無さんはのほほんさんに変なこと吹き込んでる。悩ましい

「天音ちゃんったら結婚するっていったのに」

「冗談ですよ？」

「そんな！　しくしく」

わざとらしいな、そんな演技だれにでもバレるぞ。

「たっちゃんを泣かせるなんて！」

例外がいたか……盲点だった。

「体を重ねた仲なのに！」

「してませんよ！？」

「嘆かわしい……医者を呼べ！」

「のほほんさん、呼ぶ人違う！」

「シェフを呼べ！」

「シェフにしたの！？」

普通弁護士とかじゃないの？　医者やシェフになにしてもらうの？

「あの夜に……天音ちゃんのワイシャツ着ながらファーストあげたのに！」

「人が寝てる間に何してんだあんな！」

「……（ポツ）」

「のほほんさんも！？ のほほんさんも何かしたの！？」

「………」

「黙ってお腹さすしないでください！」

これが本当ならやばいぞ。

大変だ大変だ大変だ、一夏のところに逃げ込むか？

「まっ嘘よ」

「でしょうね」

「そうだよーちゃんとそーゆー関係になってからするよー」

うん、常識があつてよろしい。  
2人共いい子だ

「あの夜はそこの2人が天音さんの上を脱がして舐め「わー！わー！  
！」」

「お姉ちゃんいつちやだめー！」

と思いたかったマル

さて、どうしてくれようか……それだと弱点を知られたかな？

「あ、あはははは」

「……………」

「ど、どんまい？」

楯無さんのほほんさんが少し上目遣いで見てくる。  
うーん、まあやっぱりあれだな……うん…

「まあいいですよ、思ったより大変なことされてないみたいですし」

「まあ仕方ないけど明日お姉さんがデートしてあげる」

「いえ遠慮します、明日はちょっとやることがあるんで家に帰りますんで」

なぜだろう……断つたのに顔を赤くして俯いた。  
いつから楯無さんはDMになったんだらう？

「どうしよう、虚ちゃん本音ちゃん！ お家にお呼ばれしちゃった」

「ずるーい」

「お呼びじゃないですから」

ほっぺを膨らまして睨んでくる楯無さんを見無視して家に電話かける。

『はい。卯月です』

「あー美咲？ 明日一度家に帰るからよろしく」

『えっ帰ってきてくれるの！？ 楽しみにしてるねっ、お兄ちゃん』

ブツ

電話を切って楯無さんを見ると冷たい目をしていた。  
こわいこわい……

「前から気になってたんだけど苗字が違うのにお兄ちゃん？」

「孤児院から引っこ抜いたんです」

「中学のファンクラブ……会長は鈴ちゃんだったよ？」

「調べたんですか……。ファンクラブは2つあったんですよ、独占欲が強いあひるのファンクラブと私をそれから保護してくれる鈴のファンクラブがあります」

「ふーん」

楯無さんの目がさらに冷たくなった。

怒ってるのかな？ 今日寝てる間に殺されるのかな？ 貞操の危機かな？

のほほんさんはニヤンコ先生を猫じゃらしで遊んでるし

ピロロロンアフターケア

「はい？」

『天ちゃん？ 茜だよ、明日天ちゃんのお家いくね。色々積もる話もあるし……。ね？』

「…………はい」

ピッ

やばい…………やばいぞ！

明日完全防備でいかなきゃ耐えられないかもしれない…………トーナメ

ント前で死ぬなんてごめんだ！

「ていうか天音ちゃんの着信音って不思議な音なのね」

「……おやすみっ！」

「じゃ、私も」

「たっちゃんだけずるい、私も」

思ったよりハード………煩惱？　なにそれ？　幼なじみと妹のおかげ  
でそんなもの消え去ったぜ！

明日生きて帰れますよーに

8話「のほほん強」（後書き）

楯「『五月蠅い』これなんて読む？」

天「こがつかえい！」

楯「……『五月晴れ』これは？」

天「こがつかはれ。いいことですね！」

のほ「……『鳳凰』これは？」

天「……ほう……」

楯&のほ「そうそう！」

天「……ほう？」

楯&のほ「……うん、そうだね」

9 話「お酒は20歳から」（前書き）

何だかいつの間にかPV2万いつてました。

たくさんの人に読んで頂けて嬉しいです！  
これからも応援よろしくお願いします！！

## 9話「お酒は20歳から」

### 卯月家

表札の前にかれこれ30分立っている。

なぜかって？ 決まってんじゃん、死ぬ覚悟していかなきゃいけないからだよ？

「鈴がこの前のゴーレム襲撃の時のこと言わなきゃ、こんな思いはしなかったのに……」

「どんな思いかしら？」

「どんなって……茜や美咲は私が無茶するのを嫌ってますからね。申し訳ないというか死にたくないというか」

「複雑ねえ」

はて、誰と話してるんだろう？ こんな朝早くにここら辺歩いてるのって卯月家の人間しかいないしなあ。  
まあボケてないで振り返ればいいんだ。

「……母さん」

「おかえり〜相変わらず可愛いわね!」

「嬉しくない!」

悪戯っ子みたいな笑みを浮かべるどうみても女子高生にしか見えない母さんが家の鍵を開ける。

「朝ご飯なに食べたい?」

「うーん、じゃあカル「ボロネーゼでいい?」へえ作れるんだ」

「任せときなさい!」

そっいつてキッチンに向かう母を見送り、リビングにいきソファ―に座ってくつろぐ。

10秒後、上の部屋から何かが飛び起きた音がする。

「……あいつは遅刻しそうな女子高生か?」

「お兄ちゃん会いたかったよー!」

「おぐあー!」

容赦なくダイビングしてくる妹を優しく受け止めてあげる。

決してダイビングというより瞬間加速並に早くてよけれなかったわ

けじゃないよ？

「お兄ちゃん！ 久しぶりにしりとりやろっ」

「ああ、いいよ。しりとり！」

「りんごー！」

「ゴリラ」

「ラリアット！」

なんて恐ろしい単語を言うんだこの娘は！  
今日俺がくらう茜の攻撃No.1の技なのに！

「と、トーマス」

「スーパーマーケット」

「とんかち」

「ちこ」

「……………国会」

「いんづ」

「……………海」

「ミルク！」

「クレー」

「レプ！」

「……………」

おい、誰だ人の妹に変なこと教えたの、出てこいや。  
普通にしりとりさえできない状態だぞ。

どこそのアニメにあったな、たしか『生 会の一存』だったな。  
アルミニウムでハメられた主人公、あれはかわいそうだった。

「美咲、誰にそんな言葉教えてもらったんだ？ その人と話さな<sup>こと</sup>き  
やいけない」

「この人だよ？」

美咲が体をずらすと水色の髪をして悪戯っ子みたいな笑みを浮かべ  
た生徒会長がしゃがんでいた。

「なんでいんの！？ 寝てる間に抜け出てきたのに！」

「ふふふ、まさか4時に出てくとは思わなかったわ。やるわね」

「くっ！」

この人は出し抜けないか……ってそんなこと言ってる場合じゃない。

「いつからいたんですか？」

「美咲ちゃんが飛び起きたときから、私が起こしたんだし」

「お兄ちゃん…この人だれ？」

あれ……おかしいなあ？手が震えてる…美咲の目にはちゃんと光が  
……やどつてなかった……。

デンジャーデンジャー

「えええつと！学校の先輩で生徒会長の更識楯無さんだよ！」

「ああ！なーんだお兄ちゃんの彼女じゃないんだね、よかったー」

「なんで？」

「「殺さなきゃいけないとこだった」」

この声って……

恐る恐る後ろを振り返るとそこには鬼神がいた。

「鈴から聞いたよ？ まったく天ちゃんダメだっていったよね？」

「あっ忘れてた。お兄ちゃんめっだよ？」

さあ生命活動終了3秒前、3、2、1

「ぎゃああああああー！」

「あれ？ 少し殴るところ間違えちゃった」

いえいえ、肋骨ずらしといて何言ってるの！？

「ていつ！」

「おわっ！」

ザクッ

私は妹が刃物を振りかぶつてるところでよこっと思ひし、私の代わりにクッションが餌食になった。

「……サバイバルナイフ」

「まだ使い慣れてないから難しいなあ」

「難しい！？ 美咲はただ突き刺そうとしたただけだよね！？」

後ろに下がろうとすると壁に当たる。

まずい……ここで避けたら茜の拳で碎けるか、美咲のサバイバルナイフで傷つくかだ。

「くっ……こんなときにあひるがいれば」

「あの人に何かされたの！？」

「お、追い掛けられただけだよ？」

何だか思い止まってくれてありがたい……楯無さんは笑顔でこつちを眺めてただけだね。

この人何しに来たの？

「まひるさんはIS学園の生徒だから天音ちゃんのこと追ってるのよ」

「どうしよう……茜ちゃん。私達も行くべきかな？」

「鈴や一夏くんがいるなら平気だと思うけど」

あそこほぼ女子校だし……とつぶやきながら肩を落とす茜を視界の隅

つこに起きながら、母さんの作ったボロネーゼを食べる。  
うまいなあ……………なぜかカルボナーラの味がするけど……………これホン  
トにボロネーゼ？

「お兄ちゃん、今日はいつまでいるの？」

「昼までかな……………生徒会の仕事もしなきゃいけないし、試合近いし」

「天ちゃん試合でのん！？」

「そりゃあ、専用機持ちだし」

コソコソと話始めたお二人さんを置いて、食事再開といき……………  
……………たかった。

「美味しかったわ天音ちゃん」

「……………」

むかつく……………むかつくぞこれは！

給食で好きなものを最後に食べようと思って残しいたら、隣の子  
に『食べてあげる！』って取られたくらいむかつく！

ショートケーキの苺を強奪されたときくらいむかつくぞ

「お口なめて綺麗にして？」

「なんですか……そこまでデリカシーのかけらもない行為はしませんよ」

「えー、お兄ちゃん私に一回してくれたじゃん！夢の中で」

「違う、そこは胸を張ってドヤ顔するとこじゃない」

「私にはしてくれたよね　小学生のとき！」

「幼かったからね」

ゴキン

「がああきやあああ！　関節が！」

楯無さんが涙目でこっちを睨んでいます。　僕はどうしたらいいのでしょうか？

今にも泣きそうなのです、舐めればいいのでしょうか？

「……………仕方ないですね」

「……ん」

楯無さんの口についたケチャップらしきモノやチーズを舐めとっていく。

「…ペロ…チュパ…」

「……んん!…」

茜と美咲と母さんが顔真っ赤にして、凝視してきてるけどどうしたんだろ？

ビデオカメラまで持ち出して。

「……はい、綺麗(?)になりましたよ」

「ありがとう」

半分キスに近いけど気にしたら負けだよ………ってもうこんな時間だ!

「悪いけど、もう戻るね」

「あつ! うん、ごちそうさま!」

「お兄ちゃん今度は私にやってね!」

「…お父さんショック死しちゃうかも」

「何するの!? 父さんになにするの!?!」

恐ろしい人達だ……ていうかなんで茜がごちそうさまっていうんだろっ？

何も食べてないよね？

顔真っ赤にしてる楯無さんを引っ張って家を出る。

「（計算通り！……何だけどホントにしてくるなんて天音ちゃんって意外に大胆……／＼／＼でもでも結構よかったな、学園でやってくれるかな？）」

「楯無さん？ 大丈夫ですか？」

「あつ、ええ大丈夫よ！天音ちゃん」

「そうですか、じゃあ行きましょう」

「そうね」

楯無さんと手を繋いだまま駅に歩いていく。

暖かいし、柔らかいな……ニャンコ先生のお腹なんて目じゃないぞこれ

「で、それだけで無断外出したのか」

「はい！」

ゴッ

「誇らしげに返事するんじゃない！ 馬鹿者が」

くああ！ 行ってえ……これぞ正しく鉄拳ってどこか……ラ ウも青ざめるよ。

織斑先生の制裁を受け、部屋に戻っているとニャンコ先生がノソノソと歩いてきた。

「私を連れていかんからこういう目に会ったぞ、天音」

「ニャンコ先生はお荷物だからなあ……」

「なんだと！？ この無礼者め！」

「つれてつたら愛でられるよ？ ここの比じゃないくらい」

「よし、部屋に戻って酒だせ酒ー！」

昼間っから酒ってどこの中年おやじだよ。  
猫のくせに贅沢だなあ……どこぞの耳無し青い猫型ロボットみたい

にドラ焼きくつてろよ。

部屋に戻って冷蔵庫を開けると酒の缶が2〜3個足りなかった。

「ねえ、ニャンコ先生。酒の缶が2〜3個足りないんだけど」

「あー、それなら楯無とのほほんが仲良く一本ずつ飲んでたぞ？」

「なんだって!？」

急ぎ足で広間にでると顔が赤い2人を発見

手に持つてゐる酒を取り上げる

取り上げた酒をニャンコ先生に渡して、2人の現状確認

「にゃふ　天音ちゃんげつとー!」

「おわっ!」

「ずうるーい、らっちゃん。私も天音ちゃんほおしいろー」

楯無さんに抱き寄せられ、のほほんさんに抱き着かれる。

最近のほほんさんに抱き着かれるのは慣れてきた。

ですがわたくしも思春期の日本男児……大きいお山が背中とお腹に2つつ押し付けられると理性というものがね?……男の子はわか

つてくれるよね？

「離してくださいよ！」

「天音ちゃん部屋で私とハグ！」

「なんですか？ その 園遊園地で僕と握手みたいな言い方は、ここでヒーローショーやってませんよ？」

「そんなあころゆーお口はこーら！」

チュ

「たたたたた楯無さん！？」

「あーずるうい……私もちゅーしゅるのー」

「ののののほんさんまで！？」

ダメだ！ 完全にこの二人酔ってる。大胆すぎるし行動が異常だ、虚さんは今いないしどうしてこうなったんだ？  
ゼロ…私に未来を見せてくれ！

ピロピロピロピロピロピロ……チーン

死

「認めない！ 私はおまえを認めない！」

「うるしいよ？ あまれちゃん」

「しょーらお？ ねうくらっれきからねお？」

「！！（チャンス！ ここで二人を寝かせれば被害は少なくなる！）  
わかりました寝ましようか」

ガバッ      ボフッ      ギュー

「……ZZZ」

「わーお、漫画や小説の世界だけだと思っただけどまさか現実<sup>リアル</sup>で『ZZ』を見るとはね」

「天音、貴様も苦勞してるな。そしてイカあぶれ」

「この状態でできるわけないでしょ……」

まったく、ホントにこの猫と21世紀の青い猫型ロボットを交換してほしいよ。

それはそれでめんどくさそうだけど……。

「（そういや、一夏とか何してんのかな？ シャルと一緒にいるんだろっけど、鈴やセシリアや箒が良からぬことしてないといいけど）」

明日はいいことありますよーに！

余談だが、次の日は楯無とのほんさんが二日酔いで介抱にあけられることになった。

9話「お酒は20歳から」（後書き）

楯「天音ちゃん……頭が……」

のほ「あっちゃん……クラクラする……」

天「……これに懲りたら酒は20歳になるまで飲まないでください」

楯&のほ「はい（でも天音ちゃん（あっちゃん）が看病してくれるなら飲んでも……／＼／＼）」

天「不安だ……まああれだな。ド えもん！」

## 10話「信じたくない」

「……結局特に訓練しなかったね」

「まーなんとかなるんじゃないかな？」

のほほんさん……1番心配なのは君なんだよ。  
今回の対戦相手は一般生徒だから私は平気だけども。

ビーーーーー！

「のほほんさんは下がって！」

「ほいほーい、いいところり任せろ」

この人にやられる人ってかなりショックだね……ラウラとかラウ  
ラとかラウラとか。  
きつと油断してたんだろうけど

「悪いけど、少し真面目にやらせてもらっよう！」

「えええ！ それはないよー！」

「私たち瞬殺されちゃうよ！ 手を抜いて、お願い！」

「まあ確かに私もそっちの立場になると手を抜いてほしいね」

GNバスターソードにして、気づかれないようにライフルモードに切り替える。

「でしょ！ だからここはハンデがほしいなあー」

「うんうん！」

「そっか……だが断る！」

相手に向けて引き金を引く。

セシリア戦法だけどロックしてないだけに不意打ちなんだよね。

放たれたビームは二人に直撃した。

「きゃああああ！」

「あれー？ 女は男より強いんじゃないの？」

ニヤニヤしながらビットを飛ばし、ライフルモードに切り替え猛攻撃する。

相手は四方八方からの攻撃に対応できなくて、動き回ってはいるが

当たりに行ってるって感じた。

「当たり前に行ってるよ？ちゃんと避けないと」

「まだ私には無理だよー！」

「責めて戦わせてー」

ビットを羽に戻してスライドさせる。はて、この高機動モードの限界ってどれくらいなんだろうか……試してみるのもいいけど可哀相だなあ。

やっぱり楯無さんくらいの人相手なら心起きなくやるのに……。

「いくよ？」

「「おっけー」」

「ていやー！」

「「「えっ？」」」

ビーーーーー！

『勝者、卯月&布仏』

あれー？ おつかしいなあ……本当にいいところ取りされたんだけど？  
てかのほほんさんいつの間にか前に出てたの？ 予想外過ぎるんだ

けど。

「やったね　　勝っちゃったよ」

「う、うん…素晴らしいところ取りだったよ…?」

「ありがとう、しょうじんします!」

きつと精進しても味方が相手より強くないと無駄になるよね。

のほんさんはゆっくり更衣室に向かって行った。

「さて、次は一夏&シャルの番だね。死なないように頑張ってくれ」

天音もそこを後にし、更衣室に向かった。

アリーナから遙か上空にフリーダムが浮遊していた。

フリーダムはアリーナの中を眺めて退屈そうにしていた。

「早く強くなつてよ、天音。……貴方の大切な人殺しちゃうよ?」

フリーダムが向いた方向に黒い煙が立っていた。  
周りには消防や救急車がたくさん並んでいる。

「ふふふ……はははははは!」

甲高い笑い声が辺りに響き渡る。

そしてフリーダムはゆっくりアリーナに向かって降りていった。

アリーナでは一夏とシャルのコンビネーションでラウラを圧倒していた。

ちなみに第は早い段階でお休みになりました。

「あっちゃん。あの二人に勝てるかな?」

何を言ってるんだい？ のほほんさんよ。 もちろん

「勝てないね」

「あゝやっぱり？」

あれは嵌められたらおしまいだ……何とかして一夏を潰さないといけない。

シャルはなかなか落ちてくれなさそうだからなあ

一夏がシャルの捨てたアサルトライフルを使ってラウラを後ろから撃つ。

ラウラは避けれず直撃し、ワイヤーブレードを飛ばして一夏を攻撃している間に、シャルがラウラの懐に入りシールドピアースをたたき付けた。

「絶対防御発動したね」

「あれに当たりたくないなあ……」

「シャルは私が止めとくよ、のほほんさんはいいとこ取りで」

「まっかせんしゃーいー！」

のほほんさんは胸の前で手を合わせる。

まあ手を合わせてるのが、握りしめてるのかわかんないんだよね。

『あああああああ！』

「「！？」」

ラウラの叫び声が聞こえ、二人ともラウラの方を見るとISがラウラを取り込みながら形を変えていつていた。

「天音！ 何かくるぞ！」

「またか……のほほんさんは避難して、ニャンコ先生いくよ！」

「あ！ あっちゃん！」

のほほんさんを置いてピットに走り出す。

一夏の方を見ると攻撃をくらったみたいでISが解除されていた。箒となんかイチャコラしてるのは何なんだろう……？ 見せ付けてんのか？ 『なんとこうかくけん』をお見舞いしてやろうか？

「ハア……ハア……」

ピットについてISを纏い飛び出す。一夏はシャルのISから出て

いるケーブルを白式の待機状態のガンドレットに繋いでいた。

「……なにしてんの？」

「天音！？　なんでここに？」

「変なやつが来るってニヤンコ先生が言ったから」

「変なやつ「危ない！」なっ！？天音！」

ドガアアアアアン

突然赤いビームが一夏に向かってとんできたのに気づいた天音が一夏とビームの間に入って最悪の事態をさけた。

「……つう！　これってバラエーナ！？」

「こんにちは。天音」

目の前にゆっくりとフリーダムが舞い降りて来る。

ソードビットでフィールドを一夏達の周りに作る、フリーダムはビームライフルを腰にマウントしてビームサーベルを引き抜く。

「楽しませてくれる？」

「無理だね。でも落とさせてもらっつよ」

「ふふふ、その意気込みをかっていいこと教えてあげる」

天音はフリーダムがハイマツトモードにしながら発した意味深な言葉が気になった。

「貴方のお家……火事みたいだけど大丈夫なの？」

「……お前、まさか！」

「私は何もしてないわ。ただ流れ弾が家を焼き払っただけ」

GNソードVを展開してフリーダムに突っ込む。

天神のウィングスラスターのビットがマウントされていた所から、GNドライブを使ってる訳でもないのに緑色の光が出ていた。

「お前ええ！」

「ふふふふふ」

GNソードVとビームサーベルがぶつかり合うと激しい火花が散った。

「天音！」

「一夏！ お前はそこの黒いのやれ！」

「っ！ わかった」

天音は攻めつづけるが一向に一撃をあたえられそうになかった。教師部隊もきたのでビットをフリーダムに向かわせる。

「とつとと落ちろー！」

「いいわね。怒っても動きが単調にならないなんて、むしろ良かったる」

「その無駄口叩け『卯月引け！』なっ！」

いきなり織斑先生から通信が入って引けと言われ少し不快に思った。

『教師部隊に任せてお前はビットに戻れ！』

「……………」

「邪魔が入ったみたいね。私は撤退させてもらっわ」

上昇していくフリーダムを睨みつける。  
ビットを全部戻し、GNソードVも格納する。

「ああそれと、はやく行かないと妹さん死んじゃうよ?」

楽しそうな声で言う言葉に苛立ち、今にも襲い掛かりそうな衝動を抑えてGNバスターソードライフルモードにしてアーリーナのバリアに向けて、最大出力で撃った。

バリアに穴が開き、そこから自宅へ飛んでいく。

『卯月! どこへ行く!? 戻って来い!』

「……………」

織斑先生の制止を無視して家の前で解除して降りた。

家は激しく燃えていて誰も入れない状態だった。

「君! 危ないから下がって!」

「どけ。私がいく」

ISを胴の部分だけ展開し、家の中に入る。

リビングに行くと黒焦げの人らしきものが2体転がっていた。

「……このサイズ…美咲じゃない…父さんと母さんだ」

胸が張り裂けそうな思いになるが、その2体を担いで一旦外に出る。

野次馬に見られないとこに置いてからまた入り美咲を探した。

リビング、キッチン、トイレ、寝室を探してもどこにもいなかった。

「…お…ちゃん…」

「美咲？」

微かに自分と呼ぶ声が聞こえた。

ハイパーセンサーの精度をあげて耳をすます。

「……お…いちゃ…」

「……………」

「……お兄……ん」

「風呂場か！」

すぐに風呂場に行くところだけ火が弱かった。

下を見ると湿っていて、あるところには水溜まりができていた。

風呂場の戸を開けると美咲がシャワーを出しっぱなしにして、風呂桶の中で奮えていた。

「美咲！」

「っ！ お兄ちゃん！」

美咲は私を見るなり抱き着いてきた。

すごく奮えていて目も赤い……怖かったんだな、なのに呑気に戦って結局逃げられて……情けない！ 何も守れないのか俺は！！

「ここから出よ？」

「ぐす……どうやって…？」

「ちょっと待ってて（ニヤンコ先生、ソードビット飛ばして家中の水が出るとこ破壊して水吹き出させて）」

「わかった」

天音の後ろにソードビットが展開され飛んでいく。

色んな破壊音が聞こえ、しばらくすると水が吹き出す音が始めた。

『完了だ。そやつをちゃんと守ってやれ』

「行くよ、私から離れないでね（ありがとう、今日は奮発してあげる）」

「……うん」

シャワーで廊下に向かって水をまく、壁と床を念入りに湿らせ美咲を抱き抱えてキッチンに向かう。

キッチンにいくと蛇口や色んなところから水が吹き出していたので、そこで念のため美咲に水を被せる。

「お兄ちゃん…大丈夫だね？ またこの前みたいにみんなで笑えるよね？ お母さんもお父さんともお泊りいけるよね？」

「……うん、たぶん」

美咲にホントのこと言うかどうか迷ったが、今いつたら壊れてしまいそうで言えなかった。キッチンの壁を切り裂いて外に出た。

「（ホントはこんなことしたくないけど、あのままだと……）」

消防の人がいるとこまで戻ると、IS学園の教師が消火活動を支援していた。

人混みから茜が出てきて駆け寄ってきた。

「天ちゃん！ 美咲！ 大丈夫！？」

「お兄ちゃんが助けてくれたから平気。 お兄ちゃん、お父さんとお母さんどこ？」

「……………」

「お兄……ちゃん？」

「天ちゃんどうしたの？」

「もう言い逃れできないぞ。 言ってしまえ」

ニヤンコ先生の言う通り。

遅かれ早かれ知られることになる、せめて私の口からいった方がいいのだろう。

「父さんと母さんは……………死んだ……………」

「えっ？」「」

二人が信じられないような顔をしていると消防の人が私が置いていた黒焦げの2体の遺体を見つけた。

「遺体発見！」

「そんな！」

「お兄ちゃん！　嘘だよね！？　死んでないよね？」

「……………」

「嘘って言ってよ、いつもの冗談だって言ってよ　お兄ちゃん！！」

「ニヤンコ先生、DNA鑑定できる？」

「やってくる」

自分も信じたくない。他の人っていう極僅かな希望にかけてみるとこにした。

美咲を一人にしたくない。

「天音、あれはお前の両親だ」

「嘘！　その猫のいうことは全部嘘だ！　お兄ちゃんそうだよね？　生きてるよね？」

「……………死んでる」

「…嘘だ！嘘だ嘘だ！　お前はお兄ちゃんじゃない！　偽物！　本物のお兄ちゃんを返せ！」

「美咲落ち着いて！　天ちゃんも手伝って！」

「茜ちゃんこんなやつお兄ちゃんじゃないよ！ 偽物だ！ 本物の  
お兄ちゃん返せ！ お兄ちゃんは冗談をいっても嘘はつかなかった  
！」

取り乱す美咲を野次馬がみて情けをかけているのがすごく苛立った。  
おまけに変な目で見てる奴もいる。

ISを展開し、ビームを空に撃つ。

「お前達どっか行けよ。不愉快だ、消えろ」

そっついながらGNソードVを野次馬に向けるとさっさといった。  
ISを解除し美咲に近寄る。

「うっく……お父さん……お母さん……やだよ……」

「……美咲」

「……どっか行けよ……お前なんか知らない…… IS学園に引き込ま  
つてろよ！ 安全なところでヘラヘラしてろよ！」

「……っ！」

「何でお父さんが死ななきゃいけないの！ 何でお母さんが死なな  
きゃいけないの！」

「……そ、それは」

「……お前が……お前が死ねばよかったんだ！ お前なんか死ねばいいんだ！」

「……………」

天音は美咲から離れ、消防車に寄り掛かった。  
火は消え、撤収作業していた。  
消火活動をしていた山田先生が近寄ってきた。

「……あの、ご両親のことは残念でした。それであの二人をI S学園で保護しようと思うんですけど」

「……そうしてください」

「……では学園に戻りましょう」

その日、私と美咲に大きな溝が出来てしまった。

11話「前回は夢！」（前書き）

今回はくそ短いですm（  
—（  
m

## 11話「前回は夢！」

私は最悪だ。

力を手にして家族が守れない。

義妹の日常を守れない。

幼なじ

みの日常を守れない。

そして何より

親の葬式にすら参加できていない

私はIS学園にもどつたら織斑先生の説教と1週間の独房での謹慎処分になり、葬式に参加できなかった。

「…………お前が死ねばよかった……………か」

確かにその通りだ。

私がIS学園にこなければ、ISを動かさなければ、生まれてこなければ美咲があんな思いをせずに済んだ。

楽しく学校に行って友達と遊んでいられた。茜もだ。  
人の人生をめちゃくちゃにしまった……死ぬなんて生易しいものじゃ償えない。

「……どうすればよかったんだ？ ……ゴーレムの時に死ねばよかったのか？」

そんなことを考えてると独房のドアが開いた。  
見ると織斑先生と山田先生がいた。

「出る、独房生活はおしまいだ」

「……………」

織斑先生の横を無言で通り部屋に戻る。

山田先生がオロオロしていたけど、それどころじゃなかった。

部屋のドアを開けると美咲と楯無さんの声が聞こえた。

『天音ちゃんのこと嫌いなの？』

『あいつは偽物のお兄ちゃんです。私の人生をめちゃくちゃにしたのに葬式にも来ない最低なやつです』

「……………」

私はゆっくりドアをしめ、屋上に向かった。  
屋上は清々しいほど青い空が広がっていた。  
私はねっころがり空を眺めた。

「最悪だ……私」

美咲「ごめんなさい、父さん母さんごめんなさい、茜ごめんなさい。  
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい  
ごめんなさい

「……うう……く……」

弱い自分が嫌だ。  
でももうここに存在する意味がわからない、存在しなくてもいいと  
さえ思う。

屋上の鉄柵の向こう側にいき、ゆっくりと体勢を斜めにしていく。  
そしてそのまま落ちていく。

「（今そっちに行くよ）」

目をつぶり最後の瞬間を待ち、すべてが終わった。

.....  
.....  
.....  
.....

「ていう夢を見た」

『あはははは！ お兄ちゃん心配性だね。可愛いなあ』

現在ピットの中で美咲と電話中……申請のし忘れてペアがのほほんさんではなく、くじで決まったラウラとだった。  
しかも一回戦目は一夏&シャルだ。手厳しい！

『お兄ちゃん大丈夫だよ　そんなことで大好きなお兄ちゃんを嫌いにならないから！』

「おー！　ありがとう妹よ！　愛しているぞ！」

『あははは、いつものお兄ちゃんだねーこのニブチン野郎っ』

「じゃあそろそろ試合行ってくるよ」

『頑張つてね！ あっそれと夏休みはちゃんと帰ってきてね！』

「わかつてるよ」

通話を終え、ISを纏いピットから出る。

中央付近にラウラが腕を組んで始まるのを待っていた。

自信があるのは結構なんですが……その邪魔したら殺す的な目はやめてほしいです！ ゾクゾク……じゃなくてビクビクしちゃいます。

ていうか頭についてるのウサミミに見えて可愛らしいんですが……

のほほんさんとは別の魅力であって同じ魅力を感じる。

まさか癒し系仲間なのか！？

少しすると一夏とシャルがとんでくる。

何だか燃えてるみたいで夢の通りにならないといいけど、一夏はある意味トラブルばかり連れて来るんだよね。

昨日なんて看病中に呼び出されて行ってみたら見事に修羅場を作ってた奴だよ？ 逃げ帰ったよ……箒とセシリアの目が怖かったからね。

……まあ熱いバトルの始まりだ！

11話「前回は夢！」（後書き）

こんなにした僕ですが、悪いとは思ってるんですよ

でも……ねえ？

一度はシリウスにしたほうがいいかなって思ったんです

## 12話「第2ラウンド」

開始のブザーがなると一夏はラウラに突っ込んで行ったがAICで止められた。

「くっ！」

「（真っ正面から行けばこうなるだろうが）」

私は一夏を蹴り飛ばし、シャルにビームを撃って牽制する。

「っ！ 貴様邪魔をするな！」

「私には私のやり方がある！……といってもないに等しい！」

覚悟も度胸も信念もプライドもないぜ！

「いくよ！ 天音」

「かかってきんしゃい！」

シャルの猛攻撃をISの性能を思いっきり頼りにしてかわしていく。

当たらないと判断したのか、ショットガンに持ち替えて距離をつめながら撃ってきた。

「なんのこれしき！」

「えっ！？ 普通ここまで距離を詰めたら避けないよね！？ なんで避けてるの！？」

「ISと操縦者の性能の違いが戦力の圧倒的差であることを教えてやる！」

「当たり前だよね！？ ISだけならまだしも、操縦者入ったら当たり前だよ！」

なかなかいいものを持つてるではないかシャルル・デュノアくん！一般常識を持つてゐる君のツッコミはいいものだと思つよ？ 欲しいね、君みたいな子。

「一夏のとこ行きたいなら行けばいいのに」

「えっ？」

プライベート通信に切り替えてシャルに繋げる。

『私はラウラと仲間割れしたいんだよね』

『なんで？ ペアでしょ？』

『面白そうじゃん！』

というところで一夏のとこにいつて、誰でも防げるような攻撃をする。

「やあ一夏」

「くっ！ シャルルは！？」

「僕は無事だよ！」

一夏とラウラの乱闘に私とシャルが加わって、一夏&シャルのコンビネーションが炸裂した。

「ちっ！」

「ラウラ助けてあげようか？」

「貴様はそこで見てろ！」

「はいはい」

一夏とシャルを相手にうまく立ち回ってるのは流石だ、でもラウラ

はどんどん追い詰められていつてる感じがする。

一夏はシャルの捨てたアサルトライフルでラウラを後ろから撃ち、ラウラの仕返しワイヤーブレードを避けれずにあたる。

流石一夏だ、避ける動作くらいしたらどうなんだ？ あいつ

ドガアアアアン！

「ぐああ「なあ一夏、なんで避けようとしなかったんだ？」！」

「えっ？ 反応できなかったっていうかラウラやられてんのに無視！？」

ラビツ党のみなさんすいませんね、だってさ一応主人公私だし？  
好きにやってもいいかなって思ったんだ。  
作者がいけないんだよ？

「あああ「今日も空青いなあ……」あ！」

「えっ！？ ラウラが大変なことになってるのに天気気にするの！？」

「卯月天音……こいつだけは味方にも敵にも回したくない」

褒められた気がする。ラウラがISに取り込まれて形を変えていくのを出来るだけ見ないようにした。

というか怖くて見れなかった。  
夢が正夢にならないとは限らないからだ、正直もう家に飛んでいき  
たい気分だ。

「天音？」

「…あの夢の通りだ……」

「「夢？」」

「……………とつと沈めえ！！」

変化が終わったISにGNソードVで切り掛かるが、妙に見慣れた  
武器で防がれた。

「……………これって」

「雪片……………こいつ！」

GNソードVを両手に持ち猛攻撃するが全て受け流された。  
一夏にまかせようかな……………（人任せ精神起動）

「一夏！ エネルギーはどれくらい残ってる？」

「19だ。ないに等しい」

「シャルくんエネルギーを一夏にあげて」

「わ、わかった」

「ちゃんと引き付けておくから決めるよ?」

「...?... あっ!、ああわかった」

わかってくれて何よりです。

さて頑張りますかね!

鬼神チフーユモドキに接近し乱舞する、休むことをせず機体性能に頼り、出来るだけ早く重い一撃を入れるように。

だが天音の攻撃はことごとく防がれ、反撃すらされ始めた。

「おわっ!」

横の薙ぎ払いがくるが避けれないと判断し横にそれながら右腕で受ける。

ザシユツ

..... 嘘だよね? だって絶対防御切つてないのに発動せず、右腕を斬られたなんて嘘だよね?

ああとれてないよ? 繋がってるよ! 半分斬られたかなあ、すっげえ痛い..... なので、さんハイ!

「いっつてええええええええええ！！！」

「天音大丈夫か!？」

「すごく痛い！　例えば野球で渾身のストリート投げた方がいいんだけど、打たれて股間に直撃したくらい痛い！！」

「  
「  
..  
ああ  
..  
」  
」

一夏は顔を青くし、シャルは赤くしていた。

ていうか早くしてくれ、こいつ短期決戦に持ち込まないと私じゃ無理だ。

さつきとは立場逆転で天音がひたすら攻撃を防いだり避けたりしている。

かなりギリギリでね

「よっ、ほっ、あぶ！」

「天音！ 後は俺がやる！」

「待ち兼ねたぞ！ 少年！」

ビットを飛ばし牽制しつつ、GNバスターソードで二セ雪片を一刀両断する。

やっぱり耐久力がないね。ていうか一夏が来てくれなかったら隙が

できなかった。

「うおおおおー！」

一夏が零落白夜を発動しISを切り裂くと、ラウラが出てきてしっかりと紳士に受け止めましたとき。めでたしめでたし（完）

「これで終わりじゃないよね！？ ていうか早く保健室いくよ！すごい出血だよ」

「あー、ホントだあ。出血大サービスだね……アームレッド！」

「なにその何とかレッドみたいなノリ、ていうか保健室いくよ！」

「アームホワイト！」

「なんで一夏はそこでのるのさ！？ 天音つれてくの手伝ってよ！」

「はいはい、逝きますよ」

「逝っちゃダメだよ！ 保健室に行くんだよ！？」

「あーら、よっちゃんの」「ストロップ！」「……はい」

そのままシャルに首根っこ掴まれて保健室に連行されていった。

保健室の先生は天音の傷を見て、貧血を起こしそうになっていた。こんな人が保健室の先生でいいのか？

「天音くん？ とても言いにくいのですが……………」

「せ、先生！ この子（右腕）は治るんですよ！？」

「……………出来ることはやりました……………」ご覚悟を……………」

「そんな……………嘘ですよね！？」

「……………」

「そ、そんな……………智子（右腕）——！」

私の智子が……………ともちゃんがああああ！ この恨み忘れんぞ、ラウ・ボー・デヴィツヒ！

「何どこかの恋愛映画のバッドエンドみたいなことしてるの！？」

「私のともちゃんがああああ！」

「静かにしないとラウラが起きるぞ？」

「たたき起こせ！ ともちゃん（右腕）が大変なのにすやすや寝やがって襲うぞ！」

スパアアアン

「静かにしろ馬鹿者、お前達は部屋に戻れ」

本物の鬼神チフーユのが現れた！ 1・言うことを聞く 2・逃げる 3・逃げる

もちろん逃げるぜ！

でも部屋には戻らないよ？ 楯無さんが待ち構えてるかもしれないし、この不可抗力で出来た傷を3時間握られたら悪化して切断しなきゃいけないかもしれないんだしね。

「じゃ戻りますよ。腕も安静にしてれば大丈夫ですし」

廊下に出て猛ダッシュして食堂に逃げ込む。

人がいるとこならド派手なこととはできないだろうと思った。

「……………（ダラダラ）」

「……………（ニコニコ）」

…………… 思ったんだけどね、食堂の入口で待ち構えてるってどゆこと？  
しかもマッサージ機持ってるし、食堂でマッサージ？ ありがたいわー

「ちょっと部屋いこうか？」

「お腹す」「いこうか？」「……了解です」

その後、楯無さんに拷問おはなしされたのは言うまでもない。

「ねえ一夏、シャルはどうしたの？」

「さあ、朝先に行つてつて言われたからそのうちくるんじゃないか？」

「へーほーふーん」

楯無さんの拷問おはなしがあつた次の日の朝、ラウラとシャルの姿がなかった。

右腕は昨日ので少し悪化したが楯無さんの可愛い寝顔を見れたからいいとする。

ちなみにのほほんさんの寝顔はほぼ毎日見ております。楯無さんは私が起きてるときは寝ないから

そうしてると教室のドアが開いた。

「おはようございます。ええつと転校生（？）を紹介します」

山田先生が何やらお疲れな顔をしていらつしやる。  
するとシャルにとてもよく似た人が入ってきた。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしくお願いします」

「「「はあ？」」」

「デュノアくんって美少年じゃなくて美少女だってこと？」

「織斑くんと同じ部屋何だし知らないってことは……」

「昨日大浴場使ったの男子だよね!？」

クラスのみんなが騒ぎ始める。  
すごい想像力と推理力だ。

「シャルルの双子お姉さんだよね？」

「シャルルは偽名でシャルロットが本名だよ」

「な、なんだつて！？　じゃあ昨日大浴場で一夏と大人の階段を爆走して\*%\$#&amp;「¥??」」

「落ち着け天音！　そんなことしてないぞ！？」

ドガアアン

壁を破壊して鈴登場！

額に怒りマークがついてる上にIS展開済み、果てしなく危険な状態なのである。

「一夏ああ！」

「まてまてまて！　俺死ぬ絶対死ぬ！」

「卯月流空牙一突！　出すまでに3分かかる！」

「だめじゃん！」

そんなことをしていたら鈴が容赦なく衝撃砲を撃ってきた。  
しよばい走馬灯をみた。

吹き荒れる赤点のテスト用紙　　9年連続全国模試1  
位の表彰状　　学校のテストで手を抜いてるのがバレて校長室に  
よびだし　　妹と幼なじみからの暴力

「いい思い出が少ない！」

我に帰るとラウラと一夏が朝っぱらからクラスみんなの目の前でキスをしていた。

その写真をちゃっかりとったりしたりして

「貴様は私の嫁にする！異論は認めん！」

「『ええええええええ！』」

クラスに悲鳴にも似た驚き声が響く。  
だいぶうるさい

ラウラがこっちを向いて近寄ってくるのをボーッと眺めてると嫌な予感がした。

「貴様は私の愛人にする」

「勘弁して貰えないでしょうか？」

「異論は認めん」

胸元を掴まれた瞬間、包丁が私とラウラの間突き刺さる。  
そして何かが私を抱き上げ、窓際まで逃げる。

「危ない危ない、お兄ちゃんの唇をこれ以上誰にも渡さないよ!」

「美咲!?　なんでここに?」

「茜ちゃんと一緒に転校してきたんだよ」

「そうなんぐう」

妹にキスされ言葉を最後まで言わせてもらえなかった。

「…ちゅ…ちゅぱ…」

「んん!　…ん…/」

美咲が唇を（というか舌を）離すと天音がいきなり座り込んだ。

「はぁ…はぁ…」

「ふふふ、お兄ちゃんはあることをするとすぐ体に力が入らなくなる体質治ってないんだね」

ものすごく悪い笑みを浮かべる美咲を見た天音は「ああ…これからどうなるんだろ…?」と思った。

## 12話「第2ラウンド」(後書き)

天「はあ…はあ…んん！」

一「まだ力入らないのか、美咲ほどどにしるよ？」

美「いつもより手加減したけど？」

とある一部「(いつもはこれ以上色っぽいの！？　ハアハアお持ち帰り……)」

### 13「平和」

チュンチュン

ああ……小鳥の囀りが聞こえる……あっおじいちゃん！ まってえ、その川はマジで渡るなあああ！

「おわあああ！？」

周りを見渡すと寮の部屋にいた。

特にこれといった変化はなく、いつも通りだった。  
ベッド以外は………

「（もぞもぞ）」

「……（シュルル）」

「……………」

いやまで、ここでシーツをめくったら責任問題に発展するかもしれないぞ。しかも山二つだ、下手したらめんどくさいことになるかねない。

「（ドキドキ）」

「（ワクワク）」

「…楯無さん起きてください、のほほんさんも」

「ドキドキ」

「ワクワク」

「心の中で思ってるコノヤロー！」

シーツをめくると、何も着ていない楯無さんとマイクロビキニを着てるのほほんさんがいた。可愛い&誘ってるので襲ってもいいのかな？ いいんだよね？ いっただ

「まで私！ はやまるな！」

「何の反応もないのー？」

「照れ屋さんだね、あっちゃん」

「服着てください！ 何の恥じらいもなく素肌晒さないでください。のほほんさんも海ならわかる……でもここは寮だから着替えてきなさい」

「「ぶーぶー」」

「はやく「お兄ちゃん……ん……」すいませんでした！」

この状況で聞きたくない人の声が聞こえたため、ドアに向かって土下座する。

命は許してくれるかもしれないし、私には見えない……美咲が卯月家の宝刀【白凰】を鞘から抜いてる姿なんて見えない。

「……お・に・い・ちゃ・ん？」

「……はい」

美咲が刀を振りかぶったのでGNソードVを展開した。

キイイイイン

「……………（ダラダラ）」

甲高い音と共に壁に突き刺さるGNソードVの刃……切り口をみるともののみごとにスッパリ切れてる。

流石の楯無さんも苦笑いで冷や汗かいてる。

のほほんさんは空いてるベッドに入りゴロゴロしていた。

「お兄ちゃんだめでしょ？ 美人お姉さんをそんなあられもない姿にして」

「ち、違う！ この人は自分で望んでこうしてるだけで私がどうかじゃないんだ！」

「そんなことよりお兄ちゃん。あのベッドでゴロゴロしてる可愛い子だね？」

美咲がチラチラのほほんさんの方を見て、表情を緩ませていた。そういえばこいつ小動物系好きだっけ？ 確かに茜も好きだからのほほんさんモテモテだね。

「布仏本音だよ。通称のほほんさん（一夏命名） 人なつつこい電気ネズミだよ」

「可愛い〜 触っても平気かな？」

「大丈夫だと思われる」

「ふにゅ〜」

頭をなでると目を細めて気持ち良さそうな声をだすのほほんさん。美咲は目をキラキラさせて見入っていた。

「お兄ちゃ「だめ」まだ何も言っていないよ！」

「どうせこの子ほしいとか言い出すんでしょ？ ペットなら未だし

も人間だよ？ むりむり」

「むう…こんなにかわいいのに……」

「そうね……こんなに可愛いのにね…天ちゃんはわかってくれないのね」

「えっ！？ 何？私が悪いの？ 捨てられた子犬を拾って私に元に戻してこいって言われたような顔しないで！ ていうか茜はいつきたの？」

「大変だねーあっちゃんふぁいとぉー！」

「他人事じゃないんだよのほほんさぁぁん！」

こうしてにぎやかな朝をむかえテンションは上がったみたいだった。

「うつつ」

「どうしたの？ お兄ちゃん」

「朝から疲れた……おなかへった……しぬ」

茜は4組なのはついさっき知ったから昼休み迎えに行くとして、問題は美咲だ。

あんの無能な教師め、なあにが「机を用意するのが面倒だ、卯月の膝の上でいいだろう」だ！ ニヤンコ先生を枕にして寝れないじゃんか！

「…………お兄ちゃんの膝の上だあ…………ふふふ」

こいつはご機嫌いいし、ねーむ…………あれ？…………こいつ暖かい…………おやすみ…………

「（えっ！？　なんでお兄ちゃんは私を抱きしめてるの！？　嬉しい…………これで邪魔者は寄り付かないし、のほほんさんの顔も見れる！　一石二鳥ね）」

「（むうゝ、みーちゃんを抱きしめながらあっちゃん寝てる…………いいなあゝ私はねこちゃんがいるけど、あっちゃんも…………）」

「（のほほんさん可愛いゝ／＼）」

ホームルームが終わっても天音は起きる気配はなく、1限目と2限目は爆睡していた。

時々、教師にバレて起こされそうになるが美咲とのほほんさんの威嚇で阻止されるが、大体の人は寝顔を見ただけで上を向き涙を流しながら一言　　　　　地球は青かった…………

いつてること全然関係ないけど、感動してるのはわかった。

「起きろ、馬鹿者」

ぎちぎちぎちぎちぎちぎち

「痛い！　すごく痛い！　アイアンクロー強い！死んじゃう死んじ

やう」

「私の授業はそんなに暇か？」

「はい」

めきめきめきめきめきめきめきめき

「んぎゃあああああ！　一夏！　一夏この人止めて！死ぬほんとに冗談抜きでしぬぐあああああ！」

~~~~しばらくお待ちください~~~~

「真面目に受けるように」

「……はひい、ほりふらへんへい」

アイアンクローで顔が砕けるかと思ったんだけど、あの人は人間じゃないよ！　途中からニヤンコ先生に協力してもらって絶対防御発動してたのに頭蓋骨割れるかと思ったからね？　ラオウやケンシロウとかだったらまだわかるけどさ

「お兄ちゃん癒してあげようか？」

「あっちゃん癒してあげるよ」

「私が大人の癒しをあげる」

「美咲の癒しは危険だから却下、のほほんさんは見てるだけで癒されるからそのままできてね、楯無さんは自分のクラスに帰ってくだ  
さい」

「えーお兄ちゃんのバカ」

「えへへ、そのママがいいのか」

「扱いがひどいわね、天音ちゃん」

もうなんだか慣れてきた。

楯無さんは音も気配もなくどこにいても近づいてくる人ってことで  
納得してるからね。

「なあ、天音？ その人は？」

「ああ、ここの生徒会長の更識楯無さんだよ」

「よろしくね、一夏くん」

「はい、よろしく願いします楯無先輩」

箒とセシリアが若干一夏を睨んでいたけど、無事一夏と楯無さんのファーストコンタクトが完了した。いや、それもここにきた理由の一つだろう。

「卯月、今日はもういいからそいつをどうにかしろ」

「そいつはありがたいですね　この人相手じゃなかったら」

「なあーに！？その反応？腕の傷開かせてほしいの？」

「今日は一緒に寝ましょうか！」

「よろしい」

プライドなんて作ってすぐ捨てるのが1番！  
ルール？約束？禁忌？　それ全部破るものだろ？

「じゃ、部屋にいきましようか……授業の邪魔したくないんで」

「そうだな、私もいこう」

「ラウラはダメだよ。嫁さんがどこかの馬の骨にとられるよ？」

「大丈夫だ、一夏はそこまでザコではない」

「体術てんでだめだぞ？あいつ」

「うっ！」

「他の人に捕まって脱がされて、純情奪われて写真とられて脅されてその人のものになったらどうするの？ ラウラは一夏の敵になるかも……」

「……………（ウルウル）」

「だからね、ラウラ」

泣きそうなラウラをそつと抱きしめて、頭を撫でる。  
すごく可愛いので撫でてしまいました。

「ラウラは一夏のそばで守ってあげなくちゃいけないんだよ？ 箒、セシリア、シャル、シャルのお姉さん、鈴が一夏の訓練に付き合ってるのもそのためなんだよ？」

「！？ なるほど、よし！私はここに残るとしよう、そして放課後は一夏を鍛え上げ教官ほどではないにしろ強くしてみせる！」

「よしよし、がんばってね」

そついい教室から出る。  
楯無さんがすごく複雑そうな顔をしていた。例えば得意分野と誇っ

ていたのに、自分より出来る人を見つけて尊敬と嫉妬が入り混じった顔？

「人身掌握うまいわね」

「楯無さんは誰にも渡したくないですからね（色々おもしろいから）」

「そ、そう？（どうしょ！すごく嬉しい！襲ってもいいのかな？）」

楯無さんはご機嫌のまま歩き出す。なんだか後ろからあひるの気配が……………きのせいかな？

「（キーツ！ 楯無め！ うっちゃんを独り占めとはいいい度胸ね……………まさかうつちゃんを自分好みに調教するつもりじゃ……………させない！させないわよ！）」

天音たちの後ろの曲がり角で爪を噛みながら余計なことを考えるまひるがいた。

## 14話「前日」

「ねえ、あんたその水着片付けといて」

「……………（いらいら）」

なんだこの女、偉そうに女尊男卑？ふざけるなIS使えるのが女性だから優遇？そんなだから反抗組織がきんだよ！  
ここまでの流れ

一夏に買い物を誘われる

シャルのお姉さんがいて「お姉さんじゃないよ！シャルだよ！？」  
つつつつこまれる

水着売り場に参上

女性に絡まれてイライラ中  
いまここ

不愉快極まりない

「聞いてんの？」

「「自分でやれ」」

「おい！ 天音、シャル」

少し暴走気味だけど、頭は出来るだけ冷静にしておく。

「はあ？ 私になんて口きいてんの？ 男が女に尽くすのは当たり前でしょ？」

「ISが使えるからね。でもこいつもIS使えるんだよ、もちろん俺もさあ。篠ノ之束さんとも知り合いだよ？」

「それとも今ここでIS展開させてみせましょうか？ 僕らは構いませんよ？」

「うぐっ！」

GNソードVを展開すると女性は後ずさる。馬鹿にされて黙ってられるわけないだろ？

「どうする？」

「ふん、自分でやるわ。それにしてもあなた可愛いわね」

私とシャルを頭から足まで舐めるように見てから何枚か水着を持ってきた。

黄色のをシャルに青色を私に渡してきた。

「じゃ、さよなら」

「……………え？」

そのまま去る女性の背中を見ながら、この水着をどうしていいのかわからなかった。

シャルはともかく私は男だよ？

「二人ともその水着似合いそうだな」

「えっ……………そうかなあ？えへへへ」

「一夏ー全然うれしくないよ？シャル試着しにいきなよ」

「うん！ 行ってくるよ、一夏来て」

「ん？ おう」

二人の背中を見送って自販機に向かう。

ガラの悪いやつ（モヒカン、リーゼント、スキンヘッドの3人組）がいるのは気にしない。

絡まれるかもしれないけど、あひるほど変態じゃないからね。

「午後ティー……………100円？ やっすいなあ」

「ねえねえ、君可愛いね！俺達と遊ばない？」

「楽しませてあげるよ？」

「外に車あるからさ！どこいきたい？」

モヒカンさんとリーゼントくんにスキンくんが話し掛けてきた。  
いつものことだから平気だけどね。

「連れがいるんでいいです」

「そんなやつほっというて俺達と遊ぼうぜ」

「いえ、遠慮します」

「そんな連れないこと言わないでさあゝいいでしょ？」

しつこいな……男が男にナンパってなんだよ。IS学園だけ女扱い  
でいいんだよ！

「無理でんぐう」

断ろうとするとモヒカンにキスされ、ご丁寧に舌までいれられる。

「（舌！？　まずい、下手したら力が抜ける）」

なんとか離れようとしても舌を押し返そうとしても更に状況が悪化するだけだった。

舌を抜かれたときはすでに力が入らない状態になっていたのでクタアッと自販機に背中をあずけてその場に座り込んだ。

「唇ゲッター！」

「何してんだバアカ」

「おい、この子力入んないみたいだぞ？」

「ラッキー！ 車に運ぶぞ」

男達は私を抱き抱えると車に向かって走りはじめた。  
なんか息が荒かった。

「よし、扉あける！」

「はは！ 可愛い子が手に入ったな！」

「今日から可愛がつてやんなきゃな！」

私を中に座らせて扉を閉めようとしたとき、扉に赤いビームが当たり吹き飛ばされる。

男達の顔は青くなっていた。

「うつちゃんに……」

「手を出した糞野郎は……」

「ブツ潰す」

あひる＆楯無さん＆のほほんさんのトリオが何故ここにいるのかは知らない。

普通に考えれば水着買いに来たんだろうけど助かった。

「まさか天音ちゃんが心配だからつけてきたらこんなことになってるなんてね……」

「楯無の魔の手からうつちゃんを助けようと来たらこんなことになってるなんてね……」

「そこのバカトリオ、覚悟できてる？」

「に、にげるぞ！」

車を急発進させてその場から逃走を計るが、所詮車……ISには勝てない。

ガゴォン

……… 見えない見えない……… 車の天井を新聞紙をくるくる巻いて棒状にしたものが（卯月家では新聞ソードと呼ばれる）貫いて来たなんて……

「にげれると思っただけ？」

「逃がすわけないでしょ？」

「うつちゃんにキスするなんて万死にアタイアタイアアイイイイイイカカカ！！」

……… こわっ………

……しばらくお待ちください……

「もう天音ちゃんは一人在るの禁止！」

「えー、なんでですか」

「さらわれそうになったのに何いってるの!」

現在、寮で説教中……一夏にはさらわれそうになったから寮戻るって言つといたから平気なはず。楯無さんが怒りMAXだから何いっても無駄みたいだ。

「ねえ! 聞いて……の?」

「……………」

そつと抱きしめて頭を撫でる。こつすると落ち着くんだよね、鈴でしかやったことないけど

「……心配したんだから」

「ごめんなさい……今度は楯無さんのほほんさん誘います」

「ん、よろしい」

機嫌が直ったみたいなので離すと少し睨まれた。

睨まれる理由が思い付かないんだけど、一夏に聞けばわかるかな?

「生徒会の仕事は大丈夫なんですか?」

「……………」

「……………虚さん怒ってたり……………」

「……………」

「いつてらっしゃい」

そついうと楯無さんは猛ダッシュで走り去っていった。  
まさか仕事放り出してつけてきたとは思ってなかったな。

「私も一夏の部屋独占するかな」

部屋を出ると楯無さんと同じ髪の毛の色をした女の子を見つけた。  
楯無さんとは真逆な感じがするなあ

「……？、なに？」

「ああごめんなさい。つい見とれちゃって」

「……………ううん……………大丈夫……………」

「（やっぱり楯無さんとは真逆だ）私は卯月天音、よろしくね」

「……えっと……………更識簪……………よろしく……………」

へー更識簪っていうのかぁ……………ん？……………

【更識】？ 姉妹？ぱぁーどうん？

通りで似てるわけだ、性格正反对だけど

「簪かぁ……………いいなぁ……………」

「……………え？…どう、して？」

「私は男なのに天音って女の子っぽい名前じゃん。それに比べて簪って性別にあってていいなって」

「……………男？……………」

「うん、こうみえても男だよ？」

「……………そう、なんだ……………」

可愛いなぁ、オドオドしてて弄りたくなる。

S Mプレイとかしたらどんなんだろう？……………あひるにこの子を接触させちゃだめだな

「……………？」

「（じー）」

「……………な、なに？」

「あつごめん、見とれちゃった」

「……………／／／」

あれ？ 顔赤いよ？ 熱でもあるのかなー？のほほんさん呼ぶべきか否か………… 仕事増えるからやめとくか！

「じゃあまた会おうね簪！ 臨海なんとかで会うと思っけど」

「………… 臨海学校だよ………… ま、またね…………」

簪と別れて一夏の部屋をピッキングして入って、一夏が帰ってくるまでゴロゴロしていた。

さあ明日は臨海学校だ！

14話「前日」(後書き)

「あれー？かんちゃんどうしてそんなに嬉しそうなの？」

「……本音……あのね……いい人にあつたの」

「だれだれ？ボーイフレンド？」

「ち、違う！……天音って子……」

「（あっちゃん……かんちゃんと接触したのか……たっちゃんどんな反応するんだろ）」

## はい予告

「臨海学校にきたーーーー！」

「はしゃぎすぎたようあっちゃん」

私達は臨海学校にきた。

「真夏のサマーデビルとよばれた私のサーブをつけよ！」

「魔王の私には雑魚同然」

「天音どんだけだよ！」

楽しい臨海学校……………

「来ちゃった」

「楯無さん……………」

波瀾万丈？

「織斑先生！ これ！」

「特務Aランク任務……」

押し寄せる波乱、関係に亀裂がはいる

「お偉いさんは高見の見物かい、やってられんな。やりたい奴だけやって何の報酬もなく辛い思いをしろ」

「天音えええ！」

ドガッ

「ひどいよ！ 他の人にも被害が及ぶかもしれないんだよ！？」

天の神が暴れん坊の福音、摩天楼に天の音を聞かせにいく

「絶対帰ってきてね、天音ちゃん」

「一夏と箒がくる前に仕留める」

「お前達は何自惚れてんの？ お前達は救世主でも英雄でもない、ただの生徒だ。こういうのは大人の役目だ、その役目を果たさないのなら痛い目をみるのがいい」

「あんたがそんなやつだったなんて知らなかった」

「天音、貴様が死ねばいいんじゃないか？」

戦況の悪化、実力不足と甘い考えが招く失態……そして犠牲

「ぐあああああ！」

「一夏ああ！」

「くそ！ こつちだ！ 福音！ 摩天楼！」

無数のビームとエネルギー弾と謎のISが空を埋める。

「こんなところで！せめて一夏達が救出されるまでは！」

『天音！撤退しろ！』

「はは！ラウラ隊長殿ここで死なせてもらいます！」

劣勢、なすすべないまま追い込まれ右腕と左足を吹き飛ばされ首を絞められる。

「……………ここまでか、…あとは……………」

ゴキーン！

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！いやあああああ！」

力なく天音の腕がISの手からずり落ちる、そんな彼を貫く赤いビーム。

天の神が落ちる

絶望と悲しみがその場を支配する。

「美咲……茜……」

「あなた達はゆるさない」

「殺してやる。お兄ちゃんが味わった苦しみを倍にして殺す！」

知らせを聞いた人々はIS委員会や各国に反感を持つようになる。

「たつちゃん……あつちゃん……あつちゃんが委員会にいい渡された任務で……死んじゃった……」

「……えっ？　嘘……」

動き出すIS学園最強

「天音ちゃんの敵をうつ！」

暴走する天音ファンクラブ会長

「あいつらああああ！」

全ての人の気持ちが一つになる

IS委員会をぶつつぶせ！

「てなることはないよ！」

「なら宣伝するなよ！みんな途中まで『ああこつなっちゃうんだあ』みたいな感じだったぞ！」

「この小説にシリアスは似合わないからね……たぶん」

「確かに一度シリアスにしてみても夢扱いしたな」

「ふふふふ、うっちゃんは笑顔が似合ってるのよ」

「変態！」

「失礼ね、一夏くんにうっちゃん。まひるよ？」

「変態で十分です」

「私が今日好きにしていっていったら何する？」

「服脱がして手足を拘束してから蠟燭の蝋を垂らして、そのあと鞭で打って……」

プルルルル……

『もしもし警察ですか？』

## 15話「臨海学校Part1」

こんにちはみなさん、ついに……ついに……

「キタアー――！」

「どこにだよ」

「一夏はテンション低いなあ、鈴の背くらい低い」

「失礼ね！成長期きてないのよ！」

「来てそれだつたら末期だよね」

鈴は『絶対！絶対ナイスヴァディになってやるんだから！』といつてどこかへ走っていった。  
一夏も着替えにいつてしまつて一人ぼっちになってしまった。

「……………水着ないの私だけ？」

「……………水着、ない…の？」

「ん？ 簪か。実はね水着買いにいったのはいいんだけど、イロイロあつて買えなかったんだ」

「……そう……なんだ……」

気が弱そうだけど意志は強いみたいなんだよね簪って。  
のほほんさんとは違う癒しをありがとう！

「まっいつか、私は少し遊んでから旅館戻ってISの整備するけど、  
簪はどうする？」

「……わ、私は……遊んでるところ……見てる」

ほうほう、一緒に遊ばないのかな？楽しいのに。  
といってもまだ二人しかいないんだけどね。

「卯月ちゃん、ビーチバレーやる！」

「いいよ」

「ではいきます！」

気がつくコートが出来ていた！ これほどの能力があるのに専用  
ISがないだと！  
バレー協会はなにしている！

「ふふふ、真夏のサマーデビルと呼ばれた私のサーブをうけてみよ

「！」

プロの野球選手が投げたボール並のスピードで迫ってくるボールを勢いを殺して軽く簪の頭上に打ち上げる。  
すると簪はオドオドしながらトスをあげてくれた。

「くられ！ 卯月家秘技！カーブスパイク！」

「ふふふ、カーブしてないではない……なに！？」

真つすぐ進んでいたボールは直角に曲がり地面に減り込む。  
ビーチボールでどうやったら減り込むのか教えてほしい。

「……天音が……やったんでしょ……」

「そうでした！」

「くうー負けないんだから！」

ワイワイと5セットくらいやってから、一夏&シャルと交代して旅館に戻った。

とまあここまではよかった。すごくね、夢のようによかった。

「……………」

「……………」

106号室 更識姉妹・卯月

「おかしいなあ…なんで姉妹なんだろう？」

「……………お…姉ちゃん……………」

こうしてても拉致が開かないので襖をあけて、部屋に入ると堂々と布団を敷いてニヤンコ先生を抱いてゴロゴロしてるのほほんさんがいた。

「のほほんさんは確かさつきまで浜にいなかった？」

「んー？ 追っかけてきた〜ていうかかんちゃんと仲良しさんだったんだね〜」

「うん、昨日知り合った」

「つい最近だな」

「……………！！？」

簪が驚いた顔して私の後ろに隠れたのは何故？

ニャンコ先生がしゃべっただけなのに……ああなるほどね、そういうことか。

「簪大丈夫だよ、その猫は私のISの待機状態だから」

「猫ではない!」

「……この、猫が…?」

「人の話をきけ!」

うつさい猫だ。簪が怯えるじゃないか、少し黙ってほしい。  
のほほんさんに頼んで黙らせようか?

「すまなかったと思っている」

以心伝心で何より、ニャンコ先生は無駄なところでハイスpekだね。  
ていうか作った人誰なんだろ? 織斑先生に聞いても知る必要はないって言われちゃったし。

「まあいいや、整備するからISになつてよ」

「仕方ない、しっかりこのプリチーな私を整備するんだぞ!」

「はいはい」

プラグを差し込み空中に表示されたディスプレイを見る。

『酒のみたい』

ガン

「何が酒のみたいだ！ISの状況を知りたいんだよ！お前の願望がしりたいんじゃない！」

『何を！？ 高貴なこの私に何たる無礼な！ええい！白黒つけてやる！』

「上等だ！ かかってこい」

『いくぞ！』

「トラップ発動！のほほんさん！」

『なに！？』

「これはニャンコ先生が攻撃宣言したときに発動できる！ ニャンコ先生の攻撃を無効にし、のほほんさんはニャンコ先生を力いっぱい抱きしめることができる！」

『んな！』

ISを待機状態に戻してのほほんさんに投げ渡す。  
のほほんさんはキャッチするとギューーーーっと抱きしめた。

「……可愛い…そう」

「生きるか死ぬか…弱肉強食の世界では当たり前なんだよ……」

「……ここは、違うよ……？」

「ごもつともです」

「まったく…天音ちゃんはダメね」

「簪のISみせてよ」

「……え…うん、いいけど………うしろ…」

現実逃避してただけだなあ………だって楯無さんは一個上だよ？  
ここにいないわけじゃないじゃん。  
でもなぜか後ろから声がしたんだよね。  
簪は嬉しそうに楯無さんのところに駆け寄る。 なかいいのはいいことだ

「……楯無さん」

「なあに？」

「なんでここに？」

「来ちゃった」

「……楯無さん…布団は2つしかないですよ？」

「あら以外ね、追い返されと思ったのに」

「簪が嬉しそうにしてるから追い返そうにも追い返せないですよ」

「嬉しいわね。まあ布団は2つくっつけて真ん中に天音ちゃんが、サイドに私と簪ちゃんが入るってことで」

「わかりましたよ」

「今晚は理性と戦わなきゃいけないのか……ていうか眠かったら寝るから戦ったことないんだけどね。」

「一夏や弾に知られたらなんて言われるんだろ？」

「ぐいっ」

「おう？」

「楯無さんに引っぱられ布団にねかされる。」

「いけない顔をしている……どれくらいかっていうとね、あひるくらいかな！ やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい！」

「ふふふ、逃げようとしても無駄。ここがいいんでしょう?」

そついいながら楯無さんは私の胸のある部分をつまむ。

「んあ!」

「いい反応ね まひるのノートにかかれた棒人間の体に丸がついてたから、もしやと思ったたら当たりね」

「あのやろつ! なんてきけんなものああん!」

「ふふふ、今日は楽しめそうね」

「……わ、私も……」

「簪ちゃんはおへそね」

そう言われると簪はヘソに指をサワサワしてきた。  
くすぐったい

「なめてみて」

「何いってんの!? 簪嫌だよ! やんなくていい」「ペロッ」「ひ  
ゃん!」

「……面白い……」

「でしょ?」

「私もやるゝわき任せといて!」

「やめてええええ!」

~~~~しばらくお待ち下さい~~~~

「ハアハア」

「次は首筋と腿裏と耳よ」

「んああああ!」

~~~~もうしばらくお待ち下さい~~~~

「ちょっとやり過ぎたわね」

「あはは、いいもの見せて貰ったよあつちゃん！」

「……大……丈夫？」

布団の上で力が抜けきった私を心配そうにひざ枕する簪が少し嬉しかった。

簪さん…貴女も原因の一つなんだよ？

「ふん、自業自得だ！天音」

「くしょれこめ、おひょいれろひよ」

「何いつてるのかわかないわ」

「完全に呂律まわってないね、やりすぎだった」

あはははと笑う二人を見て、いつも通りだなあって少し安心していた。

幸せだ……だって簪みたいな可愛い子の顔をまじかで見れるんだからね。

これを幸せと言わずに何を幸せというんだ？だれか教えてほしい。

「……ん？…どう、したの……」

「何でもないよ、ただこういうのもいいなって」

「…………呂律…戻った、んだ…」

「簪のひざ枕のおかげでね　ありがとう」

「…どういたしまして」

照れる簪もいいもんだなあ、写真撮りたいくらいだわあ。  
楯無さんと簪が寄り添いながら寝てる写真も撮りたいね。  
きっとそっくりさんになるんだろっなあ…

そのまま意識を手放し、眠りについた。

「（寝ちゃった…………もうすぐ…………お夕飯なのに…………起こさないと…………）」

ユサユサ

「う…にゅ！」

「……………（ダメ…………感情にながされちゃ…………冷静に、ならないと…………）  
起きて…………飯」

「ん……」飯？ なにそれ食べられるの？」

「……うん……そうだよ……」

「じゃあいっ」

天音は目を閉じたまま歩きだす。

フラフラとしてるけど人や物はちゃんとかわしていた、目を閉じたままなのに。

「うー、開眼！」

「……普通に……しなよ」

天音のボケにツッコミいれながら食べさせる。

人や物は音や空気の流れでかわせるけど、食事は目を閉じたままではできないらしい。

しかも目を開けてもぼやけて何が何だかって感じだっささっきいつた。

「……はい、あー……ん／＼／」

「あーん」

これはかなり恥ずかしい……本人は大丈夫だって言ってたけど、私自身がだ。  
どうしょ……

「やっと視力戻った。簪ありがとう助かった」

「……ううん…平…気」

私復活！

いやあすまんすまん。一度寝ると大変でね、中途半端に起こされるといつもこうなるんだよね。

参った参った簪でよかったよ、楯無さんだったらどうなることやら

「むう！」

ゲシ

「ぐああがのあああ！楯無さん！傷蹴ることないじゃないですか！？」

「失礼なこと考えた天音ちゃんが悪いのよ」

楯無さんにそっぽ向かれた。

簪にもそっぽ向いてほしいな、比較してみたい。

簪は気弱な守ってあげたいって感じな子で楯無さんは元気で明るい子だからいい絵になるよ。

「ふあわあ、まだ眠い……死んでしまう」

「大丈夫、それくらいじゃ死なないから」

「ひどいですねえ」

モタモタ続きを食べはじめる。

眠すぎる……またひざ枕してくれないかな？

「……ちゃんと……食べたらね……？」

以心伝心で何より、最近人の心読む人増えてるよね。  
一夏も心読まれるって言うてたし。

夕飯を平らげ、部屋に戻ると張り紙があった。

『卯月と更識姉妹は一夏の部屋にこい』

間違いなく織斑先生だ。

何がしたいんだろう……仕方ないから行ってから寝よう。

バスの中でのほほんさんとはしゃぎ過ぎたか、ポツキーマゲームは精神的に疲れるぞ。

「おつ邪魔しまーす」

「来たか…というより何の迷いもなく襖を開けるのはお前くらいだろっ」

「ははは…確かに天音は図太い神経してるからな」

一夏に苦笑いされるのはちょっと如何なもんか。  
すこし傷ついたぞ。

「じゃちよつとねますよ」

「えっ！ 寝るの！？ ここで！？」

「眠いんだよねえ…」

そっついながら簪のひざに頭を乗つけて目を閉じる。

あーいいにおい……弾の妹さんもいいにおいだっとなあ…弾に殺されかけた記憶が蘇る…

「蘭だよ、いい加減覚えてやれ。それと弾は確かに天音を殺しかかったけど、蘭に一撃ノックアウトくらって逆に死にそうになったんだぞ？」

「……そう…だったね…蘭ちゃんか……らんらん……」

「電源キレかかってるな……」

もういいや、おやすみなさい。

「ホントに寝やがった」

「ええ、根性あるわね」

「まあいい、襖の前にいるやつ入って来い」

織斑先生がそういうと襖が開き、そろそろとシャル、セシリア、鈴、ラウラ、箒が入ってきた。

セシリアが簪に気づき不思議そうな顔していた。

「あら？ そちらの方はどなたですの？」

「私の妹の簪ちゃんよ」

「…えっと……か、簪……です……」

「性格が正反対ね……」

簪はマジマジと見られて恥ずかしくなり、下を向いて天音を見つめた。

天音は身長は一夏より頭一つ低いくらいなのだが、今は鈴やラウラより低いんじゃないかと思うくらいだ。

「……麺類食べたい………ミルクティー………」

「（………麺類とミルクティーが……好きなんだ……）」

「……甘いもの……茜……美咲………」

ちやくちやくと天音の好きなものを知っていく簪に対して一夏は苦笑いだっただ。

「なに苦笑いしてんのよ」

「そうですね！ 天音さんと簪さんを見てニヤニヤと………紳士のすることではありませんことよ？」

「ああゆづのがいいの？一夏は」

「違うよ、また天音の癖が出てるなって」

鈴と一夏、茜と美咲以外の頭に？マークが浮かぶ。  
寝食共にしてる楯無も？マークを浮かべているのをみて、少し一夏は驚いていた。

「あれね」

「あれか」

「寝言ね」

「?」

「天音は安心して自分の好きな場所で気持ちよさそうに寝てる時に、寝言で自分の気に入ってる物や人を言うんだ」

「は、初めてしたわ……」

「更識、お前が知らないのはおかしいだろ」

「天音ちゃん私の隣やなのかな？」

天音に視線が集まる。

寝てるから気づかないのだから自分らの名前がでるか出ないか気になるらしい。

「……簪…楯無さん…一夏…鈴……」

「「やったー！」」

楯無と鈴がほぼ同時に飛び上がる。

よっぱど嬉しかったのか目尻に涙がたまっている。簪は顔を赤くしていて天音の頭を撫でている。

「はしゃぎ過ぎだよ、起きちゃうよ？」

「大丈夫よ！ 天音は眠りが深いから！ それにこの長い間名前を呼ばれなかったのにやっと呼んでもらえた！ やったー！」

「ずっとホントは嫌いなんじゃないかって心配だったのよ！ 天音ちゃん大好き！」

楯無のカミングアウトはスルーしておくとして、ラウラが不安そうに一夏の袖を掴んでくる。

「……ラウラ…シャル……シャルのお姉さん…のほほんさん……」

「さすが私の愛人だ！」

「えっ！？ 僕は今だに姉妹だと思われてるの！？」

「大丈夫だぞ。『冗談まじりにいうやつだから』」

ふう……と織斑先生がため息をはいて、一夏に飲み物買ってくるように言い付けた。

一夏が出ていくと織斑先生は箒、セシリア、鈴、ラウラ、シャルの方を向いた。

「でだ、お前達はあいつのどこがいいんだ？」

「わ、私は同門の不出来を歎いてるだけで……」

「クラス代表としてしっかりしてほしいだけですわ！」

「弱くなってるのがムカつくだけ……です」

箒とセシリアと鈴の答えに織斑先生は口の端をつりあげた。

「そうか、伝えておこう」

「」「やめてください！」「」

「で、そっちはどうなんだ？」

「僕は優しいところです」

「あいつは誰にでも優しいぞ？」

「そこが少し悔しいかなあ……あはは」

頬を赤く染めて照れるシャルを前の3人は羨ましそうに睨む。

「私は強いところです…」

「弱いぞ？」

「心が……その…真つすぐといえますか」

「まああいつは家事もできて料理も中々だ。あいつを貰う奴は幸せだな。どうだ、ほしいか！」

「くくく、くれるんですか！？」「」「」

「やるか、馬鹿者。女なら惚れた男を奪い取る気でいけ」

「うっ！」「」「」

今度は楯無と簪、茜、美咲の方を向いた。  
寝ている天音を愛でているので忙しそうだ。

「そこは卯月のどこがいいんだ？」

「天ちゃんは可愛いですよ！ このプニプニのほっぺ」

「お兄ちゃん優しいしね、文句言っけど結局キッチリやってくれるし」

「気遣いしてないフリして気遣いしてくれてるしね　部屋のお茶がキレないのは天音ちゃんのおかげなの」

「……何も…言わなくてもわかってくれる…拒否しないで受け入れてくれるとこ……好き……」

「そうなのか……やたら無茶するところもあるが基本いいやつなのか」

「そうですね？　あっちゃんは私達が危険なことになるのが嫌だから無茶するんですよ」

いきなり後ろからのほほんさんの声がしたので篤達は驚いていた。もちろん天音の周りの4人と織斑先生は驚いていない。

「…うー……」

「キスしても大丈夫よね？」

「多分大丈夫かな？」

「お兄ちゃんは平気だよ、なぜか起きないから」

「……いいの、かな？……」

楯無が顔を近づけていくと、天音の纏うホワホワした空気が無くなる。

「邪悪な気配！」

天音はでんぐり返しの要領でゴロゴロ転がって場所を移動して、恐る恐る振り向く。

「なんだ、楯無さんか」

「何よー、そんなに嫌がなくてもいいじゃない！　ぶーぶー」

「いえ、あひるかと思ったんです。楯無さんだとわかってたら避けずにツッコみます」

「突っ込むなんて……そんな天音ちゃん大胆」

おかしいな……ツッコミなんだけど……どこが大胆なんだろう？  
一夏に教えてもらっにしてもいないし、あいつ夜逃げか？

辺りをキョロキョロ見回していると、簪と茜と美咲に睨まれてるのに気づいた。

「？　どうしたの？」

「天ちゃん、今突っ込むって」

「自分からなんて……お兄ちゃんのバカ」

「……お姉ちゃんばかり……ずるい!……」

何をいつてるんだろうか……この子達は。

ホントに教えてほしいんだけど、一夏はどこぶらついてんだ? はやく帰って来いや!

まあ仕方ない

「ボケにツツコミ入れないと悲しいことになるでしょ?。」

「……………」

「元気だして先輩」

「いいことあるよ先輩」

「……お姉ちゃん……私は……好きだよ……」

「ありがとう……みんな」

なんで楯無さん慰められてるんだろ?  
よくわからんなあ……乙女心は

15話「臨海学校Part1」(後書き)

楯「天音ちゃんのバカ」

天「? どうしたんですか?」

楯「何でもないわ……」

天「??」

ま「ふふふ……楯無のやつ……ドジやっ  
たみたいね……ふふふ……ふふ  
ふふふ」

## 16話「臨海学校Part2」

「空をござんあれ！」

ヒュウウウウー

「ん？」

ズドオオオオンー！！

「「「「「天音ええええ！」「「「「「

「あつぶね」

私は上から降ってきたISを見た瞬間にISを展開して瞬時加速で回避した。  
イグニッションブースト

我ながらすごい反応速度だ。

今までの振り返りー

- 1 朝楯無さんにたたき起こされる
- 2 楯無さんに朝ごはん食べさせてもらう
- 3 簪のひざに頭をのつけてゴロゴロする
- 4 織斑先生にたたき起こされ、ここにつれてこられる

でいまにいたる

「もう少しで死ぬところだった……」

ISを解除して下に下りると、束さんとやらが満面の笑みで近寄ってきた……あと10メートルくらいのところで鼻血を出して倒れた。

「うう…本物は凄い威力だね。箒ちゃん程ではないにしろ可愛い」

「織斑先生……この人からあひると同じ臭いがします」

「さて、篠ノ之はファーストシフトさせろ」

無視されちった、ニャンコ先生は落ち着いてるけどまさか束さんとやらが作り主だったり？

「そうだぞ？ わからなかったのか、ダメダメだな！」

「うつさいぞ糞猫」

「なに！ この私に何たる無礼！ゆるさんぞ！」

「酒を海に流してやる！」

「それだけはやめてー！」

そんなこんなしていると、第のISのファーストシフトが終わったみたいで試しに乗り回している。

しかしすごいな、刀からエネルギー出てるよ。

ライザーソードと同じ要領なのかな？ でもあれはソードだしな…  
…まあいいか

「織斑先生ー！」

「特務Aランク任務…： 実習は中止だ。生徒は全員旅館に戻るよう  
に、それと専用機持ちは来い」

めんどくさそうだなあ、任務だつてさ…： 大人のお仕事を子供に、  
しかも学生に押し付けるのつて第2次世界大戦のときの大日本帝国  
と同じだよ？

IS委員会も落ちたもんだな。

「アメリカ、イスラエル共同開発されていた軍用ISシルバリオゴ  
スperl…： 通称福音と摩天楼が暴走し、監視空域を離脱したと報告が  
あった。我々はこれを止める」

「IS2機の詳細データを要求しますわ！」

「わかった。だが誰にもいうなよ、言った場合査問会への出席と裁  
判、最低でも2年の監視がつく」

「了解しましたわ」

みんなやる気満々か……くだらない……実にくだらない……。

大人が自分の尻を自分で拭けずに子供に拭かせようってのが気に食わない。

何様のつもりだ？ 糞が

「（福音……広域殲滅型か…摩天楼の武器が表示されてないのはなぜ？）」

「（……天音…摩天楼は、なんだか変……）」

「（やっぱりね、簪が言うならホントだろう。楯無さんは？）」

「（……虚さんに……連れ戻された……）」

こういうときにあの人の意見がほしい……。

摩天楼は私が行くとして、福音は誰に行かせる？

「摩天楼は武器を外してあるからいいとして、福音は危険だ」

「ちーちゃん！ 紅椿ならいけるよ！」

「じゃあ箒に連れてってもらって一夏の零落白夜で落とすってことで」

「「わかった」」

鈴の提案を文句言わずに返事したのを見てから、静かに立ち上がる。

「どこに行くんだ？ 卯月」

「やってらんないので部屋で寝ようかと」

「はあ？ あんた何考えてんの！？ 今ここで止めないと他の人が酷い目にあうのよ！」

「わかってるよ鈴、だからなに？ 軍用ISを私達で？ 何の報酬もなく？ ただ辛い思いして命かけて戦って何の意味があるのさ」

「専用機持ちつていうのはそんな理屈通用しないんだよ！ 天音がそんな人だったなんて知らなかったよ！」

「シャル…それはお前達代表候補生の話だ。私は一般生徒」

「貴様本気でいつてるのか？」

「しつこいなあ、摩天楼落としてやるから黙れ」

私がそういうと簪がピクツと反応した。

簪にはバレちゃっても仕方ないと思うね、もともと騙せるとは思ってないし。

「あつそ、じゃ行つてくれれば」

「はいはい、行つてきますとも」

「卯月、作戦開始は30分後だ」

小さく頷いてから部屋を後にした。

『織斑、篠ノ之準備はいいか？』

「ああいける」

「大丈夫です」

『卯月、そっちは大丈夫か？』

「ええ」

『それでは作戦開始！』

合図が出た瞬間に一気に加速して摩天楼がいるポイントに向かった。今回はニャンコ先生が寝てる時に起動したからサポートがない。

「（結構スピードでるなあ）」

紅椿の倍の速度で飛行してしばらくすると、摩天楼が見えた。黒くて悪魔がお似合いの格好だった。

「目標視認、これから攻撃を開始する。なおこれから独断で戦闘を行う」

一方的に用件を伝えて通信をきる。  
GNソードVを展開し、接近戦をしかける。

「はあ！」

ガキイーン！

「やっぱりね！」

摩天楼は刀身が黒い刀を展開して受け止めた。おかしいとは思っていただけ、大人は汚いねえ。

さつきから通信が入ってきてるけど、繋げても言われることなんてたかがしれてる。

一度距離をとってから構え直すと、今度はライフルを展開して撃ってきた。

「ちっ！」

紙一重でかわす

「これは思ったよりきついなあ、もう一本は修理中だし……まいたね」

これじゃあ一夏達が心配だ。

だけどこいつを早く沈めないといけない、こいつは危険だ。とくに刀が

「いけるかな？」

刃をぶつけ合い、火花をちらした。

「くそ！ こいつ！」

「一夏！」

「はぁ！」

福音に切り掛かるがヒラリと避けられてしまう。一夏と箒は摩天楼が詳細データ不明の武器を使っていることを聞いたときから焦っていた。

天音はいろいろ前科があるから心配なのだ。

「はやく落ちろ！」

「これで！」

いくら攻撃しても当たらず、空を切る。

箒が追い掛けて動きを止めようとしてもなかなかうまくいかない。通信をしようとしても繋がらないのがとても不安な気持ちを拡大させる。

そこで一夏は昔天音がいつていたことを思い出した。

『冷静さを欠けた奴ほど倒すのが楽なものはない』

「（そうだ、今は福音を倒すことに集中しないと）」

一夏の雰囲気が変わったのを筭も感じとり、福音に集中し始める。  
わざと反感を買うような言い方をして危険なISに挑んだ天音を信じて…………。

ピンクと赤いビームが飛び交う。

天音はすでに高機動モードに移行して畳み掛けているが、摩天楼は見た目では有り得ない機動で互角に戦っていた。

「なんだこいつ？ やる気ありすぎて困るよ？」

ガキイーン

「返事かえってこないってのもなあ。無人機だから仕方ないか」

そういいながらライフルモードに切り替えて摩天楼を追撃する。  
もちろん当たらない。

チートなんじゃないかと思うくらい強い……私が来てよかった。

「（一夏達にこいつをやらせてもよかった……でもデータが怪しい  
ISより、まだ信用性が高い福音に行かせた方が安全だろうと思っ  
ただけどきつついなあ）」

少し後悔しながらチョコチョコ逃げ回る。

刀やライフルだけならしも、ビームバズーカまで持ち出して大変な  
んだよ？

「……にひひ」

だから私はビットを6機最大出力にして光学迷彩でかくしてるんだ  
よね。

もう6機はソードにくつつけてるからいつでもライザーソードを出  
せる。

「さあかかってきなよ、摩天楼」

刃を交えながら隙を伺い、お互いに牽制しあう。

一夏達もいい勝負してるみたいだった……リーダー上は……

「くそ！ ヒラヒラ交わしやがって！」

「私が動きを止める、その隙に畳み掛けろ！」

箒はそういつと福音に突撃していった。一夏もそれに続きいつでも攻撃できる範囲に移動する。

福音は相変わらずヒラヒラ交わし、シルバーベルを広域に発射している。

「これじゃあ箒が持たない！」

「私の心配より自分の心配しろ！」

箒の言う通り、一夏のシールドエネルギーはイエローに入っていた。前の一夏ならとつくとくにレッドに入っていただろうが、昨晚天音と簪に調整されたので何とか持ちこたえてる。

「一夏！ 今だ！」

箒からの合図が出たので瞬時加速をしようとしたとき、船を見つけた。

一夏はすぐさま瞬時加速で船に向かう光弾の前に立ち、掻き消した。

「何をやっている！」

「船だ！ 船がいるんだ、海上は千冬姉たちが封鎖してるはずなのに……」

「密漁船か！ 天音のここにいかなきやいけないんだ！ 犯罪者は放っておけ！」

「箒！ 天音も大切だけど……っ！」

一夏は箒の後ろでエネルギーを溜めている福音に気づいた。

一夏も箒もエネルギーが残り少ない……あんなものくらっただじゃすまない。

「箒！ 間に合えええ！」

「！？」

一夏は箒を抱え込むようにして福音に背中を向けた。

「はぁ……はぁ……」

やっとだ……やっと捕まえた。

摩天楼はビットから出たワイヤーで身動きできなくなっていた。

天音は摩天楼にGNバスターソードを突き付けた。

「トランザム」

そついうと天神が赤く光だし、引き金を引くとGNバスターソードから図太いビームが出て摩天楼を飲み込む。

天神も飲み込むんじゃないかと思うくらい図太いビームだった。

「……ふう……コアまでやつちやったかな？」

レーダーを確認するとISの反応がない。  
ホントにコアを壊しちゃったのかと思いながら通信を繋げる。

「摩天楼撃破、一夏達は？」

『卯月くん！ 織斑くんと篠ノ之さんが福音に撃墜されました！』

「……はい？」

『今すぐ離脱してください！ そちらに福音ともう1機未確認のISが向かってます！』

「冗談じゃない！」

旅館に戻ろうとしたとき背中に衝撃が走った。

振り向くと、福音と摩天楼の白バージョンのISがいた。

離脱しようとする福音に追い掛けられて攻撃される、反撃しようと思えかけて離脱しようすると白い摩天楼に邪魔をされる。

「なんだ？ 白いやつ」

ISの情報が送られてくるのを見ると蜃気楼というISらしい。  
持っている武器は白煉という、エネルギーバリアを切り裂いて強制的に絶対防御を発動させるものらしい。

雪片にすごく似ているが違う点が一つある。

刀身にエネルギーを纏った状態は絶対防御すら貫くところだ、しかも

ワンオフアビリティじゃなく燃費もいいところが最悪である。

「勝てるかな？」

『天音！ 無茶しないで早く帰ってきなさい！』

『そうだよ、今は体勢を整えてからリベンジしたほうがいいよ』

プライベートチャンネルで鈴とシャルから通信が入る。  
二人のいうことはごもつともなんだけど

「今私がそつちにいったらそこが戦場になるよ？」

痺れを切らした福音の攻撃を避けながら、言葉を返す。

この攻撃は一人でメサイアを落とすにいったとき並の攻撃だろう。

「おわつと！」

屋気楼と福音の攻撃を何とかかわし続ける。

なんとかしないといけないのに変なことしか頭に浮かばない。

「ええい！ 一夏の風呂入浴写真あげるからひけ！」

ドヒュン

「わかった！ シャルと一夏のツーショット写真！」

ドヒュンドシユン

「くう！ 箒と一夏のツーショットとラウラと一夏のキスシーンの写真を！」

ドシユンドシユンドシユンドシユンドシユンドシユン

ダダダダダダダダダダダダダダダダダ！

くそわがままだな！ ここまで秘蔵写真を出してるのに攻撃してくるなんて、何が足りないんだろ？

ちなみに全部屋気楼です、最後のダダダダダダダダダダは福音です

「これ……ホントに死ぬんじゃない……」

『天音！ 今行くから持ちこたえろ！』

『待つててくださいね天音さん』

「くるなよ！ どれだけ命知らずなんだよ」

人のこと言えたもんじゃないけどね。

ニヤンコ先生にビット制御してもらって反撃してるって感じだし、私は回避に専念してるから他の奴が来たら危ないよ。



「なーーーー！ 死ぬ死ぬ！」

必死で攻撃を防ぐがちよくちよく当たる。

こんな集中砲火くらったのは私が初めてだろう。戦艦大和もここまです酷くなかったはずだ。

『天音、あんたはそこで死になさい』

『そうですわね。一度頭を冷やさすべきですわ』

『私のだったら思う存分みるがいい！』

ラウラのは気にしないとして、鈴とセシリアは酷いなあ。  
というか一夏は大丈夫なのか？

《天音！ 後ろから摩天楼がくるぞ！》

「はぁ？ おわっ」

黒い刀をすんでのところでかわして距離をとる。  
そして囲まれた。

「摩天楼……落としたはず……」

『卯月、摩天楼の詳細データがアメリカから届いた。そいつのワン

オファビリティーは再生だ、コアを破壊しなければ止まらない』

「織斑先生……淡々と話すのはいいんですけど、もう少し気が利いたこと言えないんですか？ この状況は厳しいですよ？」

まあ何て言えば気休めになるのかなんて私にもわからないから別にいいけど。

さつさと倒さなきゃ……3対1、軍用IS、囲まれてる……やばいやばい、摩天楼が持つてる黒煉つて白煉と同じだろ？

「……えー、皆さん。これが私の生き様です。とくと見よ！」

天神が高機動モードに移行して摩天楼に突っ込む時にリー……ンと音になる。

天神の翼から緑色の光が出る。

「はあああ！」

GNソードで切り掛かると蜃気楼が受け止め、摩天楼が後ろから攻撃してきたのをGNソードをもう一本展開し、黒煉を受け止めた。福音が光弾を放ってくるのをGNフィールドを展開し防ぐ。

急上昇して、ライフルモードに移行しビームを一斉発射する。だが簡単によけられ、摩天楼と蜃気楼が接近してきた。福音の砲撃をかわしつつ、牽制するが限界がきた。

エネルギー残量：0 警告これ以上の戦闘は不可

「こんなときに！？ ニヤンコ先生リミッター解除して！」

蜃気楼と摩天楼が瞬時加速をかけて、急接近してくるのを見て焦る。福音の攻撃も目の前に迫っていた。

《無理だ！ 間に合わない！》

「ええい！」

PICを停止させてそのまま海に落ちていく。攻撃を直撃するよりはマシだと考えたのだが、蜃気楼と摩天楼：福音はそんな生易しくなかった。

摩天楼と蜃気楼が放ったビームが右の横腹と左の肺を貫き、海に落ちた同時に福音の光弾がその部分を埋めた。

16話「臨海学校Part2」(後書き)

リーーーーン

## 17話「臨海学校Part3」

リーーーーン…リ…リ…

天神からなる音は福音と摩天楼、蜃気楼の攻撃によって掻き消され、やがて聞こえなくなってきた。

それが何を意味するのかはそこにいる全員がわかっていた。

3機の攻撃は凄まじく、今だに続いている。

ビームにビームバズーカ、シルバーベルが天音が落ちていった海に撃たれ続ける。

「……はっ！卯月くん！？卯月くん！聞こえますか！？」

山田先生が呼び掛けるが応答がない、その上レーダーからも反応が消えた。

辺りに生態反応もない。

「……う…そ………天音が…？」

「………くそ！」

鈴がその場に座り込んでラウラは歯を食いしばっていた。  
そこにセシリアとシャルから通信が入る。

『こっちの準備できたよ！発進許可は？』

『まあ無くても天音さんのために勝手にいきますけど』

「シャルロット、セシリア……出なくていい」

『え？』

「全部遅かったんだ……あいつを行かせたのが……天音の目的を察せなかったのが全ての間違いの始まりだ」

『ラウラ？どういうこと？』

『何がおっしゃりたいんですの？』

ラウラは手を思いっきり握りしめて、天音がわざと反感をかって危険なISにいてもうとしていたのに気がつかなかった自分を恨みながら真実を告げた。

「天音は……あの3機のISに落とされた」

『え……？嘘、だって天音はどんなことがあっても何とかするじゃん』

『そうですわ！あの方は……っ！……』

セシリアが何かに気づいたみたいで言葉を途切らす。  
モニターのセシリアの顔がドンドン曇っていく、シャルもそれに気づいてセシリアの心配をし始めた。

『セシリア大丈夫？』

『シャルロットさん……天音さんのISの反応が………』

『え？……あつ反応が……ない……』

どうしようもない、最悪の事態になってしまった。

織斑先生は憎しみを込めた目でモニターで福音、蜃気楼、摩天楼がいるところを睨みつけていた。

とある無人島……その海岸にISスーツを着た見た目少女な子と不細工な猫が転がっていた。

「……ねえ、ニャンコ先生」

「なんだ？ 天音」

「……私達……よく生きてるよね」

「ああ、私はとにかく天音が生きてることは不思議だな」

「……とか何とかいって全力で生体再生使ってたくせに」

「ふん、なんとでもいえ」

「……福音達に見つからないようにステルスモードにして……ゲホゴホ……るの？」

「ああ。もう喋るな、中はまだ治ってないんだぞ」

「……うん」

ニヤンコ先生は天音の近くに行き海を眺める。

そんな二人を木に寄り掛かりながら、見ている人影が二つあった。

「……スクール、あいつIS学園の生徒か？」

「そうでしょうね……オータム。それにあの子、福音と蜃気楼、摩天楼を一気に相手してたみたいよ？」

「マジかよ！ それでまだ生きてんのか？ 化け物かよ」

「もう少し様子を見ましょ」

スコールと呼ばれた女性は口の端を吊り上げて、楽しそうな表情をしていた。

- - - 旅館 - - -

「ねえねえ、あっちゃんは何？」

「……………落とされた…？」

「嘘でしょ？ あっちゃんは何？」

こんなやり取りがさつきからずっとやっているが、のほほんさんは認めたくないのか嘘だと言って聞かない。  
シャルすらイラついてきていた。

だがのほほんさんも目尻に涙を溜めていたので何もいうことが出来ず、ただ後悔しかできなかった。

「ラウラ、天音が落ちたってホントなのか？」

「『『『『一夏！』』』」

今までずっと寝たきりだった一夏が起きてきて、少し皆の気持ちが楽になった。

「……天音が落ちたのはホントだ。ISの反応もない」

「なら行くか！」

「行つて何するの！？生きてるかどうかもわからない人を探しに行つて落とされに行くの！？」

「天音は生きてる。だから俺達は天音を傷つけたあいつらを倒しに行く」

「だが福音の居場所しかわからんぞ」

「それで十分だ。ノルマは果たす」

そついいISを展開し、旅館から出ようとするのと紅椿が一夏の前に現れる。

「私もいくぞ。私のせいで一夏が落とされた、今度は油断しない」

「…篇」

「私達もいくぞ」

「……じゃあいくか！」

「……ねえニヤンコ先生」

「なんだ？」

「……一夏達が福音を倒す見たいだよ？」

この猫…馬鹿を見る目で見てきやがった。  
ていつか今回は変なネタが思い付かない……珍しいこともあるもん  
だな。

「……なぜそう思う」

「勘かな……そんな気がする」

まさか飼い猫にため息を吐かれる日がこよつとは思ってもみなかった

たよ。

もう少ししつけないと行けないらしいな。

「そういえば簪から通信が来てるぞ」

「……繋げて」

『……天音！……大丈夫……？』

「あー、少し大丈夫じゃないかなー」

元気を装いながらいつもの冗談みたいに言う。

あまり心配かけたくないのと、茜と美咲の声も少し混じってたから暴走しないようにするのも理由の1つだ。

『……今……どこ？』

「わかんない。どこどこ？」

『……とにかく……無事なのね……？』

「うん」

そういうと通信が切れる。

ニャンコ先生のお腹の辺りから音声が出てくるから不思議なもんだ。あー、美咲や茜に心配かけてるんだろうなあ……どうにかして機嫌とらないと。

ついでにステルスモードきつところかな。

「……ニャンコ先生、行かない？……ゲホゲホ」

「馬鹿を言っな。せめてあと……40分くらいそのままでいろ」

「……何だかんだ行かせてくれるのね」

「何を言っても聞かんだろう……お前は」

仰向けになって空を眺める。茜色に染まって少し暗くなってきていた、こんなんで戦ったら何処にいるのかまるわかりだ。

機体性能に頼りすぎた……自分自身は強くなってない……もっと強く……何にも負けない強さがほしいわけでもない……困ったものだ。

とにかくエネルギーを気にしないで戦いすぎたと反省しながら、体の回復を待った。

「目標視認……ターゲットロックオン」

そういうとラウラはレールガンを福音に向け放つ、放った弾が福音に命中したのを確認してシャルとセシリアが作戦通りに行動する。

「こつちですわ!」

「どこみてるの!？」

シャルとセシリアに挟まれて攻撃されている福音にラウラはレールガンを撃つ。

そこに鈴が接近戦闘で畳み掛ける。  
箒と一夏は近くの岩場でISをステルスモードにして隠れていた。

『……一夏…天音無事だった…』

「「!?!?」」

待機してるとこに簪が明るい声で通信を繋げてきた。  
この様子では本当みたいで二人の顔も明るくなった。

『……でも少し無理してる感じだった……私もそつちいくから……』

簪はそういうと通信を切れた。

少し茜と美咲の声が聞こえたけど暴走してないか心配してる余裕はなかった。

「（確か簪のISは完成してないって天音が言ってたはず……完成したのか？）」「するとISの反応が2つリーダーに浮かび上がった。1つは簪のISだろう……もう1つはおそらく天音だ。」

「いくぞ！」

「ああ！」

一気に飛び出して福音の背後をつくが距離を取られ、黒いISが海面から出てきた……摩天楼だ。

だが今はそれでいい……天音が来るまでの時間稼ぎになるのなら……そう思っていた。

「きゃっ！」

「鈴！？………厩気楼！」

どうやら最凶の3機全て揃ったみたいだった。

馬鹿みたいなエネルギーを持っている3機のISにそのうちの1機は再生なんてするチートISだ。

全員が最悪の事態を想像する、天音の惨劇も同時に頭を駆け巡る。

「ははは………天音、早く来いよ？」

「私達では抑えられんぞ……天音」

一夏と箒はそういうと摩天楼と蜃気楼に突っ込んでいった。

## 18話「臨海学校Part4」

「なんだ！？ こいつ！」

「なんでこんなに動けんのよ！？」

「福音は私とセシリア、蜃気楼は鈴とシャルロット、摩天楼は一夏と箒で対処しろ！」

「『『『『了解』』』』」

6人は苦戦していた。福音との戦いに集中していた時に蜃気楼と摩天楼の乱入で全員焦っていた。天音を難無く落とした3機が一カ所に集中たのだ、誰でも焦る。

「くそ！ こいつ天音みたいな動きするぞ！」

「この真っ白白すけもよ！」

「そつちもか！？ この真っ黒黒すけが2体……しんどいな！」

全員全力でコンビネーションを駆使し、担当のISを落とそうとしているがなかなか落ちないどころか、押され始めていた。

「ふふふ、何だか皆さん天音さんに影響され始めていませんか？」

「……ふっ、そうかもしれんな。こんな状況なのに変なことしか頭に浮かばない」

「確かにね。今の僕なら天音の気持ちがわかるよ」

「あー、なんかあいつ生きてる気がしてきた」

鈴は冗談混じりにそんなことをいって軽く笑った。  
周りの空気が暗くなるが一夏と箒は口元が緩んでいた。

「どうなさったんですの？　一夏さん」

「いや、実は簪から天音が生きてたって情報が来てな」

「無理して返事してたみたいだが平気だろう」

一夏と箒の言葉にシャル、ラウラ、鈴、セシリアの表情が一気に明るくなる。

それと同時に動きが比べものにならないくらい良くなった。

「それは本当か！？」

「……天音…待っててね！」

「一気に畳み掛けて天音のそこに行くわよ！」

「わかってますわ！」

福音、屋気楼、摩天楼を畳み掛けようとした瞬間にその3機にミサイルが直撃した。

「……私も協力する」

「来たか！簪」

「……油断しちゃダメ、……相手は強い」

そついうと簪の横から灰色のISがすごい勢いで福音に突撃して海面に叩きつけた。

ハイパーセンサーで操縦者を確認すると意外な人物だった。普段はほのぼのオーラと遅い動きが特徴の

「この子達が、あっちゃんに怪我させたおろかな？」

のほほんさんだ。

それと同時に第のISが光だした。

「なっ……絢爛舞踏？ エネルギーが回復した？」

「ほんとか!？」

「ああ、受け渡し可能らしい」

「エネルギー補給源確保したことだし、やりますか!」

そうして福音、屋気楼、摩天楼撃破作戦が再開され、第2ラウンドが開始した。

チ……チ……チ……ピピピピピー!

「さて、行きますかな?」

「大丈夫なのか?」

「問題はない……っていったら嘘になるね。でも戦えるくらいには回復したよ?」

「なら仕方ないか」

ゆっくり体を起き上がらせるのをジッと見て仕方なさそうにため息を吐くニヤンコ先生を見ると叩きたくなる。

しかし本調子が出ないなあ、疲れてるせいかもしれないけど変なくだらないネタが出てこない。

「……いつもならアツチョンブリケとかインディグネーション！とか頭に浮かぶんだけどなあ」

「口にしてる時点で平気だろう」

むむ！ この猫め……人が本気で悩んでいるのにこの猫野郎糞野郎！ あれ？調子でてきたんじゃない？

「……………」

「どうした？」

「……布団がふつとんだ。内蔵がないぞう……メテオスウォーム……アブソリュート……ティポプレッシャー……ラーメン」

「どうしてその流れで最後ラーメンになるのかわからん」

「これだから中年ジジイは頭固いから困る」

「なんだと！ この無礼者め！」

「無礼者とかって決めるの結局他人だもん」

「当たり前だろ！」

「落ちろカトンボ！」

「うるさいわ！」

いつもよりどうでもよく、いつもよりくだらない口争いを繰り広げ、天音は着々とモチベーションを上げていった。その様子を見ていた2人は片方は呆れ、もう片方はクスクスと笑って見ていた。

「……………はぁ……………はぁ……………」

一夏達は追い込まれていた。天音程長く戦闘をしている訳でもないのに息が荒く、肩で息をしてる感じがした。

「……くっ、勝てない」

「まだだ！ 天音が諦めずに戦ったんだ、俺だって！」

「一夏だけに任せたらエネルギーとか色々問題があるからね、僕も行くよ」

「私は一夏とペアだからもちろん行くぞ」

「全員で行きましょう。一人二人でどうにかなる相手じゃないわ」

全員の目標を福音にし、その他2機の攻撃はその場その場でどうにかするという危険な賭けに出る。  
なぜか皆は天音が来ると本能で感じとっていた。

「うおおおおおお！」

一夏が福音に切り掛かるが当たり前のように避けられ、蜃気楼のビームライフルの銃口が一夏に向いた。

引き金がかかるほんの少し前に簪が蜃気楼にタックルして防いだ。摩天楼は体勢を崩してる簪にビームバズーカを撃つが簪が簪を抱き抱えて回避したので、下の岩場に当たり岩場がくだけちる。

「こっちだ！」

「どこみてんのよ!」

ラウラと鈴が福音を連携で攻めているが攻撃は当たっていない。  
セシリアは上昇して、ビットを飛ばして福音と仲間のサポートをしている。

蜃気楼はビームバズーカとビームライフルを持ち遠距離で攻めてきた。

それに対して摩天楼は両手に黒凰を持って近距離でせめてくる。  
福音は広域に光弾を撃ち、近づけないようにしていた。

「……ミサイルが尽きた」

「くっ! みんなごめん……弾切れ……」

「私もレールガン弾切れだ……ワイヤーブレードも破壊された」

「わたくしもエネルギーが……」

「あたしも」

エネルギーは篋がいるから何とかなるが弾は何ともならない……簪はまだ近接攻撃用の武器と荷電粒子砲がある、だがラウラはプラズマ手刀、シャルにはあとシールドピアースとナイフだけ……無理がある。

このままでは全員やられるかもしれない。

「くっ！ 白式……俺に…俺に仲間を守れるくらいの力をくれ！」

すると白式が光だし、形を変えていく……その状況に驚きながら福音達の警戒は解かない。

福音は危険だと察知したみたいで攻撃する。

「……雪羅シールドモード」

一夏が呟くと右手を前に盾のように出した。  
光弾は打ち消されていき、一夏の放った荷電粒子砲が福音に直撃した。

「これが白式・雪羅……」

「セカンドシフト？ このタイミングで？」

「いくぞ！」

雪羅をブレードモードにし切り掛かる。

反撃されても雪片式型で掻き消す。

「（エネルギーの減りも倍か……幕に負担をかけすぎる訳にもいかない）」

「私も戦うぞ！ エネルギーは回復できるから私のことは気にするな！」

「……私も戦う……天音のために」

全員が少し笑顔になって闘志を目に宿した。

全員エネルギーを箒に回復させてもらっていつでも戦闘再開できる状態だ。

少しの間、3機と睨めっこしていたら摩天楼が動き出した。

「……摩天楼は私が！」

「簪さん！ 援護しますわ！」

「蜃気楼は私に任せろ！」

「箒、あたしもいくわ！一夏とシャル、ラウラは福音任せたわよ！」

そっぴいバラける。

福音……こいつに俺が落とされなきゃ天音が落ちることはなかった。決着つけるか。

「……くっ」

「簪さん大丈夫ですか？」

「……平気」

とわいったものの…残りエネルギーが少ない……このままじゃ。  
摩天楼は黒凰にエネルギーを纏わせていないから受けても死ぬこと  
はないけど、絶対防御は発動する。  
IS強制解除だって有り得る。

「……負けられない」

「そうですね。天音さんの……きゃ！」

悲鳴が聞こえた方を見るとIS強制解除されたセシリアが降ってきた。

セシリアを受け止めて、周りを見渡すと蜃気楼がすぐ近くにいた。

「……っ！」

「くそ！ セシリア大丈夫か！？」

「……気絶してるだけ」

「ちっ！ よくもセシリアを！」

箒が蜃気楼に攻撃するが摩天楼に防がれ、蜃気楼はビームバズーカを箒に向ける。  
だが鈴がギリギリのタイミングで衝撃砲を撃ち蜃気楼は回避行動に移った。

「簪、あんたはセシリアを安全なところに！」

「鈴！ 危ない！」

「えっ……きゃあ！」

摩天楼の放ったビームに当たり、鈴もISを強制解除された。それを簪が受け止めて安全なところを探して寝かせる。

「……ここで待ってて」

そついい箒が戦つてるところに戻っていった。

（なに？ここ……あたし死んじゃったの？）

（鈴さん……いらしてたのですね）

（なんであんたがここに？）

『なっさけないなあ』

（天音！？ 仕方ないでしょ？あんな化け物相手してここまでもったのが不思議なくらいよ）

（そうですわ！ 少しは褒めてくれてもいいではありませんか！）

『ははは！ でも一夏に褒めてもらった方が嬉しいでしょ？』

（（なっ！））

『今一夏苦戦してると思うよ？ ここで寝てる？』

（いくわよ！ 絶対あのISをこてんぱんにしてやるんだから！）

（鮫の餌にしてさしあげないと気が納まりませんわ！）

『ならおいで……今度は私がついてる…何とかしてやるよ！』

目を覚ますとそこには緑色の優しく暖かい光があった。

「くそ！ エネルギーが！」

「僕も……今日が命日かな？」

「ふふふ…冗談に聞こえないな」

目の前には福音だけなのに落とせない。

福音は光弾を圧縮していた、くらえばただでは済まないが避ける気力もエネルギーも残っていなかった。どんどん光が大きくなるのをただ見ていたら巨大なエネルギー反応が後ろから出た。

振り向くとピンク色の図太いビームが迫ってきていて反射的にかわすと福音がちょうど放った攻撃に当たった。

少し均衡するかと思ったが一気に押して福音を飲み込んだ。

「な、なんだ？」

「この光、まさか！」

ビームが消えるとボロボロになった福音が落ちていった。

隙について雪片式型で切り付けて機能を停止させると、その横を勢いよく何かが通っていった。

風鈴みたいな音と緑色の光を残して……………

「これって……まさか」

「そうだよ！ きつとそのまさかだよ！」

「やっときたのか……大遅刻だぞ」

「何なんだこいつら」

「……二人じゃ勝てない」

摩天楼と厩気楼が振りかぶった瞬間、死を覚悟して目をつぶる。  
すると鈍い音がし、くるはずの衝撃が来なかった。

リーーーーン……………

「……この音…天音？」

「やあ、こんにちは。そして正義のヒーロー天音だよ！」

## 18話「臨海学校Part4」(後書き)

天「(しっかし辛いなあ、体から血が吹き出しそうだ)」

ニヤ「もう少し休んでればいいものを」

天「いけるよー全然いたくないよー。4トントラックに思いつきり引かれた後くらい平気だよー」

ニヤ「何も言つまい」

## 19話「臨海学校Part5」

「やあ、こんにちは。そして正義のヒーロー天音だよ！」

とはいったものの……ここに来るまでに結構エネルギー使っちゃったから後半分くらいしかないんだよね。

どうしたもんかなあ……福音はさっきので落ちただろうけどこいつらはなあ。

「天音、こいつら厄介だぞ」

「知ってるよ。自分のこと並に知ってる」

GNソードVを両手に持って摩天楼に切り掛かる。

摩天楼は最小限の動きでかわし片手にビームライフルを展開して天音の方に向け放った。

それを難無く避けて屋気楼からの攻撃は切り裂いて防ぐ。

「……すい」

「ああ、私達2人掛かりでも追い詰められたのに互角に戦ってる」

「第！」

声のする方を見ると一夏達が来ていた。

なんだかボロボロでもものすごく苦戦したっていうのがわかる。

「ボロボロだなあ！ 一夏」

「戦いに集中しろよ！ 援護する」

「いいよ、高燃費マン。エネルギー切れが目に見えるよ？」

「うぐっ！」

一夏をからかいながらしつかりと摩天楼と蜃気楼の攻撃を防ぐ。

私とニヤンコ先生のコンビネーションなめんなや！

ビットを飛ばして、一度距離をとらせてから鳩尾のところにある秘密兵器：超高威力ビーム砲《レクサス》を戦闘モードにシフトする。これを撃つと反動で色々まずいことになる。

「それより一夏、鈴とセシリアが気持ち良さそうに寝てたぞ？」

「人聞きがわるいわね！ 気絶しただけよ！」

「如何にもサボってたって言い方しないでいただけますか！？」

はい、これで全員集合だね。

あとはこの暴君を倒せばいいわけだ……刃にエネルギーを纏わせて  
るから結構危ないけどいける。

GNソードVを握りしめて腰を低くすると摩天楼と蜃気楼も構えた  
……まるで中に人がいるように……。

天音は2機の上を通り、隙を伺うと摩天楼が切り掛かってくるがG  
NソードVで受け止め、ビームバズーカを構えた蜃気楼にもう一本  
のGNソードVをライフルモードにしてビームバズーカを撃ち抜く。  
爆煙から出てきた蜃気楼は白煉とビームライフルを持っていた。

「ぐっ！」

蜃気楼に氣をとられ、摩天楼を注意していなかったので蹴りを入れ  
られ、体勢を崩す。

勢いに身を任せながら摩天楼にビームを撃ちつつける。

「……辛いなあ、どれくらい辛いかっていうと本気の織斑先生を生  
身で相手してるくらい辛いしんどい」

「その戯言吐けるなら平気だろう」

「手厳しいですなあラウラは」

蜃気楼からのビームを切り裂き、摩天楼の黒煉を受け流し反撃し、  
蜃気楼と摩天楼のコンビネーションをビームを乱射して阻止。  
これをずっと繰り返す。

「（もうすぐ夜明けだ……寝る時間が……）」

天音の動きが変わる。

今までは中途半端に攻め、相手のミスを狙っているいつもの楽して勝つスタイルが、直感に頼り自分の能力をフルで使い畳み掛ける超攻撃的スタイルに変わる。

「いくよ、天神」

リーーーーーン

天音の声に答えるように天神から風鈴みたいな音になった。

天神の鳩尾の部分にある丸い緑色の玉がひかりだす。

天音は摩天楼に突っ込むとGNフィールドを展開する。

摩天楼にぶつかると同時にビットを展開し、ワイヤーを摩天楼にくくりつけて身動きできなくした。

「次！」

今度は蜃気楼にビームを撃ち接近していくと白煉で切り掛かってきた。

それを受け止め、首を掴むと丸い緑色の玉から緑色のビームが出て、蜃気楼の胴体を消し飛ばす。

すぐに摩天楼の方を向いて構えるが……左腕の感覚がない……おまけに摩天楼はすぐ目の前に黒煉を振り下ろした状態だった。

「……………えっ」

距離をとって左腕があるはずのところに手をやると生暖かい液体が手に当たるだけで他は何もなかった。

「……………ちっ！ この真っ黒黒すけ風情が…！」

「天音！」

「お前達は下に降りて回復してろ。こいつは私が倒す」

右手にGNソードVを再展開し、摩天楼を睨んでいると蜃気楼のコアらしきものが天神のコアの中に入っていた。

「次から次へとごちゃごちゃと！」

天神のウィングスラスターを吹かせ、摩天楼に切り掛かる。

軽く受け止められて反撃されるが体をねじらせて回避し、蹴りを叩き込んで距離をとる。

レクサスの反動で内蔵やら骨が大変なことになっているが気にしている場合ではない。

「血が……滝のように血が……」

ニヤンコ先生に止血してもらいながら戦っているとどうもイマイチいつもとは違う感覚がする。それだけ左腕に頼ってきたって事だが、今は岩場に転がっているからどうしようもない。

ガッ

「ぐあ……ああ……」

動きが鈍っている天音の首を掴んで摩天楼は突き刺す構えをしていた。

「あっちゃんを……放せー!」

バキイン

どこからともなくやってきたのほほんさんが黒煉を折る。どんだけ素晴らしいくらいに改造した打鉄なんだろうか……一時期の私よりひどい改造してあるよね絶対。

摩天楼がのほほんさんの腹にビームバズーカを当て引き金を引こう

としたとき、私の中のなにかが解放されたような感覚が体に走った。

「ああ………！」

まずい、のほほんさんが！

天音は何して……る…？

一夏は天音の方を見ると天音が落下しているのに天神はそのままの位置を保ったままでビームを撃ってビームバズーカを破壊した。

天音はそのまま岩場にたたき付けられる形で落下した。

ちょうどそこには左腕もあった。

「なんで天音が乗ってないのに動いてるんだ！？」

「まさか暴走！？」

ホントに暴走なら危険だ。

前に天音は天神はいろいろと威力や性能が馬鹿みたいだからリミッターがついてるって言っていた。

今、摩天楼をボコッている天神がリミッターを外してない状態なら俺達は勝てない。

摩天楼は装甲が剥げて操縦者の顔や体が見えるくらいになった。そのとき天神に乗ってる人物の顔が見えた

「……嘘だろ」

「………なんで？ ……だつてあそこに」

「天音が2人？」

「どういうこと！？ なんで天音が…」

天神に乗ってる人物は天音にそっくりだった、唯一違うのは目の色が赤いってとこだけ……。

天神は摩天楼を岩場にたたき付けて足で踏んで動けないようにした。

「くくくくつ！ よくもやってくれたなあ！ 調子にのりやがつて……左腕どうしてくれんだよ！？」

操縦者の意識はない。というより暴走したときに気を失ってるはずだ。

天音（？）はGNバスターソードを振りかぶった。

雪羅の荷電粒子砲を天神に向かって撃つがビットに掻き消されてしまい、反撃を受けた。

「邪魔すんじゃないやねえよ一夏」

「くっ！」

「俺の左腕の代償はお前の命で払え……………死ね！」

天音（？）は摩天楼に思いっきり振り下ろした。

ガキイン

「ちっ！」

「ハア…………ハア…………いい加減にしてくんないかな…………？」

「てめえ何しに来た？ 弱いくせにデシヤバンじゃねえ！」

「…力を無駄にふるってる奴ほど弱い奴はいないと思うけど……………？  
心が弱いくせに俺は強いって言ってる奴はみつともないよ」

「だまれ！」

天音（？）は天音を殴り、天音は吹っ飛んだ。  
それでも立ち上がり摩天楼と天神の間に立つ。

「……この状態でGNバスターソードを振り下ろしたらどうなるかわかってるよね？ 摩天楼はもうエネルギーがない……ワンオフアビリティーも使えない状態の人を殺すの？」

「……こいつはそれだけのことをした、死んで当然だ」

「ニャンコ先生……」

「……わかった、好きにしろこの甘ちゃんが」

天神がいつもの猫になって天音の足元に降りた。

福音は鈴が担いで、摩天楼はラウラが担いだが蜃気楼は胴体の部分がなかったため残っている部分を箒とシャルに頼んだ。

「これで終わったな」

「うん、やっと……寝れる」

そついうと天音は倒れた。

「天音！」

「出血がひどい……はやく運ぶぞ！」

俺達は天音と左腕を抱えて急いで旅館にもどっていった。

旅館の前に降りると千冬姉と山田先生と束さんが立っていた。

3人とも天音の状態を見たら血相を変えて緊急治療の用意を教員全員に通達した。

「ちーちゃん、私がやる。左腕は今までは通りに動くかわかんないけど、そこらへんの人よりは可能性があるよ」

「わかった…任せたぞ束。山田先生はサポートに」

「は、はい！」

天音を部屋に担ぎ込むと千冬姉に追い出され、俺達は一旦着替えてからその部屋の前で治療が終わるのを待った。

その間空気が重い。

「……どうしよ……あっちゃんが死んじゃったら……」

「……もっと……力があれば……」

天音にベツタリだったこの2人は特に……今回も天音に頼り切りだった……結局新しい力を手にしても守れないのか……。

「なあに辛気臭い顔しとるんだ貴様ら」

振り向くと天音曰くISの待機状態の猫が話し掛けてきた。

「天音は寝てるだけだ。心配せんでいい」

「なんでわかるんだよ」

「あやつのISのAIだからな。バイタルサインくらいはわかる安定きつてるぞ？」

なんだか天音に似てる猫だ。気が抜ける話方で重い空気が少し軽くなっていた。

すると後ろの戸が開く音がしたので一斉に振り返ると千冬姉がたっていた。

「なんだ……いたのか」

「教官！ 天音は！？」

ラウラが千冬姉に迫っていくと少し鬱陶しそうにため息をはいた。

「落ち着け…… 卯月は平気だ。 左腕はリハビリすれば大丈夫だろう  
が今はまだリハビリは無理だ。 バイタルも調べたが驚くほど安定し  
ていた」

「……………ほお……………」

よかったあ……この猫の言ってた通りか。

しかし千冬姉が驚くってことはいつものマイペースが反映されて  
るのか？ そういえば倒れるとき寝れるって言ってたな……まさか  
こいつ。

「率直に言つとただ寝たかっただけみたいだ」

そついうと千冬姉はどこかに歩いていった。

やっぱり千冬姉と束さんにできないことはないな！

## 20話「臨海学校Final」

スウー

「……………いた…」

見た目女の子みたいな容姿をしている男の子 天音に薄い青色をした髪  
の毛の女性が近づく。

「……………すう…すう…」

「……………」

女性は天音と同じ布団に入り眠りについた。

「……………ん……………ん？」

「……すう……すう」

なんか暖かくていい匂いがして心地好くて寝やすいなあと思った  
ら、目の前に見知らぬ女性が寝ているのですが……あつ、一夏の知  
り合いかな？

「……起こすのも悪いな……」

起こさないようにソツと起き上がろうとすると右腕が引つ張られた。  
おかしいなあと思いながら右腕を見てみると掴まれていた。

「（起きるなつてことですか……まあいいか）」

もう一度布団に入り寝

「あっちゃんぐつどもーにーんぐー！」

「……おはよ」

「大丈夫か？ 天音」

「ラーメン作ってきたわよー」

ようとしたんだけど、それを許してくれないみたいで何故か一夏と鈴は気まずそうにしている、のほほんさんは満面の笑みを浮かべながら固まっていた。

簪は驚いてるだけ、普通の反応でよかったと思う。

「ねえ、あっちゃん……その子誰かな？」

「あははは、それが目が覚めたらそこにいたい！ 痛い！ 左腕が痛い…… ってなんでくっついてんの！？ 肩からバツサリいつてたのに」

「東さんと山田先生と千冬姉が全力で治療したんだ」

「それはありがたい」

笑顔で答えても、笑顔でお礼をいってもものほほんさんは許してくれないみたいだ。  
左肩がギシギシいつてるもん。

「……心配したんだよ？」

「えっ？ みんなも？」

そついうと全員頷く。

心配してもらえるほどの仲になったのかあ嬉しいねえ……楯無さんは過保護の領域だけだね。

「そっかごめんね……」

「あっちゃん……」

「まさか心配されてるとは思ってなくて……ほら、私って何故か何があってもなんとかなるでしょ？ だから大丈夫だって思われているものだから……」

「一夏はそうだったわよ？」

「この薄情物め！ 友達をなんだと思ってる！？」

「さっきと言ってることが違う！？」

たく……友達が大変なことになってるというのに心配しないなんて信じられない！  
そう騒いでも後ろで何か起き出したような音がした。

「ん？ あっおはよ」

「……うん……」

「天音……初対面の人が自分の布団にいても何でなにも言わないのよ……」

ふふふ、鈴よ……そこが私のいいところ。  
女性は眠そうに目を擦り、じーっと私を見つめて来る。  
ていうか同年代なんじゃないかと思うくらいの容姿だ。

「…………卯月天音？」

「うん、そつだよ？ 君は？」

「…………椎名京」  
しなな けい

椎名京って言うらしい……見た目は美少女でございます。  
茜が立花家家宝の墮甲を両手にはめて、美咲が卯月家宝刀の白凰を  
抜刀している姿が見えた。

「ちよっ！ ここでそれはまずい！」

「シラナイヨ、オニチャンがワルインダヨ」

「死んでデナオシテこい」

まずいまずい……左腕は使えないし、武器ないし……っていうかG  
NソードVを白凰で一度スッパリ切られてるから抵抗できないんだ  
けどね！ 気休めにならなるんじゃないかなって思ったんだ。

「さよなら……みんな」

そついい大の字になってねところだと頭に柔らかい感触を感じた。  
そつ……簪のひざ枕に似てるけど違う、ということとは……

「大胆」

「いやねところがつたら調度いいところにひざがあつたっていうか」

「何朝から騒いでるんだ貴様らは」

呆れながらもちゃんと威圧してくるこの感じは……かの有名な鬼神  
ちふーゆでは？

ゴン

「なんだって？」

「正直悪いと思ってます」

素晴らしいくらいの威力だ……下手したらスイカ割のスイカと同じ  
姿になるかもしれない。

千冬は天音が頭を抱えて唸っている横で、天音の頭を撫でている京  
を見つめていた。

「何故ここに摩天楼の操縦者がいる？」

「『『『『なっ!?!』『』『』『』」

その場にいた全員一（天音以外）が驚いて固まった。

さっきまでのほのぼのの空気と打って変わって、警戒バリバリの空気になった。

ちなみに天音はまだ頭をかかえて唸っていた。

「私の質問に答えろ」

「摩天楼と福音のコアは凍結処分になった：ナターシャが迷惑かけたお詫びをしに行ってきたって言ってた」

「……なるほど、だが「ちーちゃん！ 天音ちゃん！」……うるさいのが増えたか」

千冬のオデコに血管が浮き出していた。

相当お怒りのご様子だ、篤達は完全に脅えて涙目で今にも泣きそうだもん。

「むむ！ 君は摩天楼の操縦者だね？ 調度いいや君はそのままIS学園に入学しちゃって」

「おい、束！」

「さっきアメリカに賠償金をガッポリ頂くためにいったら、凍結処分にされそうなコアを一つ回収してきたんだ。それで色々やり

たいから頼んだよ？ テストパイロット」

そついいながらコアを見せると京の表情が変わった。

どうやらこの黒いのが摩天楼のコアらしい。

蜃気楼と色違いだね。

するとニャンコ先生がひかりだす。

「へえ、蜃気楼のコアは猫ちゃんに取り込まれてるのかー、ビックリビックリだね！ 猫ちゃん猫ちゃんコアこっちに渡してくれないかな？」

「むっ、束か。いいだろう、ほれ」

ニャンコ先生から真っ白なコアが束に向かって出ていく。  
束の手に納まったとき、摩天楼と蜃気楼のコアが共鳴してるみたいに光る。

「へえ……なるほどね。お互い大切に守りあってたのか」

「ん？ どういうこと？」

「そのコアが教えてくれたんですよ。黒いのも白いのもお互い大切に恋人みたいな感じですかね。ていうかコアって喋るんですね、初めて知りました」

天音の奇妙な言葉に全員の頭にクエスチョンマークが浮かぶが、束と千冬は心底驚いた顔をしていた。

「……まあもうすぐ朝食だ。行つてこい」

「了解！」

そういつて敬礼して朝食を取りに行こうとしたら足払いされて倒された。

その上に京が乗ってきた。

「えーつと？ ん？」

「……………」

あれ？ 今一状況が掴めないなあ……なんで馬乗りされて見つめられてるの？ これから弱点探索しますとかプロレス技かけるとかじゃないよね？

「な、なに？」

「……………好き……………大好き」

突然の告白とキスをされて、脳内フルメタルパニックなんちゃってでも結構混乱してる……中国の変な池に落ちたらパンダになってまじったくらい混乱してる。

お湯かけないと元に戻らないという特典付きだったね。

そんなくだらないことを考えてるうちに唇を離された。

体の力が抜けてないのは舌をいれられてないから平気なのだ。

「お兄ちゃんはやくいこつよ」

「え？」

「天ちゃん何ほづけてるの？」

「ん？？」

なんでだ？　なぜにこの二人は平然としてるんだ？　いつもなら殺す気でお仕置きしてくるくせに……逆に怖いんですが、ラオウが優しく小鳥に餌をあげてるのを見たときくらい怖い。

「（まあいいか）ちょっとまって」

そついつて京の手を引きながら茜と美咲の後を追う。

「（お兄ちゃんに舌を入れなかったってことは、愛情と独占欲では私が勝ってるってことだよね？　あはっ）」

「（ふふふ、椎名京…天ちゃんのことをあまり知らない人に私と天ちゃんの仲を裂けない…天ちゃんとベロチューは当たり前なのに…ふふふふ）」

この2人は少し常識が通用しないということをスツカリわすれていた天音であつたとさ。

「うーん……眠い」

「……食べさせてあげる」

「私も」

簪と京が食べさせてくれるのかあ……嬉しいなあ、嬉しいんだけど視線で私を殺そうとしてる人がいるから遠慮しよう。

この視線は楯無さんかな？ 戻ってきたのか……虚さんに怒られるぞ。

「我慢して食べるよ。だからそんな視線で睨まないでください」

「気づいてたのね、天音ちゃん」

フワッと天井から降りてくる楯無さんを見ないようにして、食事を開始した。

今日の誰が作ったんだろう？ チャーシュー麺って朝に出る代物じゃないよね……鈴かな？ でもさっきラーメン持ってきてくれたし違うのかな。

「……………痛い」

「「「え？」「」」

「左腕動かそうとするとすごく痛いんだけど」

ものすごい痛みで涙目になったままで言ったら、女子の半数が目を逸らした。

結構傷ついた。そこまで嫌われてたか……残念だ。

「（今の写真とった？）」

「（ばっちり！ 最高画質で）」

「（後で回してね！）」

「（了解！）」

なんでみんなヒソヒソ話してるんだろう……陰口か？ 悪口か？ 茜と美咲が反応しないってことは違うのか。  
ある意味怖いな。

「天音…あーん」

「あーん…………あつつうう！」

「ちゃんとフーフーしてあげないと」

「…………ご、ごめん…忘れてた」

そついいながらフーフーとしてる簪は可愛かった。

楯無さんがすごい形相して「私の簪ちゃんを…」っていいながら睨んでいて、茜と美咲は黒いオーラを身に纏っていた。

「……………（しゅん）」

パシャパシャパシャパシャパシャパシャ！

何だろう……………いっぱい取られた気がする。

360度全ての角度からシャッター音が聞こえた。

「なんだか皆おかしいよ？」

「そりゃーそーだよ。一度死んだと思ってた人が今はこんなに元気なんだもん」

そついいながらのほほんさんが私のひざの上に頭をのっけて、ニヤ

ンコ先生を抱きしめた。

いつもの光景なのだが今まで冷ましてから麺を口に入れてくれた簪さんが、冷まさないで口に無理矢理押し込んで来るのは何故でしょうか？

ぴこぴこ

「……ん？」

パタパタ

「……ん？」

頭とお尻に違和感を感じていると、織斑先生が来た。怒ってる顔しているがこれもいつものこと、一夏も何かやらかしていたみたいでシャルがジト目で睨んでいた。

「貴様ら……何度言えば気が済むんだ？」

「あと五回くらいかな？」

「……私の天音がすいません……」「……」

なんで「私の」ってところがやら強調されたんだろう？ 別に誰のだっていいけど

「ほんとに?」

「言ったね、お兄ちゃん」

「ふふふ、そうなんだ」

「ふーん」

「いいこときいちゃった」

何も言っていないんだけど……はあ、今日は帰るだけか……バスの中でまたのほほんさんときわどいバトルが始まるのかなあ。

「大丈夫だよ? 今日はカラオケ大会だからね!」

「また変な罰ゲームつきでしょ」

「勝つ自信ないのかな? あーあ、つーまんないのー」

「何を言っているんだい? 本音くん、勝つ自信なんて有り余りすぎて無いと感じているくらいさ」

「よろしい、しょーじんしたまえ」

「ははー」

のほんさんの有り難い言葉に頭を下げる天音を見ていた人は何故か複雑そうな顔をしていた。

「卯月、いつまでネコミミとしっぽをつけてるんだ？」

なんだ、まだいたんだ。

頭とお尻を触ってみると何か手に当たった。

取ってみるとネコミミ、お尻を見てみるとしっぽがついていた。

「……あれ？…いつ付けたんだっけ？」

「朝からついていたぞ」

「私が部屋に入ったときにはついてた」

「ということとは……」

脳裏に浮かぶウサミミを付け、おちやらけた女性……篠ノ之束。まさかとは思うけど、左腕を治療したのって……

「姉さんだ」

と篤が言つと織斑先生はどこかへ行ってしまった。

まあいいか、これどうしょ

「コホン……それではここで生徒会会長として重大発表があります」

咳ばらいしながら立ち上がる楯無がそういうと周りの生徒は会話をやめて楯無の方を見る。

「……帰りのバスでカラオケ大会ver天音と一緒にを開催したいと思います」

「何ですかそれ？ トロと一緒にみたいな名前ですね。それと私は同意してませんよ？」

「得点が1番高かった者が優勝、1週間天音ちゃんの所有権が与えられます。……いえ……1週間天音ちゃんにあんなことしたりこんなことしたりできます！」

「……「おおおー！！」「……」

「言い直す意味ないから！ あと私に何する気！？ 第一商品にしないですよ！」

「……「部外者うるさい！」「……」

「当事者だよ！」

ダメだ……恋する乙女や思春期の女子はこれでもかっけくらい言う

こと聞かないから困る。  
まったく、あの更識楯無め、いつか痛い目に合わせてやる……ていうか帰ったら虚さん怒ってないかな？

「そうと決まれば練習よ！」

「全員部屋に撤収せよ！作戦会議を始める！」

「了解！」「」「」

そのまま勢いよくみんな出て行ってしまい、ポツンと置いてかれてしまった。

ちやつかり楯無さんも茜も美咲ものほほんさんも行っちゃったし、一夏はあの5人に連れられてどこかへ行った。  
ラーメン食べ終わったし、私も自室で寝てようかな……。

《天音入室禁止》

「……………」

だれ？　こんなピンポイントで禁止する人、ゴロゴロできないじゃないか……

微かに聞こえる歌声を聞いて天音は何か納得したみたいにその場を後にした。

ということバスの中

天音は外をボーッと見ながら思春期の女の子が頑張って歌っているのを聞いていた。  
ちなみに採点は物凄く厳しくしてある。

「なんで41点なの!？」

「ここまでやって42点だと!?!絶望した!」

「何者かの陰謀だああ!」

結果的にこんな感じになる。

まあ採点機能を弄ってあるのがバレても

「採点機能に細工してある!？」

「もとにもどせもとにもどせ」

「ロックがかかってる!」

「くそー！」

てなるから別にいいでしょう。

バス席で前から順番にマイクが回ってくるから楯無さんとのほほんさん、何故いるのかわからないけど簪には回っていない。  
ちなみに今歌っているのは茜と美咲だ。

《総合得点85点》

「なんだって！？馬鹿な！」

「ふふ、天ちゃんの細工してるのはわかってたからね」

「お兄ちゃんが細工した採点機能でも高得点を取れるように上手く歌えばいい話だからね」

この二人はCDデビューさせた方がいいんじゃないのかな？  
プロもドン引きするくらい厳しい採点で高得点とったんだよ？

「二人で歌ったからお兄ちゃんは1週間、私と茜ちゃんの物だね」

天音にしてみればいつも通りだから何も思わないのだが、周りはそうではない。

特に更識姉妹&のほほんさん

「（ここは3人でいって高得点を狙うべきよ！）」

「（そうだね〜まさか、あかねちゃんとみさみさがここまでやるとは思ってなかった〜テヘヘ）」

「（曲はアリオリ未来で）」

「（……頑張る）」

アイコンタクトで会話を一瞬で終わらせると調度楯無にマイクが回ってきた。

楯無は後二つマイクを要求して簪とのほほんさんに渡した。

クラスの皆さんは「それもありか!？」って顔していた。  
カラオケって基本的にいろいろ自由だね？

〜しばらくお待ちください〜

《総合得点75点》

「ここまでして……」

「このてんす〜」

「……ハード……すげえ」

「「勝った!」」

楯無さん達で最後か……ってあれ？

「京やらないの？」

「別に興味ない」

「やんなよ、割と楽しいよ？」

「ほんと？」

「人によるけど、私はそう思う」

「……じゃあやる」

天音がクラスメートからスッたらマイクを受け取り深呼吸する。

「~~~~~」

おかしいな……いろいろおかしいぞ。

歌声とか音程とか歌詞とかさ、なんでこんなに上手いの？とかかなん  
で歌詞にちよくちよく天音って入ってるの？とかこんな複雑な音程  
をなんで出せるの？とか聞きたいことがたくさんあるけど、今聞い  
たらダメだよな。

京は歌い終わると物凄い拍手が送られるが特に気にせず、マイクを

他の人に渡す。

《総合得点95点……》

「「負けた……」」

すごいや、IS操縦者としてじゃなくてアイドル活動すれば結構人  
気でるんじゃないの？

《束さんの曲どうだったかなー？ 今回は天音ちゃんverだけど  
箒ちゃんverもあるから安心してね》

「「……………」」

織斑先生から怒りオーラが出ている、箒からは私に申し訳なさそう  
な視線が送られてくる。  
気にしないでください。

そんなこんなで帰りのバスは結構盛り上がったとき、めでたしめで  
たし

## 21話「新たなる一步（仮）」

さてさて……あの波瀾万丈な生活からやっと解放されたところで新たな一步を進もうじゃないか！

「まったり生活という新たなる一步を！」

現在やっと元の1人部屋になり握りこぶしを作って、改造したベッドに潜る。

超低反発ベッド《ノットくん》は素晴らしい寝心地なのだ。

「……はあ、8月…夏休みはいいものだ」

「そうだね」

「……………」

「……………」

おかしいな、鍵もチェーンロックもかけたし窓も閉めてある。  
誰も私の野望を邪魔できないようにしていたのに、部屋の中から声がする。

「（こういうパターンは気づかないフリしてた方が後々面倒なことにならないはず）」

「きゅ」

「（ニャンコ先生の鳴き声にしては可愛い声だな……そうか、これはニャンコ先生の仕業か！）」

「プー……プー……」

目の前で寝ているニャンコ先生を凝視しながら現実逃避に勤しんでいるとドアをノックされた。

『天音ちゃんいる？』

「いませーん！」

『あら。いないのか、残念……簪ちゃん、天音ちゃんいないんだって、どうする？』

『……強行突破』

物騒な言葉と同時に、一応ドアのぶ引かなくても押すと回って入れるように改造しておいたドア《まわるくん》が切り裂かれる。見事にみじん切りにされた《まわるくん》をボーツと見つめた。

「（今度はちゃんと耐久性もあげとこ……フライパンで）」

「あれはフライパンじゃ無理」

強行突破してきた2人が固まる。

そりゃそうだね、私もどこから声がするのかわからないし……決して後ろじゃないよ？

「……ねえ、今私達以外の声聞こえなかった？」

「何いつてるんですか？楯無さん変ですよ」

「……私も……聞こえた」

「アハハハハ、何をいつているの？簪も変だよ？疲れてるんじゃない？」

ガタッ

「（ビクッ）」

まずいまずい、何がまずいかって？ 傷がほんの2週間ちよいで治るわけないじゃん。

今この部屋にあの2人以外にすることがバレれば死んでしまう……まあ普通の格好してくれてればいいんだけど。

「今回も普通だよ」

やばい……本格的にやばい、楯無さんは今のでどこから聞こえてくるのかわかったみたいな顔してるし、口元を扇子で隠してるけど目はしっかりと私を睨んでる。

「ねえ、天音ちゃん。私疲れてるみたいだから、そのベッドで寝ていいかな？」

「えっ！……いや……それは……」

「なんでそんなに慌ててるのかな？ 何か隠してるの？ 例えばさっきの声とか」

「い、いえ。そんなことないですよ？」

「なら私がそっちにいても平気よね？」

そっついながらベッドにゴロンと転がった。

そしたら私の周りが妙にムシムシしてきた……そう、これこそ蒸し暑いということです。

「ねえ……なんでここに人の温もりがあるのかな？」

「さっきまでねっころがってたからです」

「へえー、一夜を共に過ごしたのかな？」

「いえいえ、気づいたらそこに」

「認めたわね」

何を認めたというのでしょうか？  
私は何も覚えてません。

「というか誰がここにいるのか把握できてないのに暴力振るうんですか？」

「どうでしょ？」

そついいながら楯無さんがシーツをめくると、制服姿の京がいた。  
うん、普通だ。

「……天音」

「ひゃい！」

いつもの楯無さんの雰囲気じゃなく、恐怖さえ感じて声が裏返った。  
心臓も心拍数が上がっている。  
ていうか確か心臓撃ち抜かれたのにどうして生きてるんだろう私。



素晴らしいランスを格納して、紙に何か書いていく。  
その紙を私に渡すとニツコリと笑顔を浮かべる。  
紙に視線を移すため息をはいく。

《次の中から選ひなさい。 1 私のものになる 2 私と簪ちゃん  
のものになる 3 死ぬ》

「…………… 1と2つてあまり変わりませんよね？ それと何ですか、  
『私のもにならないお兄ちゃんなんて死んじゃえ！』みたいな感  
じの選択肢は」

「正確には『私か私と簪ちゃんのものにならないで、他の女のもの  
になる天音ちゃんなんて死んじゃえ！』よ」

質が悪い、この選択肢……………さて、私に残された選択肢は……………。

1 逃げる

2 戦う

3 言う通りにする

4 死ぬ

…………… 1だな、逃げ切れるかわからないけど。

「…クスッ」

「どうしたの？ 天音ちゃん」

「楯無さん可愛いなって」

「えっ、そそそんなこといっても「隙あり！」って待ちなさい！」

逃亡開始時刻、午前8時30分

よいスタートをきれました、これも皆さんの応援のおかげです。  
これからはもう少し、状況を考えてから行動するようにします。

「だからアイアンクローを離してくださいいい！」

「廊下を走るな馬鹿者」

メキメキメキメキメキメキメキ

「今嫌な音した！　すごく嫌な音したよ！？　愛してる！　愛してるから横っ腹にパンチしないでください楯無さん！それと離してください織斑先生！」

「「うるさい！」」

パギヤ

~~~~~再生中です。しばらくお待ちください~~~~~

「ひつどいめにあつた……」

織斑先生のアイアンクローで頭をつぶされ、人だったものにされて再生し終わった天音はトボトボと自室に向かって歩いていった。

「災難だったね」

「……京、半分は君のせいだよ？」

「惚れさせようかと思って」

京はそういいながら両手を頬に添えて赤くなる。

どうしてだろうか？ 髪長い人より、短い人の方が魅力的に感じる。いや、長い人も十分魅力的なんだけどね。

「ん？」

「？」

そつえば夏休みに入ってから、京や楯無さん、簪にのほほんさんはよく遊びに来るけど、茜や美咲の姿を見てないなあ。

家に帰ってるのか？

「どうしたの？ 天音」

「なんでもないよ」

「ほら、どうしたの？」

「ハア……ハア…ハア」

「……ハア…強い……」

天音が何も考えずにIS学園でゴロゴロしてる時、茜と美咲は卯月楓（天音の母）と組み手をしていた。

「茜ちゃんそんなことじゃ、天音を守れないわよ？ 美咲、貴女もお兄ちゃんに守られっぱなしよ？」

「……うっ……」

二人は臨海学校で天音が重傷を負った時、自分の未熟さ…無力さを痛感し、専用機が貰えるくらい強くなろうとしていた。

ISの知識も大切だけど、二人ともそういうことは普通の人の5倍はできるから体を鍛えるといいつて楓に言われ、今にいたる。

「天音も『茜と美咲を守れるくらい強くなりたい』って言ってきたときは大変だったわ」

「えっ？ そんなことがあったんですか？」

休憩しているときに楓がつぶやいた言葉に二人とも気を取られた。あの脳天気でおちゃらけていて鈍感な天音が、そんなことを言っていたなんて信じられないのだろう。

「ええ。毎日毎朝毎晩、天音が組み手しろってきかなくて……夕飯作るの手伝ってもらっちゃったけどね」

「だからお兄ちゃん料理得意なんだ、しらなかった」

「天ちゃんも頑張ってたんだ……なら私だって」

二人のやる気がここにくる前以上になった。  
前が100だとするなら今は10000くらいだ。

「もう一戦やる？」

「もちろん！」

卯月家地下格闘場で熱いバトルが繰り広げられた。

## 22話「やって来ました」

窓をのぞくと雪が積もっていて真っ白になっていた。

その景色を独房からボーツと眺めている少年…卯月天音は両手に手錠をはめられ、両足には足枷がついていた。

IS学園の男子生徒の制服姿を除けば見事に囚人みたいな格好だった。

天音は思いつきり、息を吸い込むと大きな声で元気よくこう一言。

「ロシアに………やって来ましたああああ！」

その時の顔は写真にとって額縁に入れておきたいくらいの見事な笑顔だった。

「うるさいぞ！」

「へいへいへーい！」

どうして、こうなったのか……それは本人にもわからない。

気がついたら、ここにいて、気がついたらこんな格好をしていたのだから……何かあったのだとすると昨日の夜、私が寝た後だろう。ということだぶいていーあーるどうぞ！

「……すう……すう」

「……………」

寝ている天音に一人の女性が近寄る。

その女性が手に持っている紙に『卯月天音の生態データをロシア政府に提出せよ』と書かれていた。

天音が寝返りをうち、うつぶせになると天音の手に手錠をはめた。

天音をそのまま抱き上げ、連れ去っていく。

その女性の正体は……………」

「私だよん」

どこからともなくやって来て、人を押し倒すとは良い度胸ですなあ。それと胸おしつけないでください。

「……やつと…二人きりね…」

「しおらしくしないでください。なんでここに私がいるんですか？」

「ぶー、感動の再会なのに」

「楯無さん……人を誘拐しといて感動の再会とかありませんからね？  
茜や美咲にちゃんと話してからやっただんですよね？」

「ええ、ちゃんと天音ちゃんと旅行に行つて一線越えてくるつて」

この人何言つてんの？ 万が一そんなことがあつたら殺されちゃうよ。

きつとインド洋の真ん中に浮かんでるよ。

「まあ、寝るかな」

「寝かせないわよ？」

「じゃあだきしめQ！」

天音がその場に崩れ落ちる。

「……お姉ちゃんばっかり……ずるい」

「か、簪ちゃん。私も引けない時があるのよ、一夫多妻が認められてるならまだしも」

「……………」

「……………」

少しの間考え込む二人を尻目に、天音は簪が堂々としてきた所から抜け出そうとする。  
だが目の前にミサイルポッドが現れてぶつかると、

「（いったああ……………これ誰の？ ロシアには独房に不法投棄する人いるの？ あっ消えた。てことはISの装備だったのか……………ミサイルねえ…簪しかないよね……………でもポッドなんてあったっけ？）」

「いきましようか」

「……………」

二人は天音の拘束をとり、天音の手をひいて独房を出る。

「あのう……………関節を決めないで下さい。あと何処に向かっているのでしょうか？」

「IS委員会よ。ちょっと用事があるの……………すっつごく大事な！」

最後のほうを強調しながら、真剣な表情でそういつと簪も凄い勢いで頷いていた。

「そうなんですか」

「……うん！…大事な用事！」

そうかそうか、そんなに大事な用事なのか……二人とも苦労してるんだなあ、なら私に出来ることはただ一つ

「頑張つてね！」

ゴス×2

「これだから最近の若者は……」

お年寄りの方とすれ違い様にそんな声が聞こえた。

その頃、IS学園では……………

「お兄ちゃんただいまー！ 遊びに行こう！」

「天ちゃん、明日プールいかない？」

もぬけの殻になった部屋をみて、二人は不思議そうな顔をした。  
昔から天音のそばにいる人なら、誰でも不思議に思う。夏休みとい  
う至福の時期にもかかわらず、あの天音が、あのめんどくさがり  
の天音がいないのだから

「おかしいね」

「うん、何かあったみたいだね。ん？」

机の上に置いてあった髪を見る。  
どどん茜の表情が険しくなっていくのをみた美咲は、何が書いて  
あるのか覗いてみた。

『天音ちゃんと一線越える旅に出ます。探さないでください』

「あはあはははは」

「ふふふふふふふつふふん」

二人の背中に阿修羅が立っていたのを、たまたま通りかかった鈴が目撃して、一目散に何処かへ走り去って言ったのは本人達は知らない。

天音を奪還することしか頭にないお二人さんでした。（完）

「一夫多妻ですか？」

「そう、だって世界でISを使える男は織斑一夏と卯月天音だけなのよ？そのままこの二人の異例をみすみす老化で殺すの？」

「ですが、基本的に一夫一妻ということですので」

「私的には一夫多妻の権利を認めてあげれば、使える男が増えてデータを取れるから悪い話じゃないと思うわ」

「うーん。わかりました。上に掛け合って見ますが、あまり期待しないくださいね」

「ありがとうございます」

用事は終わり、振り返ると天音が見知らぬ人達と水風船野球していた。

なんで水風船で野球ができるのか教えてほしい。というか所々、残骸が落ちていた。

「必殺！ビッグチーズタルト！！」

「（ああ、たべたいのね）」

楯無はそう思いながら、周りをなんとなく見回したら簪が残骸を一人で拾っているのがみえた。

堪忍袋の緒が切れそうになりつつ、天音達に視線を移すと、本人達も気づいたみたいで残骸を拾い始めていた。

やっぱり色んなところで気遣いを忘れたり忘れなかったりするのね、天音ちゃんって。

「一番多く拾ったら、チーズタルトね」

「まかせろ！！！！」

天音ちゃんに言ったつもりが、スーツ姿の女の人も反応したけど、まあいいか。

なんか楽しそうに拾ってるし、簪ちゃんも楽しそうだし。

微笑みながらそれを見ていると、さっきまで話していた受付の人が走ってきた。

「神谷委員！もう会議の時間ですよ！？」  
かみや

「あらら。タイムリミット来ちゃったみたいね」

そっぴいながらスーツの人が身だしなみを調べて、天音のほうを向いた。

「じゃ、私はこれから会議だから。また遊びましょ」

「ほいほーい。またね」

フレンドリーに別れる二人を見て、少し羨ましくなった。  
いつの間にか隣にいる三人も、羨ましそうにジッとみていた。

「天ちゃんと一緒に遊ぶなんて羨ましい」

「お兄ちゃんに構って貰えるなんて羨ましい」

「天音、綺麗」

貴方達がそれを言いますか、クラスメイトやファンクラブの人達が聞いたらなんていうかわかったもんじゃない。  
そっぴえば、最近まひるが目立った動きをしていないのが気になる。

よからぬことを考えていなければいいんだけど、茜ちゃんや美咲ちゃん、京ちゃんがいるからある程度のことは平気だと思うけど。

「ではこれより会議を始める」

堅苦しい挨拶を聞きながら、私は今日はどんなくだらない議題なのかと思っていたのだが意外にも興味がある議題だった。

それは『織斑一夏と卯月天音に一夫多妻の権利を認めるか』というものだった。

私はさつき卯月君と遊んで、「この子って、きつともてるんだろっなあ」と思っただけだったから一夫多妻には大賛成だ。

と、いうかIS学園にいる歳が離れた妹がその子に惚れているのが一番の理由だ。

「神谷委員。何か意見はありますか？」

「私は一夫多妻でもいいとおもいますよ。貴方達はデータがほしいのでしょうか？ならあの子達の子供がIS使えたら今の倍、データが集まりますよ？とくに卯月天音の、ね」

「ふむ。珍しくやる気みたいだな」

「さっき表で卯月君と遊んでたからね」

「「「「!?」「」「」

委員のほとんどが驚いていた。まあ、彼と接触を試みた委員の下っ端がことごとく叩きのめされ、彼の人間性を判断出来るとしたらIS学園の必要最低限の個人情報だけ、これでも判断するにはたりない。

でも私は彼と接触しおまけに遊んだのだ、驚かれてもおかしくない。

「彼、元気で明るくてノリもいい子だったわよ。気遣いも出来てきつとモテモテよ?」

「なぜそれを早く言わなかった!??」

「怒らないでよ。聞かれなかったから言わなかった。貴方達が『誰と遊んでいた』って聞けば答えたわ」

「屁理屈を吐くな!」

「おえええええ」

「そついう意味じゃないわよ!」

いつものおふざけをしていると、『また始まった』的な目で見られたので話を元に戻す。

普段は気にしないけど、今回の議題は私の中で重要な議題だった。

「まあまあ、それより会議しないと怒られるわよ？ 優花」

「誰のせいよ！？ まったく……」

優花は咳ばらいをしてからいつもの堅苦しい口調にもどった。  
その様子を見てみると昔から変わってないなっと思ってしまう。

「異論はないみたいね。それでは一夫多妻を認めるということで決定する。今日はここまで、解散！」

優花の言葉で皆が席から立ち上がり、会議室から出ていく。  
私は優花に近寄って行った。

「今日は昔の優花を見て嬉しかったわ」

「姫子は変わらないわね、少しは取り繕ったらどうなのよ」

「私は無理かなあ……堅苦しいの苦手だし」

そっつい空を見上げる。

今日も……いや、今日はとてもいい天気だ。

## 23話「だんだんだんだん」

「なあ、一つ聞いていいか？天音」

「なんだい？出来の悪い生徒ゼロ式くん」

「最後のほうだけかつこいい名前をありがとう。でもな、題名は何かの嫌がらせなんじゃないかと思うんだ」

なにをいまさら

「おい」

「蘭ちゃーん！襲われるー！」

「なっ！バカそんなこといたら「ドギヤアアアン！」きたー  
ー！」

「お兄の・・・けだものー！」

ああ、すばらしいローリングゴバットだ・・・あんなのくらった  
ら死んじゃうよ。

弾はなんて不幸な少年なんだ・・・安らかに眠れ。

「勝手に殺すな！」

「最速リスポーンタイム更新つと」

メモメモ、下で蘭ちゃんといちゃついている一夏に後で報告だな。  
ちなみに今は、五反田食堂に来ています。昨日は楯無さんに振り回されたから、少し拗ねた感じに楯無さんを置いて部屋を出たら落ち込んでたね。  
しおらしい楯無さんが見たかったつてのは内緒。

「でもなんだつて女の格好してんだ？」

「いい質問だね、ゼロ式くん。これにはわけがあつてね」

「わけ？」

「この格好しているとナンパされるんだ。でも普通に男物でもナンパされるんだ。何着ても変わらないなら、思う存分勘違いさせてやろうと思つてね」

「相変わらず、ひどい奴だな。確か俺と喧嘩したときも汚い手でボコられた気がするんだが」

そつえば、あの時は弾がヤンチャやっていて嫌がつてんのにナン

パしてたから、割ってはいったんだっとな。

あの時は蘭ちゃんのお兄さんだとは思ってなかったから、蘭ちゃんを離れたとこにいさせただけ。『お兄ー！』って108マシンガンやってたのみで兄妹って知ったんだよね。

介抱してるときに一夏と鈴が来て、仲良くなったと。めでたしめでたし

「めでたくねえよ！お前が『蘭ちゃん、俺の骨はトイレに流して』って言わなかったら、あいつの必殺技くらわずにすんだってのに」

「本気でピーーされて、そのままピーーで拳句の果てにピーーされると思っただもん」

「安心しろ、そんなことする勇氣は今も昔もない」

だろうね。もしやってんのがばれたら蘭ちゃんの本気108マシンガン+ローリングソバットをくらうことになるだろうし、本人もまだ死にたくなさそうだし。

・・・ふう、チキンめ

「そういうお前は、あの二人を抑えられるようになったのか？」

「出来ると思う？暴走したらIS使っても難しいと思うよ？」

「大変だな、変態もIS学園にいたんだろ？」

「悪夢だったよ・・・最近は何もしてこないけど」

「なにしたんだ？」

「着崩れ写真あげた」

弾はIS学園のあるほうをむいて合掌していた。  
何してんの？ばかなの？

「天音さん、お兄、お昼できましたよ」

「はい。お母さん」

「なんだってえええええ！」

おっ弾のこの反応は・・・

「実は蘭ちゃんと一夏はもう・・・」

「くそっ！なんてこった・・・はっ！まさかもっ！」

ゆっくりと弾の問いに頷く。

「もう子供も・・・」

「そ、そんな」

「名前は蘭と一夏を混ぜて蘭夏にするって」

「ぐあああああ！」

「天音さん、そのバカは放っておいてお昼食べましょう」

「はい」

そのまま弾を置いて弾の部屋を出て行った。

大変だな、一夏に千冬さんに彼氏できたっていったら『赤飯炊かなきゃ！』っていうのに・・・いや、正確には言っただね。

後で嘘だっっていったら、少し拗ねたね。

「天音、今日は甘くしておいたぞ」

「ありがとう！いい婿になれるよ？」

「ははは、相手がいないからないな」

可哀想にあの五人と蘭ちゃん。がんばってるけど真正面から行かないと気づいてもらえないのが、恋する思春期の乙女にはキツイよね。がんばれーふぁいとー応援してるぞー

少し離れた電柱の影に良からぬものがいた。

「（…………私を置いて楽しいことしてるなんて、良い度胸ね…………天音ちゃん）」

「（誰？あの女…………天ちゃんに手を出すなら…………）」

「（ハアハア…………うっちゃん美しい…………こうしてはいられない！思ったら即実行！）」

邪悪なオーラを纏った3人の女性が各々勝手な解釈で動き出し、  
るのに本人が気づく余地もない。

本人は第一級平和ボケ人間なのだから。

「…………平和だ」

「…………平和だな」

「……平和ですね」

「……平和なのか？」

各々平和を口に出しているが、テレビの画面には弾が使ってるキャラが天音の使ってるキャラにフルボッコされてる所が映っていた。確かにこれを見て平和なんて言葉が出るのはおかしいのかもしれない……だけどそこはスル！。

「たしかに変態まひるがいるよりかは、ずっと平和だけど……少しは手加減してもらえないでしょうか？」

「何言ってるんだい？コントローラーが抜けてる君に手加減したところで何が変わるの？」

「あつ！ ホントに抜けてる！？汚いぞ天音！」

「「卑怯汚いは敗者の戯言！」」

「蘭が天音に毒されてる！？」

だんだん蘭ちゃんもわかってきてるのに、弾はダメだな。

私を相手にするときは、常に自分の周りに気をつけるのが常識。

「そ、そんな常識が出来ていたのか……」

「まあいいや。ほれ、かかってこい」

コントローラーのケーブルを繋ぎ直した弾に最後のチャンスをあげる。

弾も嬉しそうに顔を引き攣らせている。

「……残りHPが1で何しろと？」

「お兄わかんないの？」

「……ああ、何の嫌がらせかまったく」

「悪あがきしろってことじゃないか？」

蘭ちゃんは弾にため息を吐き、一夏は当たり前のように無茶をいう。弾は横目で天音が必殺技のコマンドを入力し始めたのを見た。

「一か八か！いくぜ五反田特攻隊！」

「な！？馬鹿な」

天音が出した必殺技をかわした弾は一気に距離を詰めて行った。

「……っていうと思った？」

「へ？」

弾が格闘ボタンを押そうとした瞬間に、天音が最終奥義を出して有り得ない数値のオーバーキルをした。

「……オーバーキルってせいぜい10が限度だと思ってたけど」

「30ってやれば行くもんだな」

『最終奥義って……コマンド馬鹿みたいに長くなかったか？』と弾は呟きながら、遠くを見はじめた。  
これは復活が遅れるな。

「（……この感じ、まひるか……。天音に言っとくか？いやでも楽しんでる最中に言つのも何か悪いからいいか）」

「どしたの？ 一夏」

「ん？ 何でもない」

「ふーん（……この感じ……楯無さんと茜が近くにいるのか。釘刺したりなかったのかな？）」

なぜこの時、天音がまひるの存在に気がつかなかったのかは謎である。

「ああ、何で誰でも出来ることが出来ないのに、誰も出来ないことが出来るんだ？」

「そこは……私だから」

「納得せざる得ないな」

さて、そろそろ頃合いか。

「ところでゼロ式くん。昨日午後6時に駅前を女の子とイチヤイチヤしていたね？」

「！？なぜそのことを！」

「そして蘭ちゃんが他の男の子に話し掛けられてるのを見て、少し不機嫌になったよね？」

「なぜそのことを！？」

「その後、何の罪もない蘭ちゃんにあたってたよね？」

「ぐう！」

「ふふふ、さっき蘭ちゃんに聞いたよ？」

「……………」

「……素晴らしいくらいのシスコンぶりですなあ、ゼロシスくん？」

「ぐあああああああああああああああ！……！」

ははは、面白い反応が返ってきたよ。やめられないねえ、ちなみに一夏にはきかないから。

あたかも当たり前のように振る舞うからね、強敵だ。

「くそ！ゼロ式とシスコンを混ぜられた！しかも恥ずかしいことも知られてるなんて……卑怯だぞ！」

「ほうほう、他の人にも広めていいと」

「すいませんでした。マジで勘弁してください」

「なんだって？」

「ごめんなさい天音様。どうかここはお咎め無しにしていたただけないでしょうか？」

「そうだねえ……蘭ちゃんに一夏の半裸写真を……」

「ダメだ！刺激が強すぎる！せめて笑顔から耐性をつけさせるべきだ！」

ほうほう、そうくるか……なら

「弾……じゃなくてゼロシスくんは蘭ちゃんと一夏がくつついてもいいと」

「ああ」

「本心？」

「…あ、あ」

嘘だな、仕方ない……最終手段だ。

「一夏と蘭ちゃんが二人キリで、一夏が蘭ちゃんの服を………そして肌と肌を………」

「そそそれくらい、いまどきのなんにはふふつつじゃないか！」

「お互いキスしあって、ピーーしたあとピーーして揚げ句の果てに子供が……」

「ぬわあああああ！誰が蘭をやるかあああああ！」

はい出ました。

ゼロシス  
五反田弾くんの本性

「何騒いでんだ？」

「それがねえ、弾が」

「一夏！お前に妹はやらんぞ！」

「えっ？　なんでそんな話になつてんだ？」

何がなんなのかわからない一夏に暴走中の弾、それを隣で笑いながら見ている天音を望遠鏡で見っていた3人は嫉妬に燃えていた。

その晩、天音が襲われたのはいうまでもない

## 24話「夏休み1」

ある朝、私はベッドから起き上がり研究室にむかった。

「博士、おはようございます」

「ああ、おはよう。例の細胞はどうだ？」

「ええ、特にこれといった変化はありません」

博士は顎に手を当てて、ジッと顕微鏡を覗き込む。

「……もしかしたら人に注入することで変化があるのかもしれないな」

「……！」

「だが、誰でも良いという訳ではない。この緑の細胞に赤の細胞を近づけると光だす……なら、適性がある者に近づけば反応するかもしれない」

「そんなまさか」

助手は信じられない様な顔をして、スライドガラスの上にある細胞

を凝視する。

「やってみなければわからない……常識や固定概念にとらわれたら、何も進歩しない……よし、行くか」

「どこにですか？」

「息子がいる学園だ。適性を持った人がいる確率が高い」

『まあ、息子は公園に行けっというそうだがな』といいながら、胸ポケットから写真を取り出して微笑みながら見ていた。

「……で関係ないのだが、息子が女の子を家に連れ込んだ時のムービーを妻に見せて貰ったんだが」

「よかったじゃないですか。息子さんの成長が見れて」

「ああ……よかったんだが、綺麗になっててな……百合みたいで」

助手は苦笑いしながら、話題をそらす。

「そろそろ行きませんか？博士」

「あ、ああ。そうだな」

そういいながら、写真を胸ポケットにしまい後片付けをして部屋を出た。  
助手は今だに行き場所を知らされてないことに疑問を持っていたが、さっきみたいに暗い話になるのは嫌だったので何も聞かなかった。

「……………にゅう…にゅう……………」

「……………プー……………プー……………」

ピピピピピピピピピピピピピピピピ!

「うーん……………てあ!」

バキッ

「……………ううん……………にゅう……………」

天音&ニヤンコ先生安らかに睡眠中、目覚まし時計安らかに永眠突入

ガチャ

「天音ちゃん起きてる?」

「……………にゅう……………にゅう……………」

「……………天音ちゃん。起きなさああああい!!」

「はうわ!」

天音起床、ニヤンコ先生安らかに睡眠中、目覚まし時計安らかに永眠。

「なんだ……………楯無さんか、びつくりさせないでくださいよ」

「何時までも寝てるからよ? 私とデートするって約束忘れたの?」

「ええ、忘れました。ていうかそんな約束してません」

「……………デートしてくれないと裸で街中出歩く」

「……………はあ、今日一緒に寝るじゃダメですか?」

「うーん。……………いいわよ」

いつもと変わらないやりとりをしていると、天音の携帯がなる。楯無さんが少し黒いオーラを出しているのはなんだろうか?

ピッ

「はいはい？」

『天音、父さんだ。今日IS学園に行くから迎えに来てくれ』

「いつ？」

『5分後、モノレールの駅で』

「急だね。わかったよ」

『よろしく頼むぞ』

通話を切ると楯無さんが詰め寄ってきた。

ちなみに簪は帰省中で茜と美咲とのほほんさんと虚さんは女の子だけの旅行に行ってるらしい。

正直、連れて行ってほしかったけどのほほんさんが『女の子には知られたくないことがいーぱいあるんだよ？（ニパニパ）』って言うてたから。

ていうか最近のほほんさんの出番が少ない気がするんだけど気のせいかな？

「ねえ、なんで他の女の子のこと考えてるのかな？」

「……（やばい、目が真っ黒になってるよ。なんとか弁解しないと）ああ！いや、母さんに嫁候補はいるのかって聞かれて」

「ふーん、で私は入ってないと……」

拗ねてる、明らかに怒ってる。  
ほっぺ膨らまさずに睨んでくるから、下手なこと言ったら死ぬ。  
南斗水○拳の餌食に……せめてクルーゼみたいに死闘を繰り広げて  
死にたかった。

「私のものにならない天音ちゃんなんて……」

「うう……………」

衝撃に備えて丸くなる。

……………あれ？

「（おかしいな、衝撃がこないぞ？ていうか迎えにいかなきゃ）」

「…………可愛い」

「…………ハアハア…………うっちゃん私の部屋いこっか」

「さらば」

改造ドアの…………えーっと何くんだけ？まあいいや、とにかく蹴り  
開けて猛ダッシュする。

織斑先生直伝、人間瞬時加速をやってみた。

「ふふ、逃ーがさーないよー！」

「ここで捕まえてハートをわしづかみ！」

「心臓つぶされそう……………ていうかあひるは帰れ！」

狂気に満ちた危険な変態<sup>あひる</sup>が、鞭と縄をもって全力で追い掛けて来る。なぜにリアル鬼ごっこしなければいけないんでしょうか？

「どう思いますか？　鈴とシャルとラウラに追われてるー夏さん」

「えー、やっぱりこれは……………乙女心は秋の空」

「……………？　なんで秋空？」

一夏はため息を吐きつつ、全力疾走しながら呆れた目で見てきた。なんでも『察しろ』的な感じがするんだけど

カカカカカ！

「一夏！お前ついてくんな！これは本気で死ぬ！」

「ラウラナイフ投げるな！シャルは今すぐショットガンをしまえ！」

「ええい！　こうなったら！」

急ブレーキをかけて追っ手の方を向くと、大きく息をすって甘ったるい声でこう一言

「これ以上、やなことをすると嫌いになっちゃうよーめっ!」

「」「」「」.....「」「」「」

よし、今のうちにモノレールにのって離脱だ!

天音を待つて約20分、一向に来そうな気配がない。  
隣の助手は私が息子にすっぱかされたんじゃないかと、チラチラこ  
つちを心配そうな目で見てくる。  
正直つらい。

「父さん!」

懐かしい声が聞こえ、振り返るとそこには息子（？）の姿があった。それはいい、いいんだけど

「……………なぜ男みたいな格好している」

「男だから仕方ないでしょ？」

「あー、なるほど」

息子の視線が鋭くなったのはきつと気のせいだ。

私はただ可愛い服を着ている息子も見てみたかったってわけじゃない。決して、ない。

モノレールに乗ると息子がどこかへ行っただと思っただけ、可愛い服を着て戻ってきた。

人の視線も息子に集まっていた……が本人は気づいてない。

「（博士！あの子ホントに男なんですか！？　女にしかみえませんよ？）」

「（生物学上…男なんだ。仕方ないだろ、私だって娘として育てたかった……）」

「なに話してるの？」

「ん、いや何でもない」

「ふーん」

そついいながら窓の外を眺め始める。

小さい頃から窓の外を見るのが好きだったな、何に惹かれてるのがわからない。

前に聞いたたら『なんか惹かれるんだよねえ』。それよりラーメンまだ？』って言われた。

本人も何でかわからないらしい。

「……あつ」

「（ビクッ）」

「そついえば、なんでIS学園に来ることになったの？」

「それはだな、これに適性がある人物を探しに来たんだ」

そついいながら他の人に見えないようにこつそりと緑色に光っている細胞が入った靴を少し開けて見せる。

……あれ？

「……ちよつとこの試験管に触ってくれないか？」

「ほいほい」

天音が試験管に触ると、緑色の細胞の光が強くなり、赤い細胞が光だした。

「……あのう、これって」

「いやいや、まさか……」

「ん？」

きつと何かの間違ったと信じてモノレールから降りる。  
だいたい想像はついていたが、やっぱりここは女性が多いな。すごく場違いな気がするんだが……。

天音の後に続いてドンドン進んでいくと、黒いスーツを来た凛々しい女性が近づいてきた。

「卯月、そちらは？」

「父と助手です。織斑先生」

織斑……まさか織斑千冬か！？ということは織斑一夏はこの人の弟か？

「…ならいい」

「警戒してるんですね」

「ああ、とある人物からどこぞのバカが動き出してるって聞いてな」

「ほうほう、あの人ですか……」

「お前も気をつけるんだぞ」

そっぴい残すと、奥に姿を消した。  
ちなみに細胞は反応しなかった。

「じゃいこっか」

「あ、ああ」

「天音ちゃんめ……どこに」

「先輩、僕達も手伝いますよ？一夏を捕まえるのを手伝ってくれた  
お礼です」

「あら、ありがとう。それとその屍と化した一夏君はちゃんと介抱するのよ？」

そういうと一夏君をチラッと見てシャルロットちゃんと鈴ちゃんは顔を赤くした。

ラウラちゃんは『嫁の介抱は夫である私がやるのは当たり前だ』と胸を張っている。

すごい自信だ、でも今は何としてもまひるより早く天音ちゃんを捕まえること。京ちゃんがないのも気になるし、急がないと。

「しかし、あの子の逃げ足の速さは天下一品ね」

「一夏より速かったわね」

「でもあれって……」

「素晴らしいあしばらいだった」

そう……天音ちゃんは『めっ！』って言い終わったと同時に走り始めて、それを追い掛けたら隣にいた一夏君をあしばらいして転ばせて逃げた。

あれはひどい……一夏君の断末魔は『天音の卑怯者ー！』だった。

「ん？『天音の裏切り者！』じゃなかったか？」

「ラウラそれは転ぶ直前だよ。『見捨てないでください天音様！』じゃなかった？」

「違うわよシャルロット。『地獄で待つてゐるぜ』よ」

なんか最後は妙にカッコイイ台詞だったけど、実際断末魔なんてどうでもいい。  
辺りを見回すと、天音ちゃんと男性2人が部屋に入っていくのが見えた。

「……ねえ、あれって」

「……いや、まさか」

「……えっ？大人の階段？」

「」「」「させない！」「」

いつの間にか隣にいたまひると京ちゃんが私と同時にまったく同じ言葉を発した。

お互いアイコンタクトをかわす

「（突撃する？）」

「（いえ、まずは天音ちゃんとあの人達との関係を知るところから

始めましょ」

「（あいさー）」

そついい天井裏に入る。

鈴ちゃん達が何あの人達的な目で見てたのはスルーしとく。

天音ちゃんの部屋の辺りにきたら板を少しずらすと、男の人が椅子に、天音ちゃんはベットに腰をかけていた。

『で？その試験管の中なんなの？』

『これは男でもISを使えるようにする細胞が入ってるんだ。だが副作用とかが心配で』

『それで適性がある人を探してここに来たと』

『ああ、まさか天音に反応するとは……』

『意外ですねえ……いろいろと』

ふむふむ、どうやらこの人達は天音ちゃんの知り合いらしい。

それに何処かの研究者みたいで、『男でもISが使えるようにする細胞』っていうのが気になる。

『だが、ホントにISを使えるようになるのかはわからない。実験してないからな』

『さすが父さん。いろいろと遅いね』

「「「!?!?」」」

父さん？あの人が……どうみても少し年上にしかみえない……じゃあ眼鏡かけてるあの人はお兄さん？

『博士は多忙なんだよ』

『へー、助手さんも大変ですね』

『僕は好きでやってるから平気だよ』

なるほど、眼鏡は助手か。

さて、天音ちゃんのお父様にアピールしておくかな。

『お茶です』

……ん？……おかしいな、この声は確か今一緒にいる人の声なのだけど。

辺りを見回してみる。

『うつちゃんの胸元……』といいながら息を荒げてるまひる、顔を赤くしながら下の様子を伺ってる簪ちゃん、そして私。

……いやまで、もう一度ちゃんと見よう。鼻血だしているまひる、顔を手で覆いながら指の隙間から下の様子を伺ってる簪ちゃん、そして私。

バレない様に小声で話し掛ける。

「簪ちゃん？いつからここに？」

「……やな電波受信した。……それと…クッキー食べてほしくて…」

「なるほど」

「……でもいいの？ 京ちゃんが天音の…か…彼女みたいに振る舞ってるよ？」

行くしかない。

覚悟しなさい……卯月天音！！

## 25話「夏休み2」

「お茶です」

「ああ、すまない」

「ごめんね」

「いやいや、なんで京いるのさ。どこから沸いてでたの？」

いきなりの京の登場にツツコミを入れながら、少しだけズレた天井の板の隙間をチラ見する。

水色が二つに黒が一つ、間違いなく楯無さんと簪とあひるだ。なにやってんだか

「……細かいこと気にしない」

「そうだぞ。で、許嫁の話なんだが……」

隣にいた助手がお茶をふいた。

無理もない……当初の目的がまったく違う。

「待て、なに許嫁って？初耳だよ？いきなり決まるもんなの？」

「そうだぞ」

「「違うでしょ！」」

助手と一緒にツツコミを入れてしまった。

情けない……ていうかなに？許嫁？ビックリだよ、茜や美咲に聞かれたら殺されるよ。

楯無さん達も危ないかもしれない。

「でだ。その娘は神威<sup>さつき</sup>皇というんだが」

「（こいつ無理しやがったな……しかし、はて？神威？どつかで聞いたことがあるような〜無いような〜）」

「IS委員会の委員の娘なんだ。一度会ってみないか？」

「（委員会の人の娘？そういえば、この前委員会の人と遊んだね……あの人なんていったっけ？）」

「その娘の母親も結構気さくな人で天音も仲良く出来ると思うんだ」

「（気さく……委員会……仲良く……野球？あつ！）あの人の娘さんか！？」

いきなり大きな声を上げたので驚いた表情の父親を視界の隅っこに起きながら、いつの間にか天井の板が元通りになっていたのを確認

した。

「知り合いなのか？」

「その娘さんは知らないけど、委員長さんだったら水風船野球やったよ」

「……あの人も言ってたな、水風船プロ野球があったらトップ狙えるって」

父さんがどこか遠い所を見つめるように窓の外を見はじめた。  
こうなると母さんしか元に戻せないが、まあいいだろう。

「写真とかないの？」

「僕に言われても……博士ありますか？」

「……………」

ベキヤ

「ももちろんあるぞ！？これだ」

父さんの左腕と引き換えに渡された写真を見ると、なんだか／＼。  
- : : < な感じだった。黒髪、ショート、小柄、妹的雰囲気……昔の誰かさんら二人に似てるなあ。

「『『覚悟しなさい』『』」

「少し待ちましょう。私も初耳なんで、ここはお咎めなしというところで」

いきなり目の前に現れた楯無さんとあひると京の制裁を回避するために、前回使ったような気がする手を使ってみた。

「『『問答無用！』『』」

「嫌いになりますよ？」

飛び掛かって来る三人を目を細めながらそういつと、空中で止まった。

すごいね、空中で止まるなんてさ。  
人間じゃないよ。

「さて、その娘に会いに行きましょうかね」

「私達はもう戻るが」

「ん？ いいけど、その細胞どうすんの？」

「ふむ。出来れば天音の体に取り込んで欲しいんだが何が起こるか

「いったただつきまーす」…待て待て!!」

卯月父は止めようとしたが天音が飲み干した後だった。  
手遅れだった。

「……大丈夫か？」

「案外普通の緑茶みたいな味がするんだね。特に何も変わってないよ?」

「な、ならいいんだ。何かあつたらすぐに言うんだぞ!」

「あいよー」

そういつて帰っていく父の背中を見ているとなんだか悲しくなってくる。

母さん……悪戯で父さんの背中に『愛』って書いた紙を張るのは如何なもんかと……。

「さつてと」

「いくの?」

「うん」

「行かせると思ってるの?」

「うん」

「……その自信はどこから？」

「だって……これからファンクラブの方で抱き枕が発売する時間でしょ？それに少し話すだけだし」

「むう」

楯無さんがほっぺを膨らました！  
チャーンズ！

「てい！」

ぷに

「ぷっ」

勝った！素晴らしい具合に口から空気が抜けてった。

私が触った方のほっぺを抑えながらエヘエへって笑ってるけど、色々大丈夫なの？

まあいいや。京とあひると簪はどうか行って、楯無さんはこんな状態だし。

行くかなー！

「…あの」

「はい、こちらテレビショッピング武田です」

「……えっと、神威臯です」

ん？ああ、ほんとだ。

「ごめんね。少しふざけてた。卯月天音です」

「少しお話いいですか？」

頷くと部屋まで案内された。  
確かに廊下でするような話じゃないだろう……楯無さんに聞かれた  
くないし。

「先日は私のお姉ちゃんがお世話になりました」

……はて？お姉ちゃん？

「お姉ちゃんって？」

「昨日電話で卯月くんと水風船野球したって聞いて」

ああ。なるへそ

「あれは母親じゃなくて歳が離れた姉だったのね」

「はい。それで伝言があるんです。『一夫多妻の権利を与えるがその代わりに妹よろしく』って言っていました」

「な、なるほど……でも嫌じゃない？」

皐は私の言葉で少し俯いてしまった。  
何か悪いことでもいったかな？

「……嫌じゃないです。ずっと……中2の時から好きだったから」

「ほえ？」

「ネネちゃん……好きだよ。ネネちゃんのためなら何でも出来る」

どこか懐かしい呼び方で呼ばれ、ベッドに押し倒されてベロチュウされる。

「（おかしいな……力が抜ける感じがしない。確か前にもあったよ  
うな……ないような……あっ！思い出した。中2の時の第2次全校攻  
防戦のときに屋上で空を眺めてた子だ）」

「ん……ん……んは」

舌が抜かれると、トローンとした目で見つめてきたので、頭を撫でる。

そこで問題が発生した。

「（あれ？おかしいな……なんで皋の上に跨がってるんだ？俺はそんな、どかなきゃっ……体が動かない……ていうか俺？おかしいぞ、一人称が変わってる！？俺俺俺……ダメだ。元に戻せない……）」

「……あ……ん……ああ！」

「（いやいや、俺何してんの！？胸もんじゃだめでしょ？普通に考えてさ、だめだ！だめなんだ俺の左手！服を脱がしてはいけない……それ以上は危険なんだああああ！）」

やつのことで暴走しかけた体の制御を取り替えて、勝手に動くのを止める。

結構あぶない……これは折檻は免れない。

「ふう。危ない危ない……なんでこんなになったんだ？」

「……ハア……ハア……」

おかしいな……ホントに今日の俺はおかしい。  
一人称なおらないし、妹属性は簪や蘭ちゃんです少しは耐性が出来るはずなんだけどなあ。

「……ネネちゃんなら……いいよ?」

「……………」

「あー、楽しかったねえ」

「お菓子たべよよ」

「のほほんさん食べすぎだよ?」

「でも三泊四日が一泊二日になるとはねえ……」

「仕方ないよ。あっちも苦労してるんだから」

そういいながら天音の部屋のドアを開けて中に入る。  
一日とは言え、何しでかしてるかわからないのが天音なのだ。  
ちなみに虚さんは生徒会の仕事をやりに行った。

「……すう……すう……」

「「「……」」」

目の前に見知らぬ誰かと添い寝してる天音<sup>バカ</sup>を発見。

「（さて、これから天ちゃんをどうしてやろうかなっ）」

「（責める？デレる？食べる？）」

「（私は〜食べるかなあ〜）」

「（悩ましい……天ちゃんはきっと昨日何も食べてないはず、何か食べさせないと）」

「（まずはそっちからだね）」

三人は天音に近寄ってほっぺを突きはじめ。

「天ちゃん、起きて」

「お兄ちゃん起きないと食べちゃっぞぞ?」

「私も〱私もゴロゴロする〱」

「ダメ!」

「あう〱」

中々起きない天音をどうにかしようと目覚まし時計を三個ならしてみた。

じりりりりり!

「……あとう……」

バキヤ

変な掛け声とともに目覚まし時計粉碎。

「……寝てるうっちゃん……いただきまーす!」

「!! ライトニングブラスター!!」

「あひいいいい!」

まあすごい。卯月母に鍛えてもらえば、手から電気出せるようになるんだあ。  
そつえば天ちゃん強いはずなのに、いつもは強いとは思えないのが不思議。

「……はあ……はあ、うつちゃんの愛は激しい……」

「これは愛じゃないからね？あひるはその変態を治してから出直して「グウー」……はあ」

天ちゃんは恥ずかしそうに両手で顔を覆ってしまった。ホントに何も食べてないみたいだ。

「天ちゃん、ご飯食べにいこつか。話はその後で」

「そつだよ？お兄ちゃん食べにいこつ！話はその後で」

「お茶漬けあるかな？話はその後で」

天ちゃんの顔が引き攣ってるけど、どうしたんだろ？別に殴……話するだけなのに、おかしな人。

さて、両サイドにいる茜と美咲から放たれる殺気を華麗に無視しつづけながら、折檻をどつくぐり抜けようか……………。

「今日は何が食べたい？」

「うーん。素麺かな」

「はい、食券」

「……………あ、ありがとう」

皆さん、連載ストップの危険があります。

主人公撲殺で打ち切り…………… 又は一夏を主人公にして続くか…………… 余命あと50分つてとこな。

空いてる席に座ると、さっきまでの殺気が嘘のように無くなる。

「……………さて、天ちゃん。一緒に寝てた子…………… 誰かな？」

すっごい満面の笑みを浮かべながら、聞いてほしくないことをポイントで聞いてくる。

ちなみに茜と美咲は麻婆豆腐だよ！

「ごまかさないでね、お兄ちゃん」

「……怒んない？」

「「当たり前でしょ？」」

「許嫁だつて」

サク

おかしいな、美咲の前にサバイバルナイフに包丁、日本刀、白鳳、カッター、ハサミ、鎌が現れた。  
茜はトンファーとヌンチャクとスタンガン、手榴弾に睡眠弾入りのマシンガン（実弾でないことを信じてる）を持っていた。

「まてまて！！昨日父さんに言われて会いに行ったら、流れで！」

「ドンナナガレダッタノカナ？」

「そ、それは……カクカクシカジカ」

「「……………」」

目がパッチリ、口あんぐり、ビクビクしてますって顔だね。うん

「のほほんさん逃げるよ！」

「ほーい。まって」

逃走劇の始まり始まりー

## 26話「夏休み3」

2

上の数字は気にしないでほしい、私の逃亡終了予想時間だからさ。  
今のほほんさんと段ボールに隠れてるのです。でかいのあったす  
かった

「どこいったのかな？お兄ちゃん」

「ハヤクデテコナイトカエレマセンヨ」

何ですかその小学校の教師みたいな台詞、てか出てったら何されん  
のさ。

むっ！あひるの気配！

「二人とも何してるの？」

「お兄ちゃん探してるの」

「また何かあったみたいね。茜ちゃん落ち着きなさい、まだうち  
ゃんはここらへんにいるはずよ？」

なんてこというんだ……ていうか普段のあひるって案外いいお姉さ  
んなんだね。  
いつも『うつちゃああああん！ラァァヴウウウ！』って飛び掛

かってくるから、普段も変態なんだと思ってた。

「（失礼ね。私はいたって普通よ）」

「（ここにいるの気づいてたの！？それと貴女は普通じゃない）」

「（ふふふ、そうかもしれないわね。あと狐のしっぽ出てるわよ？）」

「（のほんさーん！）」

「（てへへごめんごめん）」

いそいそと段ボールの中にしっぽをしまつのを確認してから、視線をあひるのいる辺りに戻す。  
見えないけどね

「（助けてあげようか？）」

「（まじですか！）」

「（ただしうつちゃんが大人しく私の部屋に来て言うことを聞くな  
らだけど）」

「（やっぱりか！そんなことしたらあひるを『お姉ちゃん』か『お  
姉様』って呼ぶくらい何かされるからむり！）」

「（それはそれで……なるほど…それで私が他の子と仲良くしてると、どこか寂しそうな顔で『お姉ちゃん……私だけ見て……』って言ってきて寄り添う……ハアハアうつちゃん最高……今から行こう！最高の輝かしき未来が待ってるよ！）」

「さらば！」

段ボールから抜け出して全力疾走。  
のほほんさん？そんなこと気にしてる場合じゃない！

「あつちゃんはやいねえ！すごいすごい！」

となりにのほほんさん

心配する必要もなかったみたいです。

個人的には普段ちょースローペースの貴女が私について来てるのが  
凄いと思うんですけど……。

「まってよーうつちゃん！」

「お兄ちゃんいた！茜ちゃん！！！」

「逃がさない！」

「逃がしてよー！」

追っ手3人組は身体能力がバカみたいに高いから質が悪いです。  
誰か助けてくれないかな？

「うおおおお！」

「ん？一夏どうしたの？」

いつの間にか隣を走ってる一夏に声をかけると、すごく嫌そうな顔をされた。

いや、この前のは悪かったって…

「一夏も罪な男だねえ」

「お前に言われたくない………というか今日は天音が犠牲になる番だよな？」

目が本気だ。

この前のことを根にもっとるよ………どうしょ、泣いちゃう。  
嘘泣きしかしたことないけどね！

「………覚悟はいいか？」

「したら泣くよ？大声で泣いてあひるに泣きつくよ？」

「………うっ！」

「それで束さんとやらに頼み込んで性転換薬作って貰って、それを飲んでから裸でベッドに潜り込むよ？そのあと箒とラウラとシャルを一夏の部屋に呼ぶよ？」

「悪かった、俺が悪かったからやめてくれ！まだ死にたくない！」

だろ？俺も死にたくない。

今の茜達は危険だ、拷問や調教とかで全て吐かせる気にいるよ。きつと

「天ちゃん待ちなさい！腕一本で許してあげるから！」

「お兄ちゃんデート一回で許してあげる！」

「うつちゃんの初めてで許してあげる！」

ダメだ……美咲のは普通だけど、後の二人がダメだ！  
くそ、一夏を犠牲にしてやるか？

「（ちらっ）」

「天音アデュー！」

ガッ ドサ

「夏をチラ見したら足ばらいされて転ぶ。」

「「「ナイス!」」」

「いいいいちいいああああ!」

「悪いな、この前の自分を恨んでくれ」

そういつて走り去っていく一夏の背中を見つめながら、危険な人たちに捕まった。

「ふふふ、うっちゃんゲット!」

「全部話してもらおうよ?天ちゃん」

「お兄ちゃん足はやいね!」

「やめちゅ」

やべ、かんだ。

「可愛い、可愛いよお」

「いや、放してくたちゃ」

やべ、またかんだ。

「もらいつ！」

「あつ！！！」

あひるは私を抱えて猛ダッシュ開始。  
茜や美咲も追いかけてきているが、どんどん差をつけられている。  
こりゃだめだな。覚悟をきめないと

「天ちゃん（お兄ちゃん）カムバアック！」

さて、あの二人の叫びを聞いてどれくらいになっただろうか？  
目の前では変な液体を作ってるあひるがいるんですが……逃げよう  
にも拘束されてるから逃げれないし。

「ふふふ……これでうつちゃんも私に……ふふふふふ」

すっごい危険なのです。

天音電波発信！

「さあ、うつちゃん。これを飲んで……別に注射でもいいけど」

「どっちにしろ私に選択の余地はないんだね。なら！」

あひるが手に持っていたコップをけりあげて、踵であひるの口に押し込む。

ゴクゴクって聞こえるから飲んでるね、うん。

「……………？なんであひる胸が縮んだの？」

「うつちゃん……これは性転換薬なの」

「ええええええええ！じゃいまは男！？」

「そうなります」

大問題だ。

外見は変わらないけど、色々変わったみたいです。  
そんな薬の作り方をどこで学んだんだろうね。

「といつことづつちゃんも」

ちく

「まてまて早まるな！」

どんどん危険な液体が体の中に入ってくる。  
意外にあひるの寝技はなかなか手強い。

「はい、おしまい。これでうつちゃんはもう……ふふふ」

「……………特に変化なし」

うん、変わったところはない。  
むしろ髪の毛が伸びた気がするけど、きつと気のせいだね。  
あれ？胸が苦しいなあ、疲れがたまってるのかな？

「うつちゃんビューティフォーー！！」

ドギヤアアアン！

「へぶっ！」

ぶっ飛んできたドアにぶつかって倒れるあひるの顔は、どこか幸せそうだった。

というかどうか……。――

「天音力ちゃん電波受信して参上！」

「危険察知した元ファンクラブ会長参上！」

「天音！イカあぶれ」

おっ、久々のニャンコ先生の登場だ。

そういえば確か、昨日の夜『私の出番が少ない！怪しからん！文句言ってきてやる！』っていったっけ？ホントにいつてきたんだ。

「……ガクッ」

「楯無さん、鈴どうして膝をつくの！？」

「……天音ちゃんを守れなかった」

「……天音、ごめんね。私がもっとしっかりしてれば」

「……ん？……」

久しぶりに登場したニャンコ先生と一緒に訳のわからなさそうな顔をした。

鈴が『自分の状況を見てみなさい』ってジェスチャーで伝えてきたので見てみる。

ベッドに入ってて、シートで体を隠してる。あひるは下着姿、変な液体と道具が散らばっている……ということは？

「……………何がしたいの？」

「天音ちゃんが犯されちゃった……」

「どうしてそうなったの！？」

「「まだ気づかないの！？っておんなああああ！！！」」

驚きのあまり立ち上がってしまったので、ばれてしまった。あれ？なんであひる元に帰ってんの？

「……………ふふふ、元に戻る薬くらいあるわ」

「お薬ちよーだい、おねえちゃん」

「私が飲んだので最後」

「……………はい？」

「あの薬1つしかないの」

捕獲目標、篠ノ之箒（束呼び出し機）。

「いくぞ私！全ては平穏なる日常のために！」

瞬時に私服に着替えて飛び出す。

服がどこから湧いたかって？そりゃ空間捻曲げてとったんだよ、当たり前でしょ？

走ること30秒で箒の部屋についた。  
もちろんドアを突き破って侵入。

「箒！箒さん！箒様！どうか、どうかぶざまな私に救いの手を！」

「落ち着け。どうしたというんだ？」

～～説明中～～

「なるほど。それで姉さんに元に戻る薬が何か作ってほしいんだな」

「うん」

「一応聞いてみる。というか姉さんならなんとかなる気がしてやまない……」

「ここであの人の異常っぷりが役に立つ」

シミジミと箒と一緒に遠いどこかをみつめた。

しかし暑いなあ……こんなんじゃないやうよ……楯無さんに頼んで涼しくしてもらうか、のほほんさんと一緒にクーラー効かせてゴロゴロするか。

個人的には寝てたい。動きたくない。

「もう少し、運動でもしたらどうだ？ 気持ちいいぞ？」

「嘘だ!!」

「そこまで否定しなくても……。よし、剣道やるぞ！」

「待った！ なぜそこで箒の得意分野の剣道なんだい？」

「私は剣にしか脳がないからな」

「うそつけ、料理上手いじゃないか。一夏が自慢してたぞ」

あら、顔が赤くなった。

ちなみにこれを他の人にやったら、シャル「え、えへへへ。そつかあゝ」 ラウラ「ふん、当然だ！」 セシリア「お、お口に

あつてよかったですわ！もつといっぱいつくらないといけないですね。」

鈴 「あ、あ、あ、あんたはあああ！」こんなだった。

「さて、剣道やるのはいいけどそこまでいけるかな？」

「どういう意味だ？」

私は立ち上がり、ドアを開けるとさっきの3人と茜&美咲がいた。さて、普通ならここで折檻を受けてから一夏に復讐しにいくというパターンがデエフォルトなのだ

「ふふふ、不純異性交遊じゃなくなった今、手加減しなくてもいいよね」

「これからはいつも以上に過激でいいよね？」

「いろんなおもちゃで気持ち良くなる？」

「私から離れられなくしてあげる」

「天音逃げた方がいいわよ？」

鈴さん……どうやってにげると？

26話「夏休み3」(後書き)

そにつくでもむりだよ

27話「いつちかぁん」

もぞもぞ

「……すう……すう」

ふふふ、一夏め。この前はよくもやってくれたなあ……覚悟してもらおう。

ベッドに赤い液体をたらし、服を脱がして自分も服を脱ぐ。ベッドに潜り込んでラウラ、シャル、セシリアに連絡する。もちろん内容は『たすけ』だ。

「ふふふ、いい断末魔こえで鳴いてくれよ？」

「んん？あつたかい」

「あつ起こしちゃった？」

「ん？天音なんで「ドゴオオオオオン！」」

ど派手に登場してきた人達をみて、顔を真っ青にして見つめてくる一夏に笑顔を向ける。

「あの、天音さん？」

「私の初めてを取ったんだから責任とってね。アナタ」

そっぴいなから赤い液体をたらしたところを指差す。

すると三人の殺意が一気に上がり、一人は冷や汗と助けを求める視線を送られてくるが、顔を赤くしながらお腹をさする。

「あでゅー、一夏」

「ああああまああねええ！！！！！！」

服を手に取り、部屋から脱出する。中からはいろんな音が聞こえるけど知らない。

私を生贄にして生き残ろうとした罰だ！ふははははは！！

あつ、弾に報告しとこ

服を着ながら携帯で弾に報告していると何かが落ちて割れる音がした。

「ねえ、その格好でどこ行ってたの？」

「……楯無さん、ええつとその」

「ねえ、一夏くんの部屋から変な喘ぎ声が聞こえるんだけど」

「……ええつと、そのー」

「せっかく薬持ってきたのに」

「そこに落ちてるのって薬！？何してんのアンタ！」

「ねえ、なにしたの？」

「……ちよつとイタズラを……えへっ」

バキヤ

「ぐがあああああ！久しぶりの痛みだおお！」

ゲキン

「どうしてそういうことするかなあ？初めてあげちゃうなんて」

ゴキン

「にゃあああああ！あげてにゃい！あげてにゃせん！」

「いけない子にはお仕置き……性的にも」

ベキン

「おおおおおお！」

今日は朝だけで左肩の関節が2回外されました。  
辛い朝だ。

「あの……その男のピーにすぐにててウィンウィン動いてるそれをどうするつもりですか？」

「いれるのよ？天音ちゃんのなかに」

「やめて！せめて初めては本物で！ていうか楯無さん毎日それで……」

「大丈夫…私は毎日お尻だから」

「どこが大丈夫なのかわからない！」

毎日そんなもんお尻に入れてちゃ変になるよ！  
ていうかそろそろ下ネタやめようよ。

「いくよ？」

「えっ？だめだめだめー！」

ぬ

「あは くわえちゃって」

「あ、ん！中でうごいて……………あああ」

「はあ……………はあ……………」

「（ああんもう！可愛いよ……………これを毎日少しずつレベルあげてけば私のものにならないかな？でも天音ちゃん初めてだったなあ）」

楯無は天音を抱きしめると、あることに気がついた。  
軽すぎる……………いくらねっころがつていても枕より軽いのは有り得ない。

「まさか」

楯無はカッターで天音の頬を軽く切ると、スウッと消えた。  
これは確か後をつけていたところに一度やられたことがある卯月流残像である。

「やられたー!!!」

「ふう……あんなもんいれるとは……ムズムズする」

天音は歩きづらそうに少し内股気味で寮の廊下歩いていた。

一夏から『責任取る』ってメールきたけど、『あれ冗談だから』って返した。

信じんなよ一夏弾からは『一夏を殺らねば明日はない』って言うてたけどどっいう意味だろうね？

「お兄ちゃんお兄ちゃん、お茶しない？」

「ん？おお妹よ。いいよ」

「やったー！いいこ」

手を引かれて美咲の部屋に入ると茜がミルクティーを入れて待っていた。

もしかして断ってたら、強引にでもここに連れてこられたの？

「さて天ちゃん……どこで何してたのかな？」

「ええつと一夏の部屋に遊びに……」（ドキドキ）

「へえ……お兄ちゃん朝早く脱ぎやすい服着て遊びに……」

「せめてラフな服っていつて！」

楯無さんといい、この二人といい、なんでこうも私のプライベートを知りつくしてるんだらう……。

男に戻る薬台なしにされたし……もう一回束さんとやらに頼まない  
と……。

「天音、束とだったら束チャンネルで通信できるぞ？」

「ニヤンコ先生……それを早く言ってよ」

「はやく白状した方がいいよ？臯ちゃんのこともあるんだし……ね

「？」

「そうだよ？お兄ちゃんの初めてを他の誰かにあげちゃうなんて……」

「違う！むしろ初めてを取ったことを咎められる所だよここは！」

いろいろ間違っている二人をどうにか落ち着かせて、お茶を始める。最近のほんさんが忙しそうにしてるけど、大丈夫かすごく心配だ……仕事増やしてないといいけど。

「そういえばお兄ちゃんは今生徒会副会長なのにここでノンビリしてていいの？」

「ふふふ、天音特権があるのだよ」

そう、虚さんに「本音とお嬢様は天音さんがいると、いつもの5倍仕事しなくなるのでノンビリしてていいですよ？むしろしてください」と言われたのだ。

遠回しの戦力外通告&厄介払いをされて心が壊れそうになったが、そのあと虚さんに微笑みかけられて撫でられたので即回復した。

だってねえ、お堅い雰囲気の人が優しくしてくれたんだよ？回復どころかライフゲージ突き破ったよ。

「イロイロあるんだね……。そうそう、のほんさんが『あっちゃんエネルギーが足りないよー！』って泣きそうになってたよ？」

「じゃあ茜が抱きしめてあげて、たいていの人間はそれで全てが解決するから」

「……天ちゃん以外の人は抱きしめたくないな……」

ちよつとムスツとしたまま小声で言った言葉は、しっかりと天音の耳に入っていた。

ミルクティーに砂糖を3本いれながらジツと茜を見ながら口を開く。

「どうして？」

「えっ！？聞こえてたの？」

「まあねえ」

「うー、……私は天ちゃんのモノだから」

「茜は茜のものでしょ？」

「……」

なぜでしょうか？ 今にも殺されそうな感じで睨まれてるんだけど…… 本気で視殺されそうなんだけど。ここは謝つとくのが1番かな？

「ええつとごめん」

「……じゃあさ、私のこと……貰ってよ」  
「私も!!」

「もらうつて? チョコ?」

「「お嫁に貰って!!」」  
「一夫多妻OKって言われてるから、二人とも嫁に出来ないことはないけど……」

「それって私と美咲のどちらかが選ばれないこともなく、二人とも幸せになれるという……」

「最高な選択肢が存在してたなんて……お兄ちゃん何やったの?」  
「楯無さんが何かしてたのは知ってるけど、私は特に何もしてないよ?」

これは本当だ、普通に委員さんと水風船野球してただけだし、問題を起こしたわけでもなくただその敷地を散らかしたただだよ?  
そのあと簪と一緒に片付けたし、問題ないよね?

「いろいろ問題あるんだけど……ニャンコ先生ハイ」

茜はなんか複雑そうな顔をしながらニャンコ先生にイ力をあげる。  
それを見ると、ニャンコ先生重くなるのかなあって思ってしまう

自分がいるわけで、できれば餌付けしないでほしい。

「お兄ちゃん、野球やろう。織斑くんとか誘って……」

「めんどくさいけど、少しは体動かさないとね。わかったよ」

茜と美咲がアイコンタクトしてから何か奇妙な笑みを浮かべてるのを見て取り返しのつかないことをしたような気がしてやまなかった。しかもなぜこのタイミングで野球なのか聞きたいけど聞けない……聞いたらダメだよ？ってプレッシャーを感じる。

「じゃ！私と茜ちゃんが誘つとくから！！」

「天ちゃんは寝てていいよ！？明日やるからね！」

「えっあっうん」

なんだかわからないけど次回は野球みたいです（笑）

## 28話「ベイスボール」

待ちに待ったってなわけでもないけど、約束の日がきましたって言うても1日しかたってないけどね。

あれだよ……野球ってさ、こうもつと楽しいって感じとかさ、負けないぞって感じでやるスポーツだよな？  
遊びならなおさらそんな感じだよな？

「ふふふ、負けない……負けないよ？」

「私達も負けないわよ？」

いやいや、殺気大サーブスしながら言う言葉じゃないし、ていうかみんな気合い入りすぎでしょ？

どこからユニフォームとってきたの？配ってんの？

「さあ始めましょう……ベイスボールを」

### ルール説明

特に普通の野球と何ら変わりなし。

楯無さんチームが一人足りないから私だけ両方の攻撃のときしか役に立てないという事実。

要するに守備なしで茜チームと楯無さんチームの攻撃だけ参加とい

うことらしい。

しかも優勝商品があるらしい

『優勝商品はロイヤルミルクティー50本!!……………』

最後の方はなんて書いてあるのか見えなくてわからないけど、まあ勝てばいいわけだ。

ということでミーティング、茜チームは美咲と皐と一夏と箒、鈴、セシリア、ラウラ、シャル、のほほんさんというメンバー、ちなみに先攻だ。

「じゃあ天ちゃん4番ね」

「私は1番がいいなあ、茜ちゃんとお兄ちゃんをちゃんと打席に立たせてあげるからね!」

「ちょっとまってよ!私は1番がいい!トップバッタープリーズ!」

「うるさい!」

怒られました。

かなり理不尽だと思うんだけど気のせいかな?気のせいだよね?うん、そうだと信じようではないか!

私って心広いなあ……。

「じゃあ一夏は2番で3番が茜ね。私達は適当に入りましょ」

「了解」

「ちょっとまって！俺の意見は？俺の意見は無視なの！？」

「うるさい！」

ふはは、怒られてやんのー！

「お前もだろ！っていうか制服でやるのか？」

「私の制服は動きやすいように、超ショパンニーソノースリーブの3点セットだ！（束さんに新調してもらったからイロイロ心配）」

「確かに動きやすそうだな……アームウォーマーは？」

「暑いからつけてない。一夏も露出あげてみたら？」

「そうだな……でもこのままでいいかなって、寮とかクーラー聞い  
てて冷えるし」

「なるへそね」

一夏もいろいろ考えてるんだなあ……あの頃は何も考えずにはっ  
ちやけてたのに。

さてと、もうすぐ始まるけどこの体でどれだけ動けるかが問題だよ

ね。

束さん……はやく元に戻る薬作って！

「ぶれいぼる〜！」

のほほんさんののほほんとした声で場の空気がのほほんとして試合開始。

1 番美咲、私の知ってる美咲の実力は皆無。  
ちなみにピッチャー楯無さん

「いくわよ美咲ちゃん！」

「かつ飛ばすよ！ たつちゃん」

楯無さんがボールをなげると、そのボールはいびつな動きをしていた。

美咲は苦笑い。

茜達も苦笑い。

キン！

「もう！ ボールのバカ！！」

内野ゴロになったボールに文句をいいながら、一塁を駆け抜けた。

相変わらず素晴らしい駿足でいらっしやることで……。  
お兄さんびつくりで驚きで誇りに思ってるよ妹よ。

「おっしや！いつてくる！」

「期待してないけどいつてこい」

「ひどくないか!？」

さすがに一夏だからな。

期待するしないの問題ではなく……………

キン

必ず打つて知ってるしね……………私の邪ジャイロボールを打ったの  
って一夏だけだし。

「よし！行ってくるよ天ちゃん」

「気をつけてね!！」

「天ちゃん。なんで相手の方を見ていうのかな？」

だってさあ……………ピッチャー殺しの茜じゃん？下手したら死人でるよ？

キン！

「ひゃあ！」

ボールが楯無の顔のすぐ横を通ったのを確認。  
危なかった……茜も苦笑いしてるから今回もわざとじゃないのか…  
質が悪い。

「次天音だよ？」

「そうだったねえ。ITTEKIMASUKA」

「僕はなんだか怖いんだけど!？」

バッテリーボックスに立って楯無さんの方を見る。  
キャッチャーの虚さんは無表情だけど、楯無さんは何故か燃えていた。  
怖い怖い

「くられ！必殺、サラシキング！」

楯無さんから繰り出された必殺技はジャイロボールが複数に分身するという、どれが本物なのかわからないものだった。  
茜ベンチの方は「」「」「チートだろ!」「」「」という声が聞こえ、楯無ベンチからは「かった!」という声が聞こえた。

「……ふふふ甘い甘い」

キヤイイイイン！

「……」

「ホ、ホームラン！！」

審判の声が静まり返ったグラウンドに響く。

ほぼ同時に全てのボールを打ったから無理もないが茜、美咲、一夏、鈴はまったく驚いてないどころか気にしてない確か中学のときにあいつらの前で野球部全員（50人くらいかな？）が投げてきたボールを全て打ったことがあったねえ。

「くっ！天音ちゃんやるわね！」

「反射神経と導体視力と勘はずば抜けてるんでね……じゃんけんでは負けなしです！」

まあホントは神谷だったか神威だったか知らないけど、委員さんにリベンジマッチするために睡眠学習してたんだけどね。

グルッと一周してベンチに戻ると、篤達が詰め寄ってきた。  
なぜかメロンパンを持って

「さて、どういうこと？なんであんな球打てるのかな？僕は不思議

でならないんだけど」

「シャル…のお姉さん、私は日頃鍛えてるんですよ。……もちろんベッドの上で」

「お姉さんじゃないよ！？お姉さんいないよ！？」

詰め寄ってきた人達からメロンパンを搔つ攫つて、頬張りながらそういうとセシリアの顔が赤くなった。

ナニカンガエテルノカナ？

知りたいな…知りたいな、暴露してくんないかな？

「一夏と……ね」

「……一夏あ！」「……」

「ん？なんだなんだ！？なんで箒達はこんなにギヤアアアアアア  
！！」

悪いね、一夏。この世は弱肉強食だと思うんだけど、これって私の  
思い違いかな？

審判がチェンジをつけていたので、今度は楯無ベンチに行きブリー  
フィングに参加する。

「と、いうわけで天音ちゃん4番ね」

「楯無さんのカッコイイ姿見たいで」と思ったんだけど、やっぱり私が4番で天音ちゃんは3番ね」

この人もうちよつと扱いづらい人じゃなかったっけ？  
最近やたら扱いやすいというかなんと言うか。

「てい」

モムム

「なにやってっ！……ん！……京……！」

後ろから抱き着いてきた京に胸を揉まれた。

それを見た楯無さんがチャンスといわんばかりに目を閉じて顔を近づけてきた。

しかし私と楯無さんの顔の間を何かが通りすぎて壁に減り込む音がした。

「い、ここのつつつぎはああとでに！」

「そそそつだね！かかったたらねね！」

大慌てで私から離れていった楯無さん&京は冷や汗をドツとかいていた。

楯無さんは2年の活発そうな女子に指をさした。

「あなた1番ね」

「殺す気ですか！？お姉様！相手のピッチャーの立花さんを見てくださいよ、『殺す、絶対殺す』って目ですよ！？」

「大丈夫……私じゃないから」

「それでも生徒会長か！？生徒の長の言うことじゃないよ！」

「私行ってきますね」

「「えっ？ あっ……ん？」」

楯無さんと2年の先輩の口論は長引きそうだったので決められた順番無視してトップバッターとしてバッターボックスに入る。

1塁に美咲がいるのが少し厄介だね。

一夏はセンター、鈴はショートか……左の私対策かな？怪我人ですよ？

「茜、さっきのすごく怖かった」

「ごめんね……でもああするしかなかったの」

「あれが私の胸の先端に当たってたらいってたよ？そしたらあの二人に連れられて〇〇〇されてたかも……」

「今度は刀にしとく！」

「そういう問題じゃない！というかやめろよ！あれも刀も当たったら死ぬよ！」

「いくよ！必殺 フラッシュ！」

「いきなり！？」

スパアアアン！

「ストライク！」

途中までただの剛速球だったけど、いきなり消えて気がついたら通りすぎてるってなに？

誰かわかりやすく説明してくれないかな？

ベンチにいる楯無に目を向けたら笑顔を返され、京に目を向けると投げキッスを飛ばされた。

「……ふう、ちょっと早いけどやるかな」

「今日こそ天ちゃんを打ち取る！」

茜がボールをなげる。

ボールが消えた瞬間に私が1番苦手なコースにバットをふる狙いは一夏の頭上3メートルだ。

キイン

「そんな！」

「茜ちゃんの必殺技でもダメだなんて……」

狙い通り一夏の頭上3メートルを通過していったボールは、箒の目の前でバウンドした。

なかなか運が悪い、飛びすぎたねこれ。しかたないから2塁で止まった。

「くっ！もう少し早く走っていれば……」

「気にするな、箒。天音はスポーツ万能で卑怯だからノーバンで取っても石で弾かれて落とされるぞ？」

「その解釈のしかたはどうかと思うよ？一夏くん」

「事実だろ？」

「お前にしたことを他人にやるとは限らないぞ？」

なんだか箒は複雑そうな顔をしてポジションに戻っていった。さて盗塁しますかな……。

というわけで最終回

100対97の満塁でワンアウト、バッター茜の最高の状態。  
私に回って来ることはもうないね、決めてくれるって信じてる。

「サラシキング！」

「このっ！」

キン

「ファール！」

なかなか終わらないこの打席、体力的に来てるのかな？

茜も美咲も持久力なかったもんね、もうすこしががんばれ！あつ、ちなみに負けてる方だからね？

「てあ！」

「このっ！」

バスン

「アウト！」

あらら、回って来ちゃった……めんどくさいなあ、そろそろ筋肉痛の予感がしてきたよ？  
まあ茜だから許す。一夏だったら許さん！

「天ちゃんごめんね、任せたよ」

「ほーい」

すれ違いざまに頭を軽く撫でてあげる。

こうすると美咲の身体能力がすぐ上がる、そのあと「なでてなでて！」っていつてくるけど、撫でるくらいお安い御用だ。  
可愛い妹と幼なじみに恵まれてよかったわ…

「さて、天音ちゃん。これで終わりなのだけれども……勝つのは私達よ！」

「かかってきんしゃい。凄まじい剛球を返してあげよう」

少し睨み合うとベンチから歓声が上がる。

皆さんはいろいろ期待してるみたいだけど、答える気はないよ？

「天ちゃん！打ったら今度お茶しよ！」

「お兄ちゃん！打ったら私と映画鑑賞24時やる！」

「ネネちゃん打ったらまた………ね？」

何やら嫌な声援を送られてるけど気のせいだよな？

皋さんが言ってるのってこの前のあれじゃないよね？

茜と美咲にバレたら襲われるからあまり思い出したくなかったんだけど、やばいな……勝たなくちゃ……勝ってごまかさなきゃ……。

「待って！皋は一体何をどういう意味で言ってるの！？ダメだよ、不純異性交遊は……僕だってまだ！」

「………まだ？」

「………？………っ！」

シャルの頭から勢いよくボフンと音を立てて湯気が出ただけど、大丈夫かな？

総合病院につれてかなきゃ行けないね。ん？なんで総合病院なのか

って？

どこが悪いのかわからないからだよ、こっちは医学の知識はないからね。

「スキアリー！」

「あつ汚ねえ！」

キイーン

「ファール！」

危ない危ない、ていうかファールだからあまり変わらないけど、見送りよりは多少相手にプレッシャーを与えられるはず。

さてさて、歓声は気にせずに集中しないと打てないんだよねー困った困った。

いやしかし、打てないことはないよ？でもピッチャー返しになって楯無さんの綺麗な顔に傷でもついたら責任とらないといけないしね？  
そうなると簪が義妹になるのか……美咲のポジションとかぶるなあ……。

「天音ー！がんばってー！」

「会長がんばってー！天音ちゃんもつとね！」

「君達は今楯無さんを応援すべきときなのわかってるの！？」

「「「もちろん！だからがんばって！」「」「」」

「全然わかってないじゃないか!!」

「すきあり! ジャイロフオーク」

キャアイイイン

「ファール!」

危ない……球種いつてくれなかったら空ぶった。

わかったぞ……これは私の集中させないための作戦か……だがしかし、ここでめげないぞ!

私の集中力を見せてあげよう………ミルクティーのために!!

「これで最後……楯無流四面球村雨!!」

ボールが分裂したと思ったら消えた。

普通はもう諦めるが私は負けるわけには行かない……あれ? 両チームのバッターとして守備をしてない私はどっちが勝っても勝ちで、どっちが負けても負け……。

ということとはここで3振取られても痛くも痒くもないということにならないでしょうか?

でも美咲と茜に敗北を味わわせる私は私として生きて行けるのかな? いや出来るわけない……私がここにいる理由の一つはあいつらだ。ずっと笑ってられる世界……場所……空間を作る。

あのときそう誓ったじゃないか!

「これが最後だ！このやるー！」  
キャアイイイン

打ったボールは楯無の頬をスレスレで飛んでいき、センターがキャッチしようとした瞬間にホップアップしてスタンドの観客に減り込んだ。

私は一周してから両手を上にあげて大きく息を吸い込んだ。

「……これが輝かしき未来への懸け橋だ！」

「「「「「おっしゃああああ！」「」「」「」

「「「「「ばかなああああ！」「」「」「」

「ゲームセット！」

審判の掛け声で整列と礼と景品をもらってから帰宅準備しているとラウラが近寄ってきた。

ちなみに審判はニヤンコ先生です。今さらに申し訳ないけどね、でも案外正確なジャッジしてくれてたから後でイカと酒だしてあげよう。

うん、私って優しい

「自画自賛してるとこ悪いが質問していいか？」

「どうぞどうぞ」

「どうして不可視のボールを打てたんだ？ 私は茜のボールも、あの女のボールも眼帯外しても見えなかった」

「あー、茜は私の苦手なコース知ってるからね。そこに決めに来的时候は投げてくるかなって思ったんだ」

「あいつの場合は？」

「あの人はISの能力使ってたからね、地面に影がなかったら打てなかったね」

「な、影か……盲点だった……」

うん、わかってくれたみたいだ……ときにあの人がISの能力使ってたことに対して何か反応がないの？

不正じゃないの？ 野球でしょ？ だめでしょ、スポーツマンシップはどうした少女少女よ。

「何言ってるのさ、題名にベイスボールって書いてあるじゃん」

「シャルのお姉さん……そこはさも当たり前みたいに言っとこじゃないと思うよ？ 題名は何かのネタだと思ってたよ」

「お姉さんいないよ!？」

「私に嘘ついてたバツだ」

ほっぺを膨らませてそういうと鈴が後ろからひよこつと出てきた。  
最近鈴はどこにでもいる気がするんだよね、お風呂とか「あんた見てると自分は普通だっと思って思える（胸が）」という理由で勝手に入ってきたこともあった。

もう子供じゃないんだから一人で入りなさいって何回いったことやら……。

「シャルロット諦めたほうがいいわよ？ 天音は人をいじるの好きだから。千冬さんをいじってるのみたときは血の気が引いたわ」

「え！？ 天音は織斑先生にまでチョツカイかけてるの！？ 命知らずにも程があるでしょ！」

あー、あつたねえ……。一夏が誘拐されたときだったっけ？ 私と茜と美咲が先に助け出して千冬さんに引き渡したら、日本に帰国したあとに泣きそうになりながら怒られたっけ……。

それで「心配してくれたんですか？ いやあ一夏大好きっ子だとは思ってたけど、まさか俺達を心配してくれたなんて嬉しいですねえ。ハッハッハッ」っていったらアイアンクローされたなあ。

「イロイロ面倒見切れないけど、見ないと大変なのよシャルロット」

「ごめんね…今まで天音は意外としっかりしてるし、強いから平気だと思ってたけど、これからは僕も面倒見るよ」

「すまない……私もだ」

「鈴さん、言ってくださったら私もお手伝いしましたのに……これからは私も気をつけますわ」

「ふむ、愛人の面倒を見るのは主人である私の役目だな。任せろ」

「みんな……ありがとう！」

そして5人の少女達は抱き合い、友情がより一層固い物となった。  
「というか酷くないか？私だって好き勝手するときとしないときがあるんだよ？」

「基本あっちゃんは無茶するよね」

「あつのほほんさん久しぶり、ていうか茜と美咲の前ではしないよ？」

「なんで？ 私の前でもしないでよ（ペシペシ）」

だってあの人達の前で無茶したら、骨の一本や二本じゃすまないんだもん……。

それに比べて楯無さんやのほほんさんは優しいほうだから甘えちゃうというかね？ うん、なでとこ

「おーよしよ」のほほんさん！ いうい「ハッハッハッ美咲はの

ほほんさんのことがホントに好きなんだなあ」

「うん！可愛いもん！」

まあ女同士もいいけどさ、私は止めないよ？ 父さんは修羅になると思うけどね。

母さんもきつとOKしてくれると思う……たぶん。

一応確認しておくか？

「何かすごい勘違いしてる最中申し訳ないけど、帰らない？ネネちゃん」

「んーそうだね皐」

おバカ×6+のほほんをおいてグラウンドから出る。

楯無さんと茜と京の姿が見えないけど、どうしたんだろう……一応分身に皐と一緒に帰らせて探しに行くかな。

もちろんステルスで。

次回「卯月天音の暴走」

お楽しみに！！

「なにしてるの？ネネちゃん」

「悪かったと思ってる。悪気はないけど悪意はあった」

## 29話「茜を追って〇〇と再会」

皋を寮に置いてから、茜と楯無さんと京を探してグラウンドの周りを歩く。

茜の足音も気配も声も匂いもしないので、なかなか見つからない。普段はこんなことないのになあ……

「はあ、勘を頼りにするしかないのか……めんどくさいなあ、帰ろっかな？」

優勝商品のミルクティーのキャップを開けて、一口飲むと眠くなった。

疲れてるのだと思い、そこら辺のベンチにねっころがり目を閉じた。

「……………すう……すう」

目を閉じて数秒で寝息をたてはじめた天音を、木陰から見ていた人物がいた。

その人はだいぶ大きいパーカーを羽織っていて天音を起こさないように、寝顔を携帯で撮ってからまひるに送る。

そしてポケットから鈴のついた首輪を取り出して、天音につけて満足そうに微笑んだ。

「……ふふふ、兄様…貴方は私の……」

口元を歪めてニヤリと笑う

「貴方、天ちゃんに何してるの？」

「っ！」

いつの間にか後ろにいた茜をチラ見してから、その場を走りさろうと駆け出す。

しかし、前に楯無が立ち塞がり逆方向には京がたっていた。

「くっ！」

「さあ、そのフードの下を見せてもらいましょうか」

「……………」

「抵抗しても無駄。素直に顔見せた方が身のため」

逃げ場がない謎の少女に変態の魔の手がのびる。

楯無さんと京がフードさんに近づいて行って、そこから凌辱プレイの始まりだった。

「違うから！ていうか変態認定されてるの？！私は」

「そーなのです。あひると同じ感じです」

「そ、そんなぁ……」

ベンチにねっころがってた天音が、体を物凄く怠そうに起こす。いつものことなのだが、怠いなら無理して起きることないのに、と思ってしまう楯無であつた。

「天ちゃん起きてたの？」

「茜の匂いがしたから起きた」

「（この人達が兄様に気を取られてる今がチャンスですよ！）」

フードを被った少女は一気に駆け出した。

そのときフードが取れてしまったが気にしてられない。

今はとにかくこの場から立ち去ることが一番重要なことから。

「…あつ！待ちなさい！」

楯無が追い掛けようとした瞬間に、楯無の目の前にソードビットが現れて行く手を塞いだ。

勢いでビームを撃ちそうになったがギリギリで思い止まった。  
楯無はキツと天音を睨みつけて、ドスドスと近寄ってきた。

「天音ちゃん！　なんで邪魔するの！？それともあの子と知り合い！？」

「んー、知り合いつてわけでもないけど会ったことがある」

「いつ！？どこで！？だれと！？」

「わかんない」

いつもの飄々とした態度で楯無の質問に答える天音に、京と茜はため息を吐きながら見ていた。

第一天音に理屈は通用しないことが多々あるが、それを知ってるのは天音の無茶が一番激しかった頃を見てる人だけだ。

天音の周りにいる人はだいたい知ってるが、茜や美咲には遠く及ばない。

「だいたい天音ちゃんは無防備過ぎるのよ！！もう少し周りを警戒したらどうなの！？」

「そんなこと言われてもー」

「まったく…天音ちゃんは副会長としての自覚ある？」

「……………？　ああ！はいはいありますよ？」

「忘れてたわね」

楯無の視線から逃れるように、立ち上がり歩き出す。

その時、リーンという風鈴にも似た音がなった、全員「ん？」と周りを見渡すがもちろん何も無い。

「あれ？天ちゃん、IS起動させてないよね？」

「うん。させてないけど」

「じゃあなんでこの音が？」

3人の視線が天音に集中する。

すると茜の目がスウッと鋭くなり、天音の顎に手をやって上にあげた。

「……………それって首輪？」

「へえ、挑戦かな？」

「天ちゃんは私のものってことかな？ ふふふ、いい度胸ね」

茜は天音の首に付いている首輪をとろうとするが、なぜかとれない……ベルトみたいな物でも、カチツと止める物でもなかったのだ。これをどうやって天音の首に付けたのかは、付けた本人を逃がしてしまったので謎に包まれた。

茜は苦虫を潰したような顔をしたあと天音からゆっくり離れた。

「……どうしてくれようか」

「そうねえ、さっきの子を探し出すしかないんじゃないかしら？」

「そうだね、それが一番手っ取り早い」

茜達はうんうんと頷いてその場を去っていった。

一人置いてかれた天音は、何やら後ろから嫌な気配がしたので木に登り、身を隠した。

「うつちゃー！ーん！なっ、いない！？」

あひるが校舎の窓から飛び降りてきたのを確認すると、息を殺してジツとする。

殺気でバレないように目をとじて気配を消すことに集中する。

「く！弥生ちゃんからの情報は正確だから楯無の女狐に運ばれたの？だとしたらうつちゃんの部屋へゴー！ー！！」

そっついながら壁を走りながら、寮に向かって凄いスピードで走り去って行った。

天音は地面に降りてからあひるが飛び降りてきた窓に目を向ける。

「よくあんなところから飛び降りようと思ったな、あいつ」

「まひるも変わらないわね」

声のする方を見ると、中学時代不動の四天王の一人とか言われてた人が木にもたれ掛かっていた。

ぽーにーてーるーとか言う髪型でちっこくて小柄でまな板（わかる人にはわかる）

この再会はあまり好ましくない、だがしかし……………。

「卯月天音…バカレンジャーレッド！」

「四ノ宮奈緒…バカレンジャーイエロー！じゃない！何させるのよ！！」

うん、相変わらずノリがいい…………これが原因でちよくちよくちよつかいだしたら、この人があひるに嫉妬されて大変だったみたいだ。おつかれさん

「君のせいだからね！？あれが原因で第二次抗争が勃発したんだから少しは反省してくれないかな！？」

「後悔はしてるよ？」

「反省しなさい！」

「肩書からは想像できない性格ですなっちゃん」

「その呼び方やめて！とあるジュースと被るから、それとあの肩書は勝手につけられたものだから私はどうでもいいの」

えっ へんと言わんばかりに腰に手を当てて、まな板をビシッと張る。四ノ宮奈緒は勉強、スポーツはできるのだが胸がまな板なのが痛いところなのだ。

あつ、あと料理も絶望的だよ？

「……今失礼なこと考えなかった？」

「胸オツキクナリマシタネ」

「でしょー！私も少し成長したかなって思ってたんだー」

「まな板なのは変わりませんがね」

「バウアアアアカアアア！！！！」

奈緒を中心に風が吹くくらい大きな声で罵倒を飛ばされた。

いやあー、ついつい口走ってしまったよー禁句だとは思ってたんだけどね？他の四天王の方からいじられてるのを思い出したらやってみたくなっちゃってさ。

「バカバカバカバカ！！天音のバーカ！うわーん」

「ほれほれ、これやるから泣き止みなさいな」

そういつて食べかけのメロンパンを渡すと、奈緒はやけになってバクバクと食べる。

少しずつ笑顔になっていつてるのを見て少し安心する。

「（あつぶねえ……この人泣かしたら茜と美咲に何されるかわかったもんじゃない。あいつら何故かこの人のこと大変気に入ってるから、さっきの声あいつらに聞こえてないよね？）」

「ねえ天音、なんでIS動かせるようになったの？」

「さあ…なんでだろ？ピ○ミンの歌歌いながらタッチしたら動いたよ？」

「そんなばかな」

信じられないような顔されたが気にしない、さてこの人と少し遊ぶか。

「赤ピ○ミンは火につよいー」

「青ピ○ミンはおぼれないー」

「黄ピ○ミンは高く飛ぶー」

「紫ピ○ミン力持ちー」

「白ピじゃない！こんなことしに来たんじゃないのに天音のせいであらう！」

「私のせい！？心外だ！」

「そうじゃない！いきなり歌いだして何がしたいのよ！」

「見てのとおり楽しみたいんだよ！」

「何よ！このツルペタ天音！」

「男だから平気だもーん！（ほんの1時間前まで女でした）」

「ふーんだ！また鈴ちゃんと仲良くするもん」

そっいつてまたまた走り去って行った。

最近走り去るのが流行りなのかと思うくらい、走り去る人が多いと思う。

流行りにのっとくか？

### 30話「所詮人」

「だーからっ！ミルクティーよりココアだつて！」

「何言つてんの！？ココアより断然ミルクティーのほうがいいよ！この甘党！！」

「激甘党の天音に言われたくないよ！私は健全な女子高生だもんっ！」

「全然健全じゃないよ！ココアとかなんだし、確かに暖かくて甘くて美味しいけど、ミルクティーの比じゃないし！」

「何よー、ミルクティーとか暖かくて甘くて美味しいし香りもいいけど、ココアのほうが10倍いいね！このシスコン！」

「シスコンじゃないし！今関係ないし！バーカバーカ」

「バカって言うほうがバカなんだし！」

天音と奈緒がいがみ合いながら、取っ組み合いを始めたのを横目で見ていた茜がため息をついた。

ことの発端は食堂で料理を注文するときに、天音がミルクティー、奈緒がココアを同時に口にしたのが始まりだった。

食堂では自分達の意見を言い合う形だったが、部屋に戻っていくうちに口喧嘩に発展し、現在天音の部屋で喧嘩中。

「はあ…この二人気が合いそうなのに、ちよくちよく喧嘩するよね」

「だねえ、というか私はお兄ちゃんにシスコンであってほしい」

「さらっと本音いうのやめようか」

取っ組み合ってる二人を見ながらまったりしていると、放送が流れた。

『専用機持ちは直ちに職員室に集合しろ。繰り返す……』

「天ちゃん呼ばれたよ」

「「だあああ！こんなときに！！」」

天音と奈緒は走って部屋を出た。

『私が最初に職員室にいくんだ！』

『いいや、私よ！』

今だに言い争っているみたいで、茜と美咲は呆れてため息を吐いた。

—•—T<sub>1</sub>T<sub>2</sub>T<sub>3</sub>T<sub>4</sub>T<sub>5</sub>T<sub>6</sub>T<sub>7</sub>T<sub>8</sub>T<sub>9</sub>T<sub>10</sub>T<sub>11</sub>T<sub>12</sub>T<sub>13</sub>T<sub>14</sub>T<sub>15</sub>T<sub>16</sub>T<sub>17</sub>T<sub>18</sub>T<sub>19</sub>T<sub>20</sub>T<sub>21</sub>T<sub>22</sub>T<sub>23</sub>T<sub>24</sub>T<sub>25</sub>T<sub>26</sub>T<sub>27</sub>T<sub>28</sub>T<sub>29</sub>T<sub>30</sub>T<sub>31</sub>T<sub>32</sub>T<sub>33</sub>T<sub>34</sub>T<sub>35</sub>T<sub>36</sub>T<sub>37</sub>T<sub>38</sub>T<sub>39</sub>T<sub>40</sub>T<sub>41</sub>T<sub>42</sub>T<sub>43</sub>T<sub>44</sub>T<sub>45</sub>T<sub>46</sub>T<sub>47</sub>T<sub>48</sub>T<sub>49</sub>T<sub>50</sub>T<sub>51</sub>T<sub>52</sub>T<sub>53</sub>T<sub>54</sub>T<sub>55</sub>T<sub>56</sub>T<sub>57</sub>T<sub>58</sub>T<sub>59</sub>T<sub>60</sub>T<sub>61</sub>T<sub>62</sub>T<sub>63</sub>T<sub>64</sub>T<sub>65</sub>T<sub>66</sub>T<sub>67</sub>T<sub>68</sub>T<sub>69</sub>T<sub>70</sub>T<sub>71</sub>T<sub>72</sub>T<sub>73</sub>T<sub>74</sub>T<sub>75</sub>T<sub>76</sub>T<sub>77</sub>T<sub>78</sub>T<sub>79</sub>T<sub>80</sub>T<sub>81</sub>T<sub>82</sub>T<sub>83</sub>T<sub>84</sub>T<sub>85</sub>T<sub>86</sub>T<sub>87</sub>T<sub>88</sub>T<sub>89</sub>T<sub>90</sub>T<sub>91</sub>T<sub>92</sub>T<sub>93</sub>T<sub>94</sub>T<sub>95</sub>T<sub>96</sub>T<sub>97</sub>T<sub>98</sub>T<sub>99</sub>T<sub>100</sub>T<sub>101</sub>T<sub>102</sub>T<sub>103</sub>T<sub>104</sub>T<sub>105</sub>T<sub>106</sub>T<sub>107</sub>T<sub>108</sub>T<sub>109</sub>T<sub>110</sub>T<sub>111</sub>T<sub>112</sub>T<sub>113</sub>T<sub>114</sub>T<sub>115</sub>T<sub>116</sub>T<sub>117</sub>T<sub>118</sub>T<sub>119</sub>T<sub>120</sub>T<sub>121</sub>T<sub>122</sub>T<sub>123</sub>T<sub>124</sub>T<sub>125</sub>T<sub>126</sub>T<sub>127</sub>T<sub>128</sub>T<sub>129</sub>T<sub>130</sub>T<sub>131</sub>T<sub>132</sub>T<sub>133</sub>T<sub>134</sub>T<sub>135</sub>T<sub>136</sub>T<sub>137</sub>T<sub>138</sub>T<sub>139</sub>T<sub>140</sub>T<sub>141</sub>T<sub>142</sub>T<sub>143</sub>T<sub>144</sub>T<sub>145</sub>T<sub>146</sub>T<sub>147</sub>T<sub>148</sub>T<sub>149</sub>T<sub>150</sub>T<sub>151</sub>T<sub>152</sub>T<sub>153</sub>T<sub>154</sub>T<sub>155</sub>T<sub>156</sub>T<sub>157</sub>T<sub>158</sub>T<sub>159</sub>T<sub>160</sub>T<sub>161</sub>T<sub>162</sub>T<sub>163</sub>T<sub>164</sub>T<sub>165</sub>T<sub>166</sub>T<sub>167</sub>T<sub>168</sub>T<sub>169</sub>T<sub>170</sub>T<sub>171</sub>T<sub>172</sub>T<sub>173</sub>T<sub>174</sub>T<sub>175</sub>T<sub>176</sub>T<sub>177</sub>T<sub>178</sub>T<sub>179</sub>T<sub>180</sub>T<sub>181</sub>T<sub>182</sub>T<sub>183</sub>T<sub>184</sub>T<sub>185</sub>T<sub>186</sub>T<sub>187</sub>T<sub>188</sub>T<sub>189</sub>T<sub>190</sub>T<sub>191</sub>T<sub>192</sub>T<sub>193</sub>T<sub>194</sub>T<sub>195</sub>T<sub>196</sub>T<sub>197</sub>T<sub>198</sub>T<sub>199</sub>T<sub>200</sub>T<sub>201</sub>T<sub>202</sub>T<sub>203</sub>T<sub>204</sub>T<sub>205</sub>T<sub>206</sub>T<sub>207</sub>T<sub>208</sub>T<sub>209</sub>T<sub>210</sub>T<sub>211</sub>T<sub>212</sub>T<sub>213</sub>T<sub>214</sub>T<sub>215</sub>T<sub>216</sub>T<sub>217</sub>T<sub>218</sub>T<sub>219</sub>T<sub>220</sub>T<sub>221</sub>T<sub>222</sub>T<sub>223</sub>T<sub>224</sub>T<sub>225</sub>T<sub>226</sub>T<sub>227</sub>T<sub>228</sub>T<sub>229</sub>T<sub>230</sub>T<sub>231</sub>T<sub>232</sub>T<sub>233</sub>T<sub>234</sub>T<sub>235</sub>T<sub>236</sub>T<sub>237</sub>T<sub>238</sub>T<sub>239</sub>T<sub>240</sub>T<sub>241</sub>T<sub>242</sub>T<sub>243</sub>T<sub>244</sub>T<sub>245</sub>T<sub>246</sub>T<sub>247</sub>T<sub>248</sub>T<sub>249</sub>T<sub>250</sub>T<sub>251</sub>T<sub>252</sub>T<sub>253</sub>T<sub>254</sub>T<sub>255</sub>T<sub>256</sub>T<sub>257</sub>T<sub>258</sub>T<sub>259</sub>T<sub>260</sub>T<sub>261</sub>T<sub>262</sub>T<sub>263</sub>T<sub>264</sub>T<sub>265</sub>T<sub>266</sub>T<sub>267</sub>T<sub>268</sub>T<sub>269</sub>T<sub>270</sub>T<sub>271</sub>T<sub>272</sub>T<sub>273</sub>T<sub>274</sub>T<sub>275</sub>T<sub>276</sub>T<sub>277</sub>T<sub>278</sub>T<sub>279</sub>T<sub>280</sub>T<sub>281</sub>T<sub>282</sub>T<sub>283</sub>T<sub>284</sub>T<sub>285</sub>T<sub>286</sub>T<sub>287</sub>T<sub>288</sub>T<sub>289</sub>T<sub>290</sub>T<sub>291</sub>T<sub>292</sub>T<sub>293</sub>T<sub>294</sub>T<sub>295</sub>T<sub>296</sub>T<sub>297</sub>T<sub>298</sub>T<sub>299</sub>T<sub>300</sub>T<sub>301</sub>T<sub>302</sub>T<sub>303</sub>T<sub>304</sub>T<sub>305</sub>T<sub>306</sub>T<sub>307</sub>T<sub>308</sub>T<sub>309</sub>T<sub>310</sub>T<sub>311</sub>T<sub>312</sub>T<sub>313</sub>T<sub>314</sub>T<sub>315</sub>T<sub>316</sub>T<sub>317</sub>T<sub>318</sub>T<sub>319</sub>T<sub>320</sub>T<sub>321</sub>T<sub>322</sub>T<sub>323</sub>T<sub>324</sub>T<sub>325</sub>T<sub>326</sub>T<sub>327</sub>T<sub>328</sub>T<sub>329</sub>T<sub>330</sub>T<sub>331</sub>T<sub>332</sub>T<sub>333</sub>T<sub>334</sub>T<sub>335</sub>T<sub>336</sub>T<sub>337</sub>T<sub>338</sub>T<sub>339</sub>T<sub>340</sub>T<sub>341</sub>T<sub>342</sub>T<sub>343</sub>T<sub>344</sub>T<sub>345</sub>T<sub>346</sub>T<sub>347</sub>T<sub>348</sub>T<sub>349</sub>T<sub>350</sub>T<sub>351</sub>T<sub>352</sub>T<sub>353</sub>T<sub>354</sub>T<sub>355</sub>T<sub>356</sub>T<sub>357</sub>T<sub>358</sub>T<sub>359</sub>T<sub>360</sub>T<sub>361</sub>T<sub>362</sub>T<sub>363</sub>T<sub>364</sub>T<sub>365</sub>T<sub>366</sub>T<sub>367</sub>T<sub>368</sub>T<sub>369</sub>T<sub>370</sub>T<sub>371</sub>T<sub>372</sub>T<sub>373</sub>T<sub>374</sub>T<sub>375</sub>T<sub>376</sub>T<sub>377</sub>T<sub>378</sub>T<sub>379</sub>T<sub>380</sub>T<sub>381</sub>T<sub>382</sub>T<sub>383</sub>T<sub>384</sub>T<sub>385</sub>T<sub>386</sub>T<sub>387</sub>T<sub>388</sub>T<sub>389</sub>T<sub>390</sub>T<sub>391</sub>T<sub>392</sub>T<sub>393</sub>T<sub>394</sub>T<sub>395</sub>T<sub>396</sub>T<sub>397</sub>T<sub>398</sub>T<sub>399</sub>T<sub>400</sub>T<sub>401</sub>T<sub>402</sub>T<sub>403</sub>T<sub>404</sub>T<sub>405</sub>T<sub>406</sub>T<sub>407</sub>T<sub>408</sub>T<sub>409</sub>T<sub>410</sub>T<sub>411</sub>T<sub>412</sub>T<sub>413</sub>T<sub>414</sub>T<sub>415</sub>T<sub>416</sub>T<sub>417</sub>T<sub>418</sub>T<sub>419</sub>T<sub>420</sub>T<sub>421</sub>T<sub>422</sub>T<sub>423</sub>T<sub>424</sub>T<sub>425</sub>T<sub>426</sub>T<sub>427</sub>T<sub>428</sub>T<sub>429</sub>T<sub>430</sub>T<sub>431</sub>T<sub>432</sub>T<sub>433</sub>T<sub>434</sub>T<sub>435</sub>T<sub>436</sub>T<sub>437</sub>T<sub>438</sub>T<sub>439</sub>T<sub>440</sub>T<sub>441</sub>T<sub>442</sub>T<sub>443</sub>T<sub>444</sub>T<sub>445</sub>T<sub>446</sub>T<sub>447</sub>T<sub>448</sub>T<sub>449</sub>T<sub>450</sub>T<sub>451</sub>T<sub>452</sub>T<sub>453</sub>T<sub>454</sub>T<sub>455</sub>T<sub>456</sub>T<sub>457</sub>T<sub>458</sub>T<sub>459</sub>T<sub>460</sub>T<sub>461</sub>T<sub>462</sub>T<sub>463</sub>T<sub>464</sub>T<sub>465</sub>T<sub>466</sub>T<sub>4</sub>

「ゴー—ール！！—等賞」

「いや今のは私のほうがはかった!!」

「は？何いつてんの？なっちゃんはおバカだねえ」

「むき——！審判今の私のほうがはやかっただよね！」

後ろを振り向いて織斑先生にそういう……そう、運の悪いことに織斑先生。

天音は逃げようと足に力を込めると、首ねっこ捕まれた。

「廊下を走るな馬鹿者」

バシンバシン

「「つううう……………」」

二人は叩かれたところを抑えてうずくまる。

それをお構い無しで織斑先生は、全員揃ったことを確認すると説明し始めた。

「ちょうど5分前に篠ノ之束が間違えてミサイルのボタンを押したと自首してきた」

「…………（げしげし）」

「…………（げしげし）」

「諸君らにはそのミサイルの破壊を担当してもらう。指揮はラウラがとれ、私はあの馬鹿を始末して来る」

「…………（ボカボカ）」

「…………（ボカボカ）」

「しかし教官。そんな重要な役、私に勤まるかどうか……………」

「…………（ぺしぺし）」

「……（ぺしぺし）」

「心配するな、お前ならやれる」

「……（パン、ガツ、シュツ、ガツ、パン）」

段々と織斑先生の額に血管の筋が浮かび上がってきた。それに気づかずに激しい攻防を繰り返す馬鹿二人。

「ムキーーーー！！！！」

「いい加減にしろ！！この大馬鹿者おお！！！！」

バギイ！

「へぶつち！！！！」

「とつとと作戦に取り掛かれ！」

右ストレートで沈めた二人に鋭い視線をあげせながらそういうと何処かにいってしまった。

天音と奈緒はしばらくの間悶絶しながら、お互いをけりあった。

「まったく……どっかの誰かさんのせいで酷い目にあっただわ」

「ほんと、どっかの誰かさんのせいで」

そういいながら成層圏ギリギリのところを浮かびながら、睨み合っていた。

ちよくちよくラウラやセシリアの制止が入って、本格的なISバトルにはならないものの一発触発の状態だった。

隣にいる一夏と箒もドキドキハラハラしている。

「じゃあこうしよ、ミサイルを破壊したほうが勝ちってことで」

「いいよ！負けたほうが一週間ミルクティー又はココア禁止ね！」

お互い不敵に笑うと天音がトランザムを起動させた。

それを見た奈緒はIS『四ノ神』の武器、刀の形をして青い電気を纏った『麒麟』を展開して天音に切り掛かった。

天音はひよいとかわす。

「何をしているのですか！四ノ宮先輩」

「そうこなくっちゃね！なっちゃん」

GNソードVを展開して反撃し始めた天音を一夏が、奈緒は箒が止めに入った。

奈緒のほうは紅椿の機動性でなんとか抑えられている。

それを見た天音はGNバスターソードにして、ミサイルがくる方向に向けて構えた。

「なっ天音！？まだ早いぞ！」

「知ったことかああ！！」

ライフルモードにして空にビームを放つ、一夏は「まだ来てないねえよ……」って呟いていたけど気にしない。

第一こいつらは勘違いしてるのだ、これはビームはビームでもビームサーベルのビームなのだ。

『おい、天音！早過ぎるぞ！何をやっている！？』

「何勘違いしてんのか知らないけど、黙ってみてろ」

ビームを下に移動させていくと、ビームの光とはまた別に白くデッ

カイ光が現れた。

『も、目標消滅確認』

『えっ？どういうこと？』

「これはどでかいビームサーベルなのだ！」

「卑怯よ！天音」

「卑怯汚いは敗者の戯言なのにや」

悔しそうにポニーテールを逆なでながら、歯を食いしばっているのを見て、ニヘラッと嘲笑うと奈緒は奇声を上げて悔しがった。  
こうして奈緒の一週間ココア禁止と天音の織斑先生とのワンツーマンお説教タイムが決定した。

「なんで私まで……」

「卑怯なことしたのが悪いのよ、ベー」

「なんだよペチャパイナップル」

「言うに事欠いてペチャパイですって！？表出る！」

「あれー？ペチャパイ何て言っていないけど、自覚あったの？」

「ムキーーーー！！このロリコン！シスコン！今度は私にどんな卑猥なことをするつもり！？」

「しないよ！したこともないよ！？あたかもしたことがあるような風に言わないでよ！！」

「私に妹属性があるからって！私に胸がないからってやっていいことと悪いことがあるよ！！」

「なにもしないから！悪かったからそういうの大声で言うのやめて！」

ぎゃーぎゃーやっていたら、黒スーツをきた人を発見し、すぐさま身を隠した。

ほぼ同時に掃除用具入れに入ったので、二人とも抱き合ってる状態だった。

「（このままじゃ、茜と美咲に見つかったときに酷い目にあうかもしれない……何としてでもなっちゃんを外に押し出さなくては……いや待て、押し出したときに楯無さんに見つかったらただ事じゃなくなる。私はどうしたらいいんだー！）」

「（やばっ！天音と抱き合ってる……胸当たってるのに何の反応もないなんて……って違う！こんなとこまひるに見つかったら第三次抗争勃発しちゃう。天音を押し出さなくちゃ……でもそのときに見つかったら元も子もない。どうしようどうしよう）」

お互いビクビクしながらその場でジツとして、物音がしなくなるまで待った。ゆっくりと足音が近づいてくる。規則正しい足音はきつと真面目な先生だからだ、見つかったら面倒なのは間違いない。

「（見つかって怒られてるとこに偶然茜と美咲がくる可能性は捨て難い……今日の星占いは1位だったのにどうして？）」

「（今日の星占いは最下位だったから何かあるんじゃないかって思ったんだけど、まさかホントにこんな大変なことになるとは……）」

お互い考えてることは似通っているが、一つだけ違うものがあつた。それはその人の本質というか本性というか性格みたいなもの。

「（なっちゃんを罠に使うか）」

「（ここは天音と協力するしかないか）」

これが天音と奈緒の最大の違いだった。

足音が掃除用具入れの前で止まり、非情にもその扉を開けられた。そこにいたのは織斑先生、茜、美咲、まひるの四人だった。

「何をしている？」

「「「いやあああああ！！！！ごめんなさーい！！！！」」」

「むっ、待て！」

全速力で逃げようとする天音と奈緒の腕を掴む。

その素晴らしく無駄のない動きに全員が感心しながら、ただ呆然と見ていた。が……………

「ちっ、逃げられた」

「「「えっ？」」」

織斑先生は二人の腕を離すと、二人がスウツと消えた。

「まさか残像を残すとはな。しかも触れられるとは……………何処まであいつらの逃げ足は速いんだ？」

呆れたようにいつの間にか開いている窓を見つめる。

グラウンドの方で陸上部のエースを軽く抜いて寮の方に逃げている影が二つあった。

「四ノ宮と卯月はよく喧嘩するな」

「仲良しなんですよ」

「奈緒先輩ってお兄ちゃんみたいだから、お兄ちゃんと双子って感じだよ」

「あらあら、奈緒ったらお仕置きが足りなかったみたいね……ふふふ」

○その頃

「もう！天音のせいで！」

「私のせいにしないでよ！それになに？」にゃああああ『って、猫のマネ？』

「それなら天音だって言つてたじゃん！このよわむしすこん！」

「バカヤロウ！あの二人がどれだけ危険かしてんのかコノヤロー  
ー！」

「重々承知よ！このロリペドロ・グランドキャニオン！」

「なんかカツコイイけどすごく嬉しくない！」

ぎゃーぎゃー

ぎゃーぎゃー

ぎゃーぎゃー ぽいぽい

ぎゃーぎゃーぎゃーぎゃー

.....

.....

ガチャ

「天ちゃんいる？」

「お兄ちゃんきたよー？」

茜と美咲がいつも鍵が掛かってない扉を開けて中に入る。

二人は天音にオートロックを進めたのだが「鍵開けるのめんどくさ

い」と欠伸をしながら断られた。

中に進んでいくと、色んなものが散らかっていて喧嘩していたことを物語っていた。

しかし本人らは呑気にベッドで丸くなって寝ていた。

「喧嘩して疲れてねちゃったのかな？」

「似てるよね、行動パターンとかさ」

「うむ、ここまで似てると姉妹に見えるな」

「僕こんな感じの妹ほしかったなあ」

「流石私の愛人だ。嫁も見習ってほしいくらいだ」

「一緒に寝てみたいですわね……」

「やめといた方がいいわよ。変な世界に目覚めたくなければ」

何故か皆が大集合して、部屋の片付けを始めていた。

簪の動きがいつもよりハキハキしていて、他の人の2倍作業がはやい。

「私達もやるっか」

「そっだね」

そうして茜と美咲は片付けに参加した。  
時々、聞こえてくる天音の寝言にその場の全員がドキドキしながら  
片付けは進んでいった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7572v/>

---

I S 卑怯は正義だ！

2011年11月23日19時51分発行